
いつか きっと

水嶋ゆり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか きっと

【Zコード】

N4897E

【作者名】

水嶋ゆり

【あらすじ】

普通のサラリーマンである笹崎良はふとしたことがきっかけで奇妙な経験をする。その経験はいざれ彼の人生に大きな影響を及ぼすのだ。

プロローグ

それを初めて身体で感じたのは今から半年ほど前のことだった。彼。笹崎 良は東京に住む28歳のごく普通のサラリーマン。ところがあることがきっかけで大変な経験をすることになるのだ。そのこととは・・・

今から半年前の九月の事。会社の同僚達とアフター5を楽しもうとする居酒屋で焼酎の水割りを2〜3杯飲んだところで突然頭の中が真っ白になり、手足が痺れ、耳鳴りがしてきた。酔ったわけではない。元来彼は田舎育ちということもあり、小さい頃から水代わりにどぶろくを飲まされていたため、酒には滅法強いのだ。

（なんなんだ。これは！）
周囲の物音が何一つ聞こえない。だが両耳ははつきり彼等の行動を捉えている。

（一体なんなんだ！）

時間にすればほんの20〜30秒程度だったに違いない。次の瞬間突然周囲の音が聞こえだし、痺れも治まった。その時間が彼には何十分にも思えたが、同僚の会話には全く途切れたところがない。さつきの話の続きをなのだ。

（何だつたんだろう？）

そう思いつつ珍しく酔つたのか、と思い直しその夜は終わった。
その後しばらくはその奇妙な感じは現れなかつたために彼はすっかりそのことを忘れていた。

それから半年後の今宵、またそれを感じた。今回は前回のものよりも長く、更に悪いことには田の前が真っ暗になつた。たとえ夜でも街中はライトが煌々（こうこう）と輝き、車のライトもある。完全に真っ暗になることなど有り得ないのだ。ところが帰宅途中の彼をまたあの感覚が襲つたのだ。と、その時、微かに頭の中に響い

てぐる声がした。じつと耳を凝らすとそれは『助けて』と言つてい るようだつた。それは何度も何度も言つていた。『誰だ!』彼は声 に出して叫んだが、それは彼自身が思つただけで実際は頭の中で響 いただけだつた。しかし声の主には届いたらしく、

『早く来て!』

と返事が返つてきた。それに答えるように彼は続けた、
『どこへ来いと言つてるんだ!お前は一体誰なんだ!』

すると、

『鼓島。鼓島。』

2回程返答があつてブツツと突然声は聞こえなくなつた。同時に彼 の身体は元通りになつた。同様に帰宅途中のサラリーマンが不思議 そうに彼の顔を見ていたので、長い時間立つ立つたままだのだろうと推測できた。

「ああ、すみません。何でもないんです。」

そのサラリーマンに下手な言い訳をすると彼は一目散にアパートに 帰つた。

着替えをするのもそこにしてパソコンに向かい、“鼓島” という名前を検索した。少し間があつたが、たつた1件ヒットする ものがあつた。急いで開いてみた。

鼓島くつづみじま> 東京都下に属し、島の形が和楽器の鼓の 形に似ているところから

『鼓島』と呼ばれる。島の周囲150キロメートル。山と海に囲ま れた人口20

0人程度の小さな島である。住民は漁業と農業を主に

生活の糧としており、殆ど自給自足の生活である。云々。

「東京都下?・・・へえ。自給自足ねえ。・・・な、何だつてえ

!-!

鼓島に関する記事を読んでいた彼は、最後の文章を見てひっくり返

るほど驚いた。

しかし今から約60年前、海底火山の爆発により島そのものが消滅

現在はその正確な位置すら特定できない。

「島が消えた？な、何なんだ！じゃあれば・・・あの声は一体？」
その時パソコンのディスプレイがパッと強い光を放ち、彼の身体全体を包み込んだ。

次の瞬間、彼の身体そのものが消えていた。あとは何も変わらなかつたような独身男の部屋があつた。

ピチャ。水滴が顔に当たり“冷たい。”と感じ目が覚めた。覚めたといつても辺りは薄暗い。しかしヒソヒソ話が聞こえるところからすると無人ではなさそうだ。

「あ！気が付いた。みんな！気が付いたよ！」

子供の声だ。するとガサガサと音がして周囲に人が集まってきた。

「良かつたなあ。」

皆口々に同じ事を言つてゐる。

（何が良かつたんだ！オレはパソコンを見ていたんだぞ！）

怒鳴りそうになつたところで意識がはつきりしてきた。自分を覗き込んでいる人々の格好が変なのだ。大座布団のようなものを頭から被り、着ているものはツギハギだらけ。それもかなり汚れていて、おまけに身体からは異臭を放っているのだ。彼、笹崎 良は勢いよく起き上がつた。途端に後頭部に鋭い痛みが走つた。

「イッ！」

「さつき石にぶつけたんだよ。それにしてもどうしてあんなとこりに倒れていたの？B29が来たら大変だつたのに。」

さつきの子供だ。・・・え？ 今何て言つた？B29？え？

「君！今B29って言つた？」

「うん。聞こえない？あの音。さつき空襲警報がなつたからみんな防空壕に逃げるところだつたんだ。その途中でお兄さんを見つけたんだよ。それでみんなでこの中に運んだんだ。お兄さん、どこから来たの？名前は？」

「ぼうくづくづくしうけいほうだつて？一体何の話だ？オレはドラマのロケ地に来ちまつたのか？」

頭の中がグラグラする。オレはどうなつちまつたんだ！

「お兄さんの言つてゐる意味が分らないよ。頭をぶつけたせいでおかしくなつたんじゃないの？」

「おかしくって？じゃ、一体今はいつで、ここにはビンなんだ！」

「やっぱり変だよ。いい？今日は昭和二十一年三月一日でここは鼓島の防空壕だよ。」

頭巾を取つたその子は丸刈り頭の男の子だった。

「鼓島？え？昭和二十一年だつてえ！！君はオレをからかっているのか！オレはさつきまで東京の自分のアパートにいたんだぞ！」

「東京？お兄さん、東京から来たの？どうやって？今は船も通つていないんだよ。B29がショットちゅう来るから危なくて漁船も出せないんだ。」

（オレは一体どうしちまつたんだ。悪い夢でも見ているのか？鼓島のことを知りたくてパソコンを見ていたら急に変な感触が襲つてきて気がついたら六十年も前の鼓島にいるなんて！）

すっかり混乱してしまつた良は頭を抱えてしまつた。それをどう勘違いしたのか少年は慰めるように言葉をかけた。

「お兄さん、頭を打つてどうにかなつちまつたんだね？僕は佐々木勝一。戦争に勝つよにって父さんがつけてくれたんだ。今は中学に通つてるんだ。と言つても戦争に勝つまでは学校よりも勤労奉仕の方が大事なんだ。兵隊さんが戦つているから僕らは陰で応援しなくちゃいけないんだ。大日本帝国は絶対連合軍になんか負けないぞ！」

勝一少年は突然立ち上ると“勝つて来るぞと勇ましく”と歌い出した。するとそれに呼応するかのように中にいた全員が少年の後に続けとばかりに合唱し始めた。頭が混乱している上に大合唱を聞かされた良は再び気を失つた。

「ああ、何年ぶりだね。鳥のさえずりで目覚めるなんて。

次に良が目を覚ましたのは太陽が燐燐と輝く日中だった。何もかも一夜の夢だったのだろうと目を擦りながら瞬くと、そこはやはり昨夜の防空壕の中だった。ああ、あれは夢ではなかつたのか。オレは何かの力で終戦間近の鼓島に引き寄せられタイムスリップしてしまつたのか・・・しかもあのHPでは鼓島は海底火山の爆発で消滅するのだ。いつ?・明確な答えが記載されていなかつたので時期がわからない。何気なく上着のポケットに入れてみると携帯電話があつた。見れば電池は充分にあるようだ。短縮ボタンを押し、ダメ元で掛けてみた。プルルル。5回ほど呼び出し音が聞こえ、懐かしい声がした。

「良ちゃん? どうしているの? カラカラ何回も電話しているのにどうしたのよ!」

電話の相手は幼馴染みの吉川綾子である。実家が近く、幼少の頃彼女の両親が他界したことから、良の両親が後見人となつて面倒をみてきた。そういうた關係で良と綾子はこれまで何度も何度もお互いを支え合つてきた仲だつた。

「綾子か。良かつた。説明している暇はないんだ。とにかくオレの言う通り動いてくれ。どんな手を使つてもいいから鼓島っていう島について調べて欲しいんだ。こっちから電話すると電池がなくなるから結果が判つたらお前の方からかけてくれ。いいな!なるべく早くだ。じゃ、切るぞ!」

それだけ言つと良は電話を切つた。60年の月日を隔てても何故か理由はわからないが、携帯は通じるということがわかつた。とにかく連絡手段は確保できた。

ふと横を見ると、勝一と見慣れぬおさげ髪の女の子が良の行動

をじつと見つめていた。

「勝一君……だっけ？ ……びつしたの？」

「…・・それ何？」

「これ？携帯だよ。」

「ケイタイ？ケイタイって何？」

「電話だ。持ち運びできる電話さ。」

「電話？嘘だ。電話はそんな形じゃないよ。僕、村長さんのところに見たけどそんな形じゃなかつた。何かのおもちゃだらう？」

「おもちや？・・・じゃあないけど・・・そうか。見たことがないんだね。電話がこうなつたのはほんの数年前だからね。信じられないのも仕方ないか。・・・ところでこの女の子は誰なの？」

「僕の姉ちゃんだよ。一子っていうんだ。最初にお兄さんを見つけたのが僕の姉ちゃんなんだ。」

一子は紹介されると恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「一子です。勝一があなたが気付いたと知らせに來たので、傷の手当をしようと思つて來てみました。どうですか？氣分、悪いですか？」

？

そつ言いながら一子は良の頭の傷を調べた。

「・・・ありがとう。君は手つきがいいね。」

「そりやそりや。姉ちゃんは看護婦志望だもの。立派な看護婦になつて兵隊さんのケガを治すんだもんね！」

「そりや。君なら立派な看護婦さんになれるよ。絶対大丈夫だ。」

良の誉め言葉に一子の顔は一層赤くなつた。

「ところで――ここには女の子がないけど、どうしてなんだい？」

「何言つてるんだい。当たり前じゃないか。男女七歳にして席を同じふせず。だよ。タベからお兄さん変だよ。女人人は別の防空壕にいるに決まつてるじゃないか。」

「ああ、なるほどね。」

「それよりお兄さんの名前なんていうの？タベ聞いたんだけど全然

僕の話聞こえてないみたいだつた。」

「ああ、ごめんよ。オレは優良の優・・・じゃ。」

「あ！ 優だね？ 良じや成績優秀じやないもの。僕はね、いつも良と乙ばかりなんだ。丙と丁を取らなきやいいと思つてるんだけど、姉ちゃんはそれじゃダメだと言つんだ。一生懸命勉強して良い学校へ入れと怒るんだ。これからは勉強意する子に敵わないってね。でも僕は立派な兵隊になるのが夢なんだ。士官学校に入つて憎いアメリカをやつつけてやるんだ！」

「そうか。でも姉さんの言う通りだぞ。いいか、ここだけの話だ。絶対誰にも言つなよ。この戦争は8月で終わる。それも日本が負け るんだ。」

勝一！ 落ち着け！ 信じられないかもしないが、オレは今から60年後の未来から来たんだ。タベはオレもパニクつてて事情を把握できなかつたが、さつき目が覚めてやつと事情が飲み込めた。オレはタイムトラベルしてしまつたんだ。何かの力がオレをここへ連れて來たんだ。」

「ひ・非国民！ ！ 敵国語を使うばかりかおかしな事言いやがつて！ 助けるんじやなかつた！ おーい！ みん・・・ぐ！ ・・」

他の人を呼ぼうとした勝一の口を一子が塞いだ。

「静かにしなさい勝一！ いい！ 神社の巫女さんの話を忘れたの？ ！」

「巫女の話？」

「はい。今から半年ばかり前のことです。島の巫女さんが突然私達に向かつて奇妙な話をしたんです。1年以内に大変なことが起ころ。しかし案ずることはない。遠方より助け人が現れる。その者の言動は不可思議な事ばかりだが、決して軽んずべからず、と。私達は何のことだかわかりませんでしたが、あなたの出現でその意味がわかつりました。遠方というのは距離の事ではなかつたのですね。時間を隔てることなどあり得ないと想いますが、現にあなたを見たら納得しないわけにはいきません。あなたが救世主なんですね？」

「ちょ・ちょっと待つてくれ！ オレが救世主？ んなわけないだろう！ オレは平凡なサラリーマンだぜ。そんな大それたことできっこな

「いよー！」

一子の手を振り払つと良は防空壕を出ようとした。その時地鳴りの
よつたゴーダ、ゴーという不気味な音が響いてきた。

「B29よー早く中に入つて！」

一子の声を吹き消すようにその巨大な物体は姿を現し、バリバリと
いつ轟音をさせた。爆弾が落とされたのだ。

よつやく辺りが静かになつた。時計を見ると2時間程経過していた。外に出てみると風景が変わつてゐる。草木は焼かれ、土さえも黒く変色しているのだ。一体これは何なんだ！

「これが戦争なのよ。」

冷静が一子のひと言が良の胸に染みた。

「マジかよ・・・」

「え？ 何て言ったの？」

「こんな事つて・・・」

放心状態の良の腕を取り、一子はもう一方の手で勝一の襟を掴みさつさと歩き出した。

「姉ちゃん、どこ行くんだよ！」

「黙つて！ 巫女さんのところへ行くのよー。」

ずんずん歩く一子と勝一に引かれ、良の足も歩調を合わせる形になつた。歩く道すがら、ずっと良は焼け野原になつた景色を信じられない面持ちで眺めていた。初めて見る景色にも関わらず、何故かやり切れない気持ちになつた。

神社に着くと、中は閑散としており、一子の声が良く通つた。やがて一子の同年代位の女の子が出てきた。姿格好からするとこの子が巫女らしい。巫女といえば老婆をイメージしていた良は意外に感じた。

「優さん。こちらが巫女の綱代さんです。」

「一子ちゃん。オレの名前間違ってるよ。オレは優じやなくて優良の良の方。さつきは勝一の剣幕に圧倒されて否定できなかつたけど、オレは良。わかった？」

「あら！ すみません。もう一勝一ったら早合点で。いつもやうなん

です。」

するとそれまで黙っていた絹代が突然良に抱きつき泣き出した。
唖然とする3人。

「ど・どうしたの？ 絹代ちゃん！！」

慌てた一子が良から絹代を引き離した。

「絹代ちゃん？」

訳が解からず戸惑う良に一子が言った。

「私達・・・同級生なんです。絹代ちゃん！ 離れて！」

なおも抱きついたまま離れない絹代を必死で止める一子。

「ど・同級生？ はは・・なるほどね。・・いいよ、一子ちゃん。

とりあえず絹代ちゃんの気の済むまでこのままでいてその後、話を

聞いてみようよ。ね？ 絹代ちゃん。」

「・・・待つてた。あたし。あなたを待つてたの。

呼んでた

らきつと来てくれるって信じてた。あなたはあたしたちを助けられる唯一の人よ。」

突然絹代が言い出した。

「え？ それってどういう意味？ 良さんがあたし達を助けてくれるってどういうことなの？」

一子の必死の問いかけにやつと正気を取り戻した絹代が話しだした。

「・・・一子ちゃん。半年前にあたしが言つた事覚えてる？ 一年以内に大変な事が起ころうて。あれは本当の事よ。この島全体に危機が迫っているの。それが何なのかはわからない。それによってかなりの人が死ぬの。でも大丈夫。この人のお陰で助かる人もいるから。だからね、この人の言う事を疑わないで。お願い。一子ちゃん！」
良を見つめる絹代の目は尊敬と憧れに溢れていた。しかし当の良に
とつては筋道の通らない話しにしか聞こえなかつた。

「ま・待つてくれよ。オレはさつきも言つたけれど・・・」

そう意気込んだところで腹の虫がグーグと鳴つた。考えてみれば夕べから何も食べていなかつたのだ。

「フフフ。朝ごはんがまだみたいね。待つてて。何もないけれど芋

くらいならあつたと思うわ。」

綱代はそう言いながら奥へ引っ込んだ。

絹代がいなくなつた途端、勝一がブツブツ言い出した。

「こんな非国民党に何ができるつて言つんだ。戦争が8月で終わる？
それも大日本帝国が負けるなんて言う奴のどこを信じろつて言つんだ！」

「勝一、落ち着くんだ。確かに君の時代の人達にはオレの言う事全てがウソに聞こえるだろつ。だがな、これは本当の事なんだ。けどそんな事大きな声で言つてみる。もしかしたら歴史が変わるかもしれないんだぞ。だから内緒だつて言つたんだ。

ああ、そうさ。日本はアメリカ軍に原爆を落とされたことで完全降伏するんだ。終戦の日は8月15日。原爆投下は8月6日の広島と9日の長崎だ。よく覚えておくんだな。
だがオレがこの島の救世主だなんて一体どうこうことなんだろつ……」

良の話は一子・勝一2人の姉弟にとつてある意味予言のように聞こえた。21世紀に生きる良にとつては歴史で習つた周知の事実でも、この2人にとっては未来の出来事なのだ。すぐに信じろという方が無理なのかもしれない。

「じゃ、日本はどうなるんだ！僕は絶対信じないぞ！日本が負けるなんて！」

いきり立つ勝一にふかし芋を数本手に持つた絹代が言った。

「勝ちやん。この人の言つ事は本当よ。このまま戦争を続けても戦況は悪くなる一方だわ。新聞やラジオでは勝利を收めて進軍し続ける兵隊さんを励まそう。なんて言つてるけど、本当は南方に行つた人達全員が玉砕し続けているのよ。それを軍は秘密にしているんだわ。」

「絹代ちゃん……どうしてそんな事知つてるの？」

「・・・あなた達、秘密守れる？（と3人の顔を見渡して）・・・
じゃ、こいつ来て。」

絹代が先頭になり行き着いた先は、神社の裏山にある小さな祠ほにわらだった。誰にも見られないように木の枝や葉っぱで隠してあつたため、それとわかる者でなければそこに祠ほにわらがあるとは全く気付かないだろう。

絹代が觀音開きの扉を両手で押すと、ギツギツと音がしてそれは開いた。目が暗さに慣れてくると1人の男がケガをして横たわっているのが目に入った。その男を認識した途端、良達は思わず絶句した。なんとその男は金髪で青い瞳を持っていたからだ。その男もギヨッとしたようだつたが絹代の姿を見つけると安心したように再び横になつた。

「大丈夫よ。この人達はあたしの友達なの。」

絹代の日本語はどうにかその男に通じるらしかつたが、すかさず良が英語で話しかけると、男は気でも狂つたかのように休む間もなく喋りだした。なんの取柄もない普通のサラリーマンだつた良の唯一の特技といえば、英語を口常的に話せることだつた。これは彼の祖父の教育方針で、“英語を日常会話として扱えないようではこれららの世の中は生きていけん！”というのが口癖で、彼の母親も同様に教育されていた。そのお陰で今、こうして外国人と意志の疎通が図れるのだ。それをポカンと口を開けて見ていた3人に對し、この青年との会話を要約して聞かせた。

「名前はウイリアム・カーペンター。アメリカの水兵だそうだ。南方に2年程駐留していたが、今回上層部の命令で日本に来る途中甲板から海に落ちてこの島に流れ着いたらしい。南方の様子を絹代ちゃんに伝えたが伝わつたかどうか心配だと氣にしていたから大丈夫だと伝えておいたよ。彼はケガが直り次第、軍に戻りたいと言つている。どうだい？」

その言葉にサツと一子が反応し、ウイリアムの容態を診た。

「・・・・このぶんならあと一週間もすれば大丈夫よ。」

良がそれを通訳すると、ウイリアムはホツとしたようにため息を漏らした。その目には涙が滲んでいた。なにやらボソリと呟いた。

「敵国の自分を助けてくれてありがとう。と言つてるよ。」

ウイリアムにつられて一子と絹代の2人もお互いを抱き締めて泣いた。しかし勝一だけは敵意をあらわにしている。その後、彼等はウイリアムの容態を案じつつ、神社に戻った。

さて、良から意味不明の電話を受けた綾子である。鼓島なんて聞いたこともない彼女は、とりあえずＨＰを開いてみることにした。小学校の教諭である彼女はパソコンなるものは一応使えるのだ。しかしまあでも一応である。今日が平日ということもあり、ちょっと学校のパソコンを拝借した。

良がやつたと同じように“鼓島”で検索するとたつた一件ヒットした。それを読むと更にわからなくなってしまった。消滅した島を調べる。だなんて一体どういう了見なのかしら。良とてここまで調べたに違いないのだ。要はここからどうしたのかを聞きたいのだろう。小さい頃から一緒に育ってきた綾子には良の言いたい事が手に取るようになるのだ。

ＨＰ上でこれ以上情報が得られないと知ると、今度は何でも相談できる校長の宮下に聞いてみることにした。幸い宮下は校長室に在室しており、綾子の来室を快く迎えた。

「どうかしましたか？真剣な顔付きで。」

「先生。先生は歴史に造詣が深くていらっしゃるのですよね？」「歴史？ええ、まあ。しかし造詣が深い、とまではいきませんよ。それが何か？」

「先生は鼓島という島をご存知ですか？」

「つづみじま？・・・・・いいえ。知りませんねえ。私は地理には疎いんですよ。」

「いいえ。今から60年前に海底火山の爆発でその存在そのものが消滅してしまった島です。東京都下だったそうですが。」

「60年前ですか？うん。やはり私にはわかりませんねえ。・・・・・そうだ！私の知人に地学を専攻していた人がいます。その人に照会してみましよう。」

言うが早いか宮下はデスクの受話器を取り、メモを見ながら番号を

「 プッシュした。」

呼び出し音が数回鳴ると田町の人物が出たらしく富下の顔が綻んだ。

「 やあ、しばらぐ。富下だよ。うん、うん。いやあこちもせつぱりだよ。・・・ああ。ん？ああ。早速なんだがねえ、君。60年前に海底火山の爆発で消滅してしまった鼓島という島を知ってるかね？ そうそう・・・え？ 知ってる？・・・ああ、そぞらし。東京都下に属していたそうだ。君、その島について知ってる事を何でもいいからなるべく詳しく教えてくれないか？ ああ・・・ん？ 文献がある？ え？ ・・サラ・カーペンターという女性記者が書いたもの？ 既に亡くなっているのか。え？ 貸してくれるのか？ おお！ それは都合が好い。わかつた。それはありがたい。では後ほど・・・」

富下は受話器を置くと綾子に向かつてサインを見せた。

「 いや、彼は高木というんだがね。外出する用事があるからついでにこっちに寄つて文献を持つて来てくれるそつだよ。良かつたね。ところで急にどうしたんだね？ 60年も前に無くなつてしまつた島の事を知りたいだなんて。」

「 すみません。実は私にもわからないんです。突然調べてくれと言われて・・・」

段々語尾が小さくなる綾子を見て富下は、

「 ははあ。例の彼だね？ しかし君達は面白い関係だねえ。幼馴染みとは聞いていたけれど、恋人同士というわけでもないようだし。かと言つて単なる友人というわけでもない。私等のような年代の者は理解できんよ。」

「 すみません・・・」

「 いやいや、責めているんじゃないよ。誤解しないでくれたまえ。でもね、こつこつことは回りがヤキモキしているうちにはじつにもならんものだよ。いずれ君達の間もはつきりする時がくるよ。どーれ。高木の好物のコーヒーを入れる準備でもするか。 あ、いや結構。 こう見えてね、私はコーヒーを入れるのが上手いんだ。」

高木が来たら呼ぶからそれまで待つていて下さい。

「はい。よろしくお願ひいたします。」

丁寧に頭を下げると綾子は職員室へ戻った。

神社に戻つて来た途端、勝一の怒りが爆発した。理由は敵国の兵隊を助けた拳句匿つた絹代とその兵隊と平気な顔で敵国語を喋る良に対してである。あまりの怒りに勝一の体は震え、今にも2人に飛び掛りそうな剣幕である。一子と絹代はただオロオロするばかり。だが良だけは平然とした顔で勝一の怒りを受け止めていた。

やがて勝一に興奮が少し収まつた頃合いを見計らつて良が口を開いた。

「勝一。お前の言い分はわかつた。確かに小さい頃からアメリカが敵だと教えられてきたお前にはオレや絹代ちゃんの行ないは許せないだろう。だがな、人は肌の色や言葉で憎み合つたらダメなんだ。現にドイツやイタリアは日本の同盟国だろ？ アメリカとイギリスだって同じだ。お前は日本の地図とアメリカの地図を見比べたことがあるか？ 戦争で奪い取つた国は除いて元々の日本の領土を考えるんだ。国の面積1つとってもアメリカやイギリスに対して日本がしている戦争がいかに無謀なことかわかるだろ？ いいか、10日には東京が空襲に遭う。文字通り火の海になるんだ。よく覚えておくんだ。この世で一番大切なのは他人を思いやる気持ちだ。そこから人の命の尊さと慈悲の心が生まれる。決して外国人だからと敵視してはいけない。」

「東京が空襲に？ 本当なの！」

一子と絹代の2人はその言葉に仰天したようだ。

「ああ。ここは離島だから空襲は受けないかもしれないが、今朝のような单発的な攻撃はこれからも覚悟しておかなければならぬよ。」

「ウソだ！ お前の言うことなんか誰が信じるもんか！ 大ばかやうつ！ …」

しかしそのことで再び怒りがぶり返した勝一は床柱を思い切り蹴飛

ぱすと泣きながら走り去った。

「綾子先生。校長先生がお呼びよ。」

待っていた呼び出しがあったのは、次の时限が終わつた後だつた。待つてゐる間中、綾子の頭の中はそのことばかりで授業は殆ど上の空だつた。

ドキドキしながら校長室のドアをノックした。

「どうぞ。」

の声で中に入ると、富下ともう一人の男性がいた。この人が高木だと紹介されたが、高木は綾子が想像してゐた地学の学者とはかなりかけ離れていた。綾子のイメージは牛乳瓶の底のようなメガネをかけ、ヨレヨレの背広に皺だらけのワイシャツ姿で、いつ風呂に入つたかわからないような異臭を放つた人種だつた。ところが目の前にいる高木という学者は、年こそ富下と同じくらいだが、その他の点では全く異なつていた。富下が中肉中背なのに対し、高木は背も高くスースはアルマーニで、腕時計は落ち着いた感じのロレックスだ。ひと言で言つならロマンスグレーである。これでは綾子でなくともポツとなるに相違ない。

「どうしたのかね？ 高木がハンサムなので驚いたのではないかな？」ズバリ言い当てられて益々赤面する綾子。

「ハハハハ。どうやら図星だつたようだね。しかし残念だが高木には奥さんも子供もいるんだよ。君があと25年早く生まれていたなら状況は違つていたかも知れないがね。」

富下の軽口も今の綾子には全く通じない。穴があつたら入りたい気分だ。

「おいおい富下。こんなに若くて綺麗なお嬢さんをからかっちゃいかんよ。 失礼しました。私が高木です。何でも鼓島の事が知りたいとか。」

外見を裏打ちするようなバリトンに綾子は挨拶も忘れ何度も頷いた。

「富下から電話を貰つてすぐにカーペンター女史が書いた回顧録を思い出しましてね。外出のついでといつては申し訳なかつたが持参しました。彼女は既に故人なのですが、ご主人の口述と日記をもとに執筆し、彼の死亡を機に出版したものらしいです。その中で鼓島に関する箇所がありました。ご主人のウイリアム・カーペンター氏が南方から日本に来る途中、乗つていた軍艦から誤つて海に落ち、運良く流れ着いたのが鼓島だつたそうです。ここからは実際あなたの目で読んで下さい。ただ不思議なことが一つあるのですが、その中で氏の命を救つた人物の1人というのがその時代にそぐわない様子だつた。という箇所なんです。ま、よろしければその本はあなたに進呈いたしますよ。あ、いやいや気にしないで下さい。私はもう一冊持つていいから。読んでいただける方がいるならその本も嬉しいでしよう。　お！もうこんな時間か。では私はこれで失礼するよ。何か発見したら是非お知らせ下さい。富下。美味しいコーヒーをありがとう。じゃ、綾子さん。今度またお会いしますよ。」

綾子が礼を言う間もなく甘い余韻を残し高木は帰つていった。

「綾子先生。どうしました？まあね、あいつを見たら余程の人がじゃない限り女性はクラクラしますよ。昔からそうでしたからね。・・おつと、これは失礼しました。高木も言つてましたが何かの役に立つたら是非私にも知らせて下さいね。」

「はい。校長先生、ありがとうございました。」

ようやく言葉が出るようになつた綾子はそれだけ言つと、本を大事そうに抱え校長室を辞した。あとは放課後を首を長くして待つばかりだった。

「オレは今でも信じられないって言うが、これが現実だなんて思いたくないんだ。心の中じゃ元の場所に戻れないんじゃないかっていう不安で一杯だ。一刻も早く帰りたい。でもどうやつたらいいのかわからない。こんな事ウソだろ?って叫びたい気持ちで張り裂けそなんだ。逃げ出したい!これが本音さ。でも今のままじゃ、勝一があんな風じやどうしようもないだろ?勝一があんな風になってしまったのはオレが原因だし。何とかしないとたとえ帰れたとしても心残りだ。帰るに帰れないよ。・・・　すまない。一子ちゃんと絹代ちゃんにこんな愚痴を言つても始まらないのにね。

現実を直視できないのはオレの方さ。そんなオレが言うのもおかしいけれど、オレを信じて欲しい。オレは決して君達を混乱させようとして日本が負けると言つた訳じゃないんだ。これは事実なんだ!

あと5カ月後。日本は終戦を迎える。もう少しの辛抱だ。

必死に訴える良に、一子と絹代は深く頷いた。

「日本はその後どうなるの?」

一子の素朴な疑問に良はどこまで答えるべきか迷った。良のひと言が彼女達の未来を変える恐れがあるからだ。

「ねえ!どうなるの?私達はどうなるの?!

「大丈夫だよ。日本は今、アメリカに負けるけれど60年後はアメリカに経済力で対抗できるくらいになるよ。君達の子供や孫の時代には明るい未来が待っている。」

良は現代の日本が抱えている諸問題をここで言つのは控えた。ただでさえ明日の命もわからない彼女達に未来も同じようなものだとは言えなかつたからだ。せめて希望だけは持たせてやりたかった。その言葉に安心したのか2人はホッとした表情になつた。今は辛く悲しい世の中だが、自分達の子孫は幸せになれる。それがせめてもの救いだった。

「ありがとう。良さん。あなたはやっぱり私達に救世主よ。勝一のことなんか気にしないで。今にケロッとして現れるから。お腹が空くとすぐ怒るのよあの子は。あら！もうこんな時間？早く帰つて夕ご飯の支度しなくっちゃ！良さん、あんな防空壕で申し訳ないけれど、あそこに今晚も寝ていただけのかしら？」

え？またあそこで寝るの？と冗談交じりの本音が口をついて出そうになつたが、なんとか思い止まつた。この子たちにとつてあそこが生き延びるために唯一の場所なのだ。軽々しい言葉は控えなければならぬ。

その時ずっと沈黙を守っていた絹代がラッキーな提案をした。

「ここに良かつたらいつまで泊まつていいいわよ。私のお父さん、神主だから困つている人は助けなければいけないの。芋で悪いんだけど食べ物はあるし。ね？ そうして下さらない？」

思いがけない申し出に一子には悪いと思いつつ良は嬉しくなつた。どんな所でも土の上で寝るより数段ましだ。

「そ・そうね。そのほうが私も安心だわ。」
なぜか一子は素直に受け入れた。

「じゃあ決まりねつ！」

その後一子は2人に別れを告げ、もと来た道を帰つて行つた。

「一子ちゃんの家ね、両親が空襲で死んでしまつて、勝一君と2人、叔父さんの家に厄介になつてゐるの。だから本当は良さんを連れて行きたいんだけどできないのよ。わかつてやつてね？」

その後姿を見送りながら絹代が呟いた。そういう事だったのか。と、今更ながらこの時代の悲惨さを痛感する良だった。

「さあ中に入りましょう。父に紹介するわ。」

呆然としていた良は、絹代に声をかけられ現実に戻った。絹代に促され家の中に入ると、彼女の父であり神主の守野 正吉が夕方のお勤めを終えて茶の間に戻つて來た。正吉は丸刈りにこそなつてはいたが、神に仕えているだけあって柔軟な顔付きをしていた。絹代が良を紹介しようとするとき正吉は小さい島のことだからと前置きして、既に島に入った正体不明の男、つまり良の存在は知つていたと言つた。そして物のない時代だが困つてゐる時はお互い様、と快く良の宿泊を許可してくれた。絹代がこのところもうすぐ救世主が現れるときりに訴えていたが、あなたの事だったのか。絹代は巫女としては非凡なものを持つてゐるもの、その予言のような話を完全に信じていはいなかつた。まさか現実に起こりうつとは努々（ゆめゆめ）思わなかつたと付け加えた。

『助けて。』『鼓島。』という必死の声を聞いたと良が説明すると、更に正吉は絹代は何度も呼びかけていたが、最後の呼びかけで返答があり、鼓島と叫んだあと氣を失つたと教えてくれた。

「こうなつたらいつまでも居てくれて構わないから鼓島を救つて下さんか。なに、誰が何を言おうとわしゃ平氣だよ。母さんも昔は優秀な巫女だつたから絹代の言つていることは承知している。良さん。この通り、頼みます。この島を救つて下さい…」

手をがつちり握られた上に真剣な顔付きで頼まれ、良には返す言葉が見つからなかつた。

放課後。綾子は例の本を抱え、ふと気になつて良のアパートへ立ち寄つた。すると玄関先に良の同僚である結城 淳一が立つていた。

「結城さん? どうしたんですか?」

「あ! 綾子さん! どうしたもこうしたもないですよ。笹崎はどうしたんですか? 今日無断で会社を休んだんですよ。課長、カンカンで凄かつたんです。タベオレが一緒だったって課長知つてるもんだから、しつこく聞かれてホント困つてしまつて。綾子さん、知つてますか? あいつ。全然連絡取れなくて・・・」

その口調から結城の困惑が伺えた。しかし綾子にも良の消息がわからぬ。今朝偶然電話がかかってきて鼓島のことについて調べて欲しい。と頼まれたきりその後全く連絡がないのだ。急に心配になつた綾子は合鍵で鍵を開け、結城と共に中に入った。

中はいつもの通り、少々散らかつたままの良の部屋だつた。違つたのはコートが脱ぎっぱなしになつていていたことだつた。普段、身の回りのことには無頓着な良も仕事着のスーツやコートは大事にしており、脱いだらすぐハンガーにかけることを習慣としていた。細いからと近くにアパートを借りていた綾子は週に1度、良の部屋を掃除しに来ていたのだが、コートが脱ぎっぱなしになつていたのはこれが初めてだつた。

「変ね。良ちゃん、コートはいつもきちんとハンガーに掛けていたのに・・・それにスーツがないなんて。」

「 鼓島? 何だ、これ。」

パソコンを開いた結城が声を上げた。良は帰宅するとすぐパソコンを開くという習慣を結城は知つていたので、部屋に入るとすぐスイッチを入れたのだった。

「え? ・・・ああ、良ちゃんが調べていた海底火山の爆発で沈んで

しまつた島の事だわ。」

「はい？おかしいな。あいつ、昨日までは調べ物をしているなんてひと言も言わなかつたのに。急にどうしたんだろう。」

「そうね。言われてみれば変だわ。私にもそんな事一度も言つたこ

とはなかつた。今朝急に電話をかけてきて、理由は言えないが大至急調べてくれつて言つて勝手に電話を切つちゃつたの。ああああ！考えたら腹が立つてきた！！なんでこんなことで私が悩まなくつちやいけないのよっ！ントにもう！」

綾子の態度の変わりように慌てた結城は挨拶もそこに何かわかつたら知らせて欲しいと言い残し、足早に部屋を出て行つた。残された綾子は一人愚痴をこぼしていたが、突然例の本を思い出し、「タツのスイッチを入れると深々と中に入り早速ほんのページを捲つた。^{めく}3月とはいえ、まだまだ東京は寒いのである。

原題名はわからないが、訳名は『私の海軍時代』作者はウイリアム・カーペンター。表紙にそう記載されていた。目次らしきものではなく、年代順、日付順にその時々、彼が体験した事、感じた事などが綴られていた。初めから読んでいた綾子は目当てとするページにたどり着くと突然食い入るように読み出した。それまではただページを繰っているという感じだったのだが、真剣に活字を追い出しだのだ。その頁にはこう記されていた。

『1945年 1月25日

私の乗った軍艦はガダルカナルから一路、日本へ向けて出航した。日本への総攻撃に向けて偵察のために行くのだ。謂わば斥候隊である。しかし一朝事件あらばすぐにも応戦できる体制は整えてある。そして我々はもう一つ。そのほかに極秘任務も背負っている。空は快晴。船出には最適の日である。』

『1945年 1月30日

いよいよ日本海域に入った。ここはKİHANTON沖だと友人の航海士が言っていた。目指す場所はもつすぐだ。それにしても海ばかりで退屈だ。カードにも飽きてきた。何か面白いことはないだろうか。

『1945年 2月5日（後にキネヨに聞いた）

突然の頭痛で目が覚めた。ここは一体どこだらう？ふと見ると断髪頭の少女が自分をじっと見つめている。「 × *」何か言つている。そのしぐさから想像すると、大丈夫か？と聞いているようだ。微かに頷くと安心したように額に乗せた布切れを水に浸しました乗せてくれた。ひんやりしてとても気持ちがいい。しかしここは一体どこなんだろう？少し前の記憶を辿つてみる。自分は退屈しのぎに甲板に出て、触先くせんに立つて目的地に近いことを確認していた。ところが同じように退屈していた水兵が、甲板でレスリングを始めた。面

白がつて見ていた私は、転がつてきた1人の水兵にぶつかり海へ・・・落ちたのだ。その後の記憶は全くない。気付いたらこの薄暗い部屋のようなところに寝かされていた。しかも落ちた時に背中をぶつけたらしくケガをしていた。その少女はケガの治療をしてくれた上に、熱が出たときにはずっと看病をしてくれていたのだ。熱でうなされていた中でもそのことはしつかりと認識していた。「ありがとう。」声に出して感謝の気持ちを表した。だが彼女には全く通じていらない。両手を合わせて再度言ってみた。すると今度は通じたらしい。彼女の顔に笑顔が浮かんだ。『* × +』彼女が言った。今度は私がわからない。何とか自分の意思を伝えようと彼女も手振りでやつている。しかしそれが不可能だと知るや、フッとため息をついた。「キネヨ。」突然彼女は自分を指差して言った。どうやら彼女の名前らしい。「ビル。」私も答えた。初めて言葉だけで通じた。そんな単純な事に異常なまでに感動した私達は声を上げて笑った。ズキッと頭に痛みが走った。すぐに彼女、キネヨはまた心配そうな表情になり、私の頭を撫でながら何かを言った。多分安静にしている、という意味なのだろうが、この先どうなるのか不安に仕方がない。

『1945年 2月18日

私のケガは考えていたより重く、毎日キネヨが手当てをしに来てくれるのだが、彼女は来る度にすまなそうな顔をする。多分充分な薬がないことを気にしているのだろう。いつも薬草を持つてくるからだ。名前はわからないが、確かにその薬草は傷に対して効果を発揮しているような気がする。しかし若い彼女には不服らしい。もつと良い薬さえあつたなら・・・ということなのだろう。手当てをした後、決まって同じ言葉を繰り返すのだ。意味はわからないが、10日も聞けば覚えてしまう。『HONTONI KIKUNOKASHIRAH』毎日言つものだから今日は彼女が言い出しそうなタイミングを計つて私も一緒に言つてみた。初め、キヨトンとした顔をした彼女だが、お互い顔を見合させまた声を上げて笑つた。

もしかしたら完全とは言わないまでも意思の疎通が図れるかも知れない。ふと一筋の光が差したような気がした。』

第14話

『1945年 3月1日

私は今日という日を生涯忘れないだろう。なぜなら、やつと自分の意思を自分の国の言葉で話せる相手を見つけたからだ。いや、見つけたという表現は間違いだ。キネヨが連れて来てくれた友人の1人が偶然にも英語を話せたのだ。それもカタコトではなく、流暢な英語だ。彼の名前は“RYO”と言った。彼の説明でこの島の名前が“TUNUMIJIMA”ということを知った。嬉しくなった私は早口でこれまでの経緯を話した。すると“RYO”は完全に理解したように見えた。だがあの2人。（やはりキネヨが連れて来たのだが）姉弟は私をじっと睨み、今にも飛び掛りそうな形相をしていた。もっとも姉の方は私がケガを負っていると聞かされるとすぐ傷の具合をしてくれた。彼女の診立てでは間もなく快復するだろうとのことで、その後は好意的に接してくれた。看護婦になるのが夢だそうだが、彼女なら人種を問わない良い看護婦になるだろう。ところが、弟の方は終始私を睨み続け、結局ひと言も語らず帰つて行つた。キネヨには申し訳ないが、ケガの如何に問わらず、早目にここを引き払つた方が良さそうだ。』

『1945年 3月5日

これまで親身になつて世話をしてくれた杆よに何も言わず出て来てしまつた事に申し訳ない思いで一杯だが、彼等が来た翌日私はある小屋を出た。身を潜めながら海岸に出ると、非常時の連絡方法である秘密の狼煙(のぶし)を島民に見つからないように上げた。

翌日になつて小さな船が私の待つ砂浜近くにやつて來た。乗つていたのはあの日甲板で私にぶつかつた水兵と、もう1人は私の友人のアレックスだつた。私達は抱き合つて再会を喜び合つた。もうダメだらうという者も中にはいたらしいが、彼等2人だけはビルは絶対に死ないと今日まで探し続けていたのだ。

急ぎその船に乗り母船に乗った。戻つてから2日後にこの日記を書いている。落ち着いてみるとやはりキネヨのことが思い出された。申し訳ないことをしたと後悔している。この埋め合わせは必ずしょうと思う。』

『1945年 3月11日

非常に悲しい事件だ。わが国にとつては小さな石が落ちたような事だが、これほどのことにならうとは—東京が我が軍の攻撃で火の海と化しているのだ。大勢の人達が死に、家は焼かれている事だろう。私のような者でさえ想像できるのだから、上層部の人達はより詳細に知っている事だろう。しかも私達はそれ以上のことをこれからやろうとしているのだ。』

綾子はそこで一息ついた。というよりもその後は突然1945年8月6日。つまり広島に原爆投下された日になっていたからだつた。“RYO”つて一体誰？まさか、そんなはずないわ！心配になつた綾子はすぐ携帯を取り出し良の短縮番号を押した。ブルルル・・ほーら、通じるぢやない。何かの事情で良ちゃんは帰宅しないだけなのよ。そうなのよ。自分に言い聞かせながら綾子は良の応答を待つた。しかし結果は・・・『電源が入つてないか、かかりません。』機械的な声が空しく聞こえただけだつた。何故？どうして？綾子は良を想つて泣いた。泣きながら日記の続きを読んだ。

綱代の家に厄介になつて2日目。良は綾子の事が気になり電話をかけた。プルルルプルルル。2度呼び出し音がなつたところで聞き慣れた懐かしい声が聞こえてきた。しかしその第一声は、「良ちゃん！今どこにいるの！—ずっと電話かけ続けているのにどうして電源入れとかないの！」

いきなり怒鳴られた。

「電源？入れといたぞ。お前こそ何だ！全然連絡……あ、いや悪い。それより事情は帰つてから・・帰つて？オレってもしかしたら・・帰れるのか？」

「何言つてんのよ！それより今どこにいるの！」

「あ？ああ。信じられないだろうが、オレは今60年前の鼓島にいる。突然タイムスリップしちまつたらしいんだ。それより頼んでいた事調べてくれたか？」

「タイムスリップウ？！私をからかっているの？いい加減にしてよね！早く帰つて来てよ。みんな心配してるんだから！」

「帰りたくても帰れないんだ！それより早く鼓島の事を教えてくれ！」

突如“RYO”の文字が綾子の脳裏を過^{すぎ}った。まさかそんな事が！半信半疑のまま綾子は手元近くに置いてあつた日記を搔い捨てて読んだ。その後3月11日以降の出来事に関する限り鼓島についての記載はなかつた。但し、とんでもないことが起きて鼓島が消滅したと結果のみが書いてあるだけだった。それから“RYO”なる人物について少し記載があつた。日本人らしいがとても流暢な英語を話し、今の時代とは異なる風体をしていた。長髪で着ている服も流行のもとのとはかなり違つてゐる。何より驚いたのはその身長である。私は170CMそこそこだが彼は私よりも10CMは高いだろうと思われた。今の日本人は瘦せて小さくいつも飢えている、というの

が私の先入観だつたが（実際キネコ達はそうだつた）“RYO”は全く違う。あれはきちんと食事を摂っている身体だ。とにかく全てにおいて不思議な男だつた・・・。

その箇所にくると良はとても興味を覚えたようで、ウイリアムには昨日会つたと言つた。そして“RYO”といつのはオレのことだと付け加えた。

「何ですつて！じゃ本当に今良ちゃんは60年前にいるの？そんな事つてあるの？こんなに近くに声が聞こえるのに？・・・」最後は涙声になる綾子。元来彼女は気が優しく泣き虫だつたのだ。「泣くな！全く！どうしてお前つて奴はすぐに泣くんだ！オレの方が泣きたい気分だつてのに！いいか、この携帯も間もなく使えなくなる。だからこれが最後の連絡だと思ってよく聞くんだ。いつ戻れるか分らないからな。いいか、適当な理由をつけてオレの会社に退職願を出してくれ。それから・・帰つたら・・・」

そこで突然電話が切れた。

「良ちゃん？良ちゃん！どうしたの！ねえ！」

通話口に向かつて泣きながら綾子は叫んだ。再度短縮番号を押したが結果はいつも通りだつた。

「良ちゃん。帰つたら？その後は何て言おうとしたの？」

まさかそんなはずはないと否定していた事が現実だつたとは！綾子は電話握り締めたまま泣き崩れた。

(大変な事が起きた? 一体何だらう。)

綾子との会話は突然の電池切れで終わってしまった。しかしその前の内容が気になつた。確かに海底火山の爆発で島は沈む。しかし火山の爆発は自然現象だ。その現象以前にそれに関する記述があるのは不自然だ。もっとも出版するに当たつて田にちを遡つて付け加えた、ということはあつたかもしれない。多分そうなのだろう。1人考え事に没頭していた良は綱代の声で我に帰つた。

「 大変よ! ビルがいないの! 早く来て!!」

引っ張られるように昨日の祠に行くと、確かにウイリアムの姿はなかつた。寝床は綺麗に片付けられ昨日まで人がいたという痕跡すらなかつた。しかし隅の方に文字が書かれていた。傍によつて目を凝らすと、ウイリアムが書いた綱代宛の深い感謝の気持ちと、直接会つてその事を伝えられない侘びの文だった。

「 まだケガも直つていないのでなぜなのよ!」

良から和訳を聞いた綱代は悔し涙を浮かべた。だが良にはウイリアムの気持ちが理解できた。恐らく勝一の存在が彼をそういう行動に走らせたのだろう。勝一はウイリアムを敵国人間としか見ていかつたし、今にも飛び掛りそうな形相をしていたからだ。ウイリアムは勝一の口から自分の存在が漏れるのを恐れ、自ら姿を消したに違ひない。

「 そんな・・・」

口では信じられないといった風だったが、綱代も納得するものがあつたようだ。

文章はまだ続いていた。10日後には東京上空から爆弾が落とされ、その後も各地で爆撃の被害に遭つだらう。この島もいつそうなるか分らないから気をつけて欲しい。最後に助けてもらつたお礼は必ずする。と締めくくつてあつた。

「何ですって！東京が？・・どうしてそんな大変な事をビルが知っているの？」

「それがアメリカなんだ。一介の水兵でさえその事を知っている。その懐の大きさがアメリカなんだよ。日本はそういう国と戦つているんだ。分ったかい？日本がアメリカに負けた理由が。」

「・・・でも。この事はオレと君の2人だけの秘密にしよう。下手に騒ぐとパニック、いや、大騒ぎになるからね。黙っていたほうがいい。東京が空襲に遭うのは変えられない事実なんだから。」良はショックを受けた絹代を促し祠を出た。

勝一は祠ほじいの外で良と絹代の会話を一部始終聞いていた。昨日神社を飛び出した後、駐在所に駆け込もうとその前まで行つて立ち止まってしまった。“人間はみな同じ。肌の色で区別してはならない。大切なのは他人を思いやる気持ちと人の命。”良の言葉を思い出したからだ。

「勝一じゃねえか。どうした？」

駐在の大島に話しかけられるまでそこに立っていた。

「あ・・・何でもねえ。」

そう言つてまた勝一はどこかへ駆け出した。しかしそのまま叔父の家に帰りたくなかつた彼は、フラフラと島中を歩いた。夜になつて眠くなると絹代の家、つまり神社の境内で野宿をした。野宿には慣れっこだ。悪さをして叱られそうになるといつも大地を布団に満天の星を眺めながら眠つた。境内はよく使わせてもらつてゐるから真っ暗でも何がどこにあるかすっかり熟知してゐる。そして朝を迎えた。

朝になつて良が起きてきた。するとまたあのおもちゃを取り出しそれにあてて間もなく喋りだした。喋つているのはアヤコという女性らしい。話し方からするとただの友達ではないようだ。時々相槌あいぢを打つところからするとあれはおもちゃではなく、本当に電話なのだろうか。だが電話というものは、壁に付いていて箱の横にある棒をグルグル回し、交換手が出たところで送話口に向かつて相手の番号を言い、一旦切つて電話のベルが鳴るのを待つてゐるものだ。

そうだ！あいつはオレがここにいるのを知つていておびき出すためにあんな芝居をしてゐるんだ。その手に乗るオレじゃないぞ！改めて意氣込む勝一の耳に絹代の慌てた声が飛び込んできた。（ビルがない？そしたら見ろ！あの米兵は俺達に恐れをなして逃げ出したんだ。ざまあみやがれ！）内心ほくそ笑んだ勝一だったが、

好奇心も沸いてきた。2人の後を付けると祠の陰に隠れ、その会話を盗み聞きした。

(東京が空襲に遭う？！)

確かに良はそう言った。昨日も同じことを言った。本当なのだろうか。こうしてはいられない。誰か大人の人に知らせなければ！再び彼は走った。走って駐在所の前にたどり着くと、今度は躊躇なく中に飛び込んだ。

「た・た・たいへんだ！と・とうきょうが空襲に遭う！」

息も切れ切れに叫んだ。

「どうしたんだ。勝一。姉さんが探しとつたぞ。また何かやらかしたんだろう。あんまり姉さんに心配かけるんじゃないぞ。」

大島は勝一の言葉を端から無視した。

「そんなことどうでもいいんだ！大変なんだ！東京が米軍にやられるんだ！早く何とかして！」

「ば・ばか者！！何を言うのかと思えば。いいか、勝一。今、大日本帝国は南方で大勝利を収めている最中なんだ。デタラメを言うと子供だからといって容赦せんぞ。さあさあ姉さんが待っている。早く家に帰りなさい。」

大島は勝一の訴えに耳を傾けるどころか返つて襟を摑み、駐在所の外につまみ出した。

「本当なんだよお！ウソじゃないんだ！」

「勝一！いい加減にせんと本当に怒るぞ。叔父さんにも言わなくちやいけなくなる。あそなことにならないうちにさつさと帰れ。」

大島は取り付く島もなく勝一を追い出した。しかしその事が後になって大変な騒ぎにならうとは2人とも想像すらできなかつたのだ。

神社に戻つて来た2人を一子が待つていた。また勝一がいなくなつたのだと言う。しかし綱代の反応はいま一つはつきりしない。いつもならすぐ一緒になつて探してくれるのに今日は何故かおかしい。どうしたのかと尋ねると、綱代は良に目配せをした。

「実は・・・ビルがいなくなつたんだ。」

「え? あの人? でもあの人ケガしてるじゃない。あんな身体でどこに行つたって言うの?」

「恐らくは・・・自分の存在を知られたくないんだろう。だから俺達に会つた後すぐ姿を消した・・・」

「でも・・・どこへ?」

「大丈夫。ビルはちゃんと自分のいるべき場所へ戻つたよ。」

綾子にその後のウイリアムの消息を聞いていた良は2人にその事実を説明した。

「そう・・・じゃ、ビルは助かつたのね。・・・良かつた。」

ホツと胸を撫で下ろす2人。ところが次の2人の言葉に良は畠然とした。

「あやこって誰? 良さんとどういう関係?」

女の子は1つの問題が解決するとまた新しい疑問が湧くものらしい。しかし・・・困った・・・今まで綾子との関係を聞かれても單なる幼馴染みと言えば良かった。実際良は以前、綾子意外の女性との結婚を考えたことがあった。だが結局別れた。最後の決め手となるものがなかつたのだ。ところが今、この時代にやつて来て改めて自分と彼女との関係を考えてみると、単なる幼馴染み以上であつたことに気付かされた。それを気付かせてくれたのが一子と綱代の素朴な疑問だった。

「どうなの?」

2人はまた口を揃えた。

「単なる幼馴染みさ。」

良はいつも口にするセリフをいつもの口調で言つた。つもりだった。

「ウソ。今言い方は単なる幼馴染みという感じじゃなかつたわ。

恋人。そうでしょう？それも結婚間近かの。キヤー……！」

加えて何故か女の子といつものほいつの世も想像力はたくましく出来ているようだ。

「オレが学校で習つた歴史のイメージと今の君達とはかなりギャップがあるね。」

話題を変えるつもりはなかつたが、ふと気になつて良は言つた。

「いめーじ？ ギャップ？ どういう意味？ それって敵国語でしょう？ ダメよ。そんな言葉使つちや。使つたら駐在さんに連行されるわよ。駐在さんならまだいいけど、憲兵に捕まつたらスペイと見なされて拷問に掛けられるんですつて。だから気をつけないといけないわ。いい？」と言つても、この島には憲兵なんていないけどね。」「一子と絹代にかかるたらどっちが年上か判らなくなりそうだ。

「でも、その意味はなに？」

「イメージは印象。ギャップは相違。つまり違いだね。オレの受けた授業では戦時下の日本は娯楽はもちろん、恋愛沙汰もご法度だった。欲しがりません、勝つまでは。の精神が根付いていたというものがだつたんだけど、実際は違うんだね。」

「うふふふふ。いやだわ。確かに表向きはそうだけど。ねえ。」

意味深長な笑いをする2人。

「つまり。本音と建前は違つて大昔から決まつてるじゃないの。ねえ！」

「あははは！ なるほどね！ つてことはオレらとあんまり変わらないつてことか！」

「良さんの言つている意味が判らないけど、つまりこうことなのよ。ねえ！」

「じゃあ、聞くけど。君達は好きな歌手とか俳優はいるの？」

「私は断然長谷部一夫！」

名前を口にしただけでうつとりする一子。

「私は何て言つたつて上杉健よ。」

同様に絹代の目もうつとりする。

「ハセベカズオって誰？でも上杉健は知つてるよ。加藤雄一の父親だろ？」

「カトウコウイチ？知らないわ。それよりも長谷部一夫を知らないなんて変よ。あんなにステキな人なのに。」

「仕方ないだろ。オレらはせいぜい加藤雄一世代なんだから。そうだ。加藤雄一の歌を歌つてあげるよ。・・・そうだな。・・・うん、やっぱり加藤雄一といえばやっぱりこれしかないな。曲名は“君のために捧げる歌”いい？・・・あれ？どうしたの。一子ちゃん顔が赤いよ。」

「だつて・・そんな歌詞。恥ずかしくて聴いていられないんだもの。」

「外見もおとなしそうな一子はやはり内面もそつらじ。巫女なんてやつていて、いかにも私は何も知りません顔の絹代の方がはるかに進んでいるようだ。」

「ああそつか。“ごめん、”“ごめん。やっぱり君達にはまだ無理のようだね。」

「良さん。その歌であやしむに結婚を申し込んだのね？そうなんでしょう？」

ヤバッ！話が戻ってしまった。そう思つた時には遅かつた。結局2人の追及を免れることができなくなつていた。

「仕方ないな・・・どうしてもつてなら話すけど・・オレと彼女は本当にそういう仲じやなかつたんだ。单なる幼馴染み。家が近くであいつの両親が早く亡くなつたからオレン家で後見人みたいなことをしていたんだ。ただそれだけさ。」

「でも　　今は違う。そうでしきつ。」

絹代は勘が鋭い。やはり巫女という特殊な能力を持つた賜物か。

「ああ。ここに来てまだ数日しか経っていないのにあいつの存在が

日に日に大きくなつていくんだ。もし帰ることができたならその時は君達の希望通り、はつきりと自分の気持ちを伝えるよ。でもまずは帰ることが出来るかどうかが問題だ。」

最後の言葉は2人の胸にやけに淋しそうに響いた。

翌日月曜日。綾子は学校を休んだ。風邪を引いて熱があるといつもだ。しかし実際は良が勤める会社に辞表を出すためと、主のいないアパートを空にしておくわけにはいかないので、少しの間良のアパートに居を構えるための準備をするのである。但し、良の許可なく引越しをするわけにはいかないため、綾子は自分の荷物を半分だけ運び込んだ。いつまでになるかわからないが、良が戻つて来たら自分が出て行けば済む事だし、それに戻つて来た時に自分のいる場所に生活感があれば少しは安心するだろうと考えての決断だつた。元々彼の部屋は生活できるような食器類等や家具は最低限しか置いていなかつたので、綾子の荷物が入つてやつと人並みな部屋になつた。

その夜。突然の退職願に驚いた結城がアパートに訪ねてきた。応対に出た綾子を見るなりびっくりしたような顔つきになつたが、特に不思議がることもなく用件を切り出した。玄関先で話すのもどうかと中に招き入れると更に驚いたようだつた。

「あ・ああ。そういう事になつたんですね？僕もね、その方が良いと前から思つてたんですよ。何人かの女性と付き合つたけど、笹崎に合う女性は綾子さんしかいないつてね。そうですか？」

1人納得する結城。

「あの。結城さん？ 良ちゃんの事でいらしたんじゃ・・・」

「ああ！ そうだった！ 一体どうしたんです？」^{おとしい}昨日の今日でしょう。

あいつから何か言つてきたんじやないですか？」

「ええ。今は帰れない。会社に迷惑はかけられないから辞表を出してくれつて言われて出して來たんです。課長さんもこれ以上無断で休むならそうしてもらおうと考えていたみたいで・・・丁度良かつたんです。ここも良ちゃんが帰つて來るまでの間、時々泊まりに来ようと思つただけで、帰つて來たら元に戻ります。」

「え？ そんな面倒な」としないでこのままずっといればいいじゃないですか。」

「それじゃケジメがつかないでしょう。私達は単なる幼馴染みというだけですから。」

「そんな。あいつ氣付いていないんですよ。綾子さんの大切さを。けど、ホントの話、あいつ今どこにいるんですか？ 綾子さん知つてるんでしょ？ うーべーんなんです？ オレ、行って連れ戻して来ますから。」

「ありがとうございます。結城さんここへ来ていただくと喜びやんもきっと嬉しいと思ひます。」

突然綾子は何を思い出したのか涙声になつた。

「あ、オレ何か悪い事言いましたか？ 綾子さんを泣かせるつもりなかつたんだけど・・・困ったな。どうすればいいんだ？」

オロオロする結城に綾子はあなたのせいではないと謝つた。

「あ、いや。オレの方こそすんません。でもあいつ、どこに行つたんだろう。綾子さんが行けないならマジでオレ迎えに行きますから。」

「いいえ。誰も行くことができない所なんです。多分この世で良ちやんしか行けない・・・」

不思議なことを言つ綾子に良を捜しに行くと意気込んでいた結城の動作が止まつた。

「どういう意味です？」

「あ、『めんなさい』。今は私にも上手く説明できないんです。いざれ良ちゃんの口から説明してくれると思ひます。」

悲しそうな表情でそう言わわれては結城もそれ以上追及することが出来なくなつたようだ。

「そう・・・なんですか・・・。じや何か判つたらすぐ知らせてくれ。これからもオレ、ヤツの友達ですから。」

「はー。ありがとうございます。」

結城の肩を落として帰る姿を見つめる綾子の顔はそれ以上に暗かつ

た。

この世に来てから数日後。そろそろ着ているものを洗濯したくなつた良は、絹代の父、正吉の服を拝借し自分の服を洗つた。もちろん洗濯板を使い、固形石鹼で洗うのである。それまで良は洗濯といふものは洗濯機がやつてくれるものだと思っていたので、いざ自分の手で洗うとなると全く勝手が分らなかつた。そこで一から絹代に教えてもらつことになつた。初めに衣服を濡らし、板にあてがい石鹼を擦りつけゴシゴシ洗う。一つ一つ丁寧に洗うのだ。昔の人は大変なことを普通にやつていたんだなあ。と率直な感想を口にすると、絹代は普段通りの事をしているのにそんなに感心する良の方がおかしい、変だ。と言つた。

洗濯をしたことがないならお勝手仕事をしたことがないだろうと、絹代は面白がつて食事の支度も教えようとした。ところがそれは母、正枝のひと言であえなく撃沈してしまつた。台所に男を入れるとは何たることーとつないのである。そこで良は初めてお勝手＝台所であることを知つた。しかも台所は女の仕事場であり、男がみだりに立ち入つてはいけない場所だということも初めて知つた。現代「良が言うところの」では、男が家事一切をやり、女が外で仕事をする。所謂主夫も増えているのだ。その事を言つと、正枝は女の仕事を放棄だ！と烈火の如く怒つた。助けてくれえ！とばかりに外に逃げると、ブーンとなにやらクサイ臭いがする。正吉が木のバケツから何かを掬つて畑に撒いていた。正枝に怒鳴られ逃げてきた事も忘れ、その中味の正体を聞くと“こえ”だと正吉が教えてくれた。

「こえ？ こえって何ですか？ それにクサイですね。何です？」

「本当にわからんのかね？ 一般的な言い方をすると、小便とフンだよ。こうやって畑に撒いて肥料にする。君の世界でもやつているだろ？」「

「うわーーこんなもん肥料にならないでしょーーー肥料は化学肥料

つてオレの田舎でも昔から決まってる！－うわっ！くっさ！－」
小便とフンと聞いて良は3メートルくらい後ろに飛んでしまった。

その足元に正吉はわざとフンをばら撒いた。

尻尾を巻いて逃げ出す良の後ろからアハハハと高笑いする正吉の声
が聞こえた。

その笑い声がまるで合図だつたかのように突然空襲警報が鳴つた。慌てて防空頭巾を被り防空壕へ逃げ込む。正吉も持つていた長柄杓を投げ捨てて壕へ飛び込んだ。すると間もなく米軍の飛行機が姿を現し、バリバリという爆音と共に砲弾が放たれた。文字通りアツツという間の出来事だった。

2時間後。空襲警報解除のサイレンが鳴り、壕から出た良はその惨状に体が凍りついた。逃げ遅れた島民が砲弾に当たりただの肉片と化していたのだ。この時代は一瞬の遅れが命取りになるのだ。ついさっきまでの長閑さは何だったのだろうと、改めて戦争の恐ろしさを痛感する良だつた。後は肉片となつた者の肉親と思われる年寄りがそれ（・・）を胸に抱き締め大声で泣いていた。

偶然ラジオ放送を聴いていた駐在所の大島は突然大声を挙げた。

「な・なんだとお！と・とうきょううがB29の焼夷弾にやられて壊滅したあ？！な・なんてこつた！こりや村長さんに知らせにやあ！」

手に触れた物を引っ掴むと大島は村長宅に駆け込んだ。

「そ・村長！今のラジオ放送を聴かれましたか！」

大島の怒鳴り声にやや落ち着きを欠いたような表情で村長の上村が奥から出てきた。その顔付きからやはり放送を聴いていた様子が窺えた。

「おお。大島か。あんたも聴いとつたか！一体何がなんだかさっぱりわからん。ついこの間は特攻隊が華々しく活躍しとると言つとつたばかりじゃ」というに。」

もちろんこの頃の一般庶民には、日本がミッドウェーでの敗戦に始まりガダルカナル島、サイパン島、レイテ島の主な南方の戦いに負け続け、その挙句ほとんどの兵士が名誉の戦死を遂げていたことは知らされていなかつた。1945年の3月には沖縄本島に米軍が上陸。その後の戦いで兵士及び島民合わせて20万人超の人命が失われた。その後も米軍は勢力を増大させ、東京空襲を行なう中継基地として硫黄島を占領、兵士2万人が亡くなつていた。それゆえ上村や大島が仰天したのも無理はない。ところが大島が急に顔を強張らせ、何やら上村に耳打ちすると上村の顔付きが変わつた。

「ここに連れて来るんだ！」

強い口調で命令すると、上村は屋敷の中へ引込んだ。至上命令を受けた大島は、来た道を転がるように取つて帰つた。

「誰に聞いたんじゃー黙つとると子供だからと容赦せんぞ！」「し・知らねえ！オレ、知らねえ！」

既に何杯もバケツの水を掛けられびしょ濡れになりながら勝一は叫んだ。

「聞けばお前は変な男を拾つたというじゃないか。あいつは敵国スパイなんぢやないのか！」

村長に良いところを見せようと必死の大島は特高並みに声を張り上げた。

「大島。そのくらいにしておけ。・・・いいか、勝一。さつきラジオ放送を聴いておつたら昨日東京がB29の爆撃を受けて壊滅状態にあるそうなのじや。大島の話だとお前は数日前にその事を知つておつたというじやないか。悪いようにはせんからその話もう少し詳しく話しちゃくれんかの。お前が拾つた男はどんな奴だ？」

柔和な顔付きでやんわりとした言い方とは裏腹に、蛇のよくな目つきでじつと見つめられ勝一の体がすくんだ。確かに良は変な男だ。おもちゃの箱を持つていて、これは電話だと言い張るし、8月に日本は負ける。東京も空襲に遭つて被害を被る？言語道断！そんな事は日本国民にあるまじき言動だ。しかしそれでも勝一は良を売るようなことはできないと思った。一瞬でも友達だと思った人間を裏切るようなことはできなかつた。増してその存在すら知られていないウイリーアムの事を明かすことは絶対できない。そう自分に言い聞かせた。

そのかたくなな表情に上村は大島に向かつて顎をしゃくつた。するとどこから出したのか、大島の右手には竹刀があり、勝一目がけて力の限り振り下ろした。

「ギャー！！」

村長宅一杯に響き渡るかと思われるほど勝一の叫び声。

「大丈夫だ。ここは特殊な加工が施されている部屋だからな。お前の声は一切外には漏れないんだよ。フフフ。」

含み笑いをする上村に、さすがの大島も冷水を浴びせられたように背筋に悪寒が走った。しかし今更後には引けない。引くわけにはいかなかつた。

再び上村が顎をしゃくつた。大島の手は機械的に竹刀を振るつた。洋服の上からでも背中の皮膚が破け、血が滲んできたのがわかる。数発目には勝一の意識が遠のいた。それでも上村の責め苦はおさまらない。再びバケツの水を頭から浴びせた。一瞬勝一の意識は戻つた。しかし大の大人でも耐えられそうにない拷問に、たかだか15歳の少年が耐えられる筈がない。それがわかると勝一をそのままに上村と大島は部屋を出た。そこは1つの部屋だと思われていたが、庭に建てられた土蔵だつたのだ。

勤労奉仕を終えて帰宅した一子は、勝から勝一が巡査に連れて行かれたことを聞かされるとすぐその足で駐在所に走った。大島巡査は丁度、外出から戻つたところのようで、濡れ手ぬぐいで顔を拭いていた。

「駐在さん！」

一子の呼びかけに大島はギョッとしたように振り返った。

「な・なんだ！ ああ、一子か。な・なにか用か。」

「勝一が！ 勝一が何かしたんですか！」

「勝一？ いや。何もしとらんよ。」

「叔父さんが勝一が駐在さんに連れて行かれたと言つたんですね！」

「あ？ ああ。確かに本官が勝一を連れて行つたよ。ただし、聞きたいことがあつただけで勝一は何も悪さはしとらんが。あの子は・・・・・それよりも一子。お前たちが拾つたあの男は一体何者だ？」

「あの男？」

「ほれ。お前達が助けて神社に世話になつたあの男だ。」

「良さんのこと？ 良さんがどうかしたの？」

良の名前を口にした途端、なぜか一子の顔は赤らんだ。しかし大島はそれに気付かず、親しげに一子の肩をポンポンと叩いた。

「おお！ その良という男だ。聞けばおかしな事を言つたとか。一体何を言つたんだ？」

「何つて別に・・・例えばどんな事？」

「例えば？ ・・・そうだな。例えば、東京が空襲に遭うとか。そいつた事だよ。」

「え？ 東京が？ どうなつたの？ どうなつたのよ！」

大島の胸元をグイグイ引っ張り食つて掛かる一子に、さすがの大島もタジタジになつた。

「か・かずこ！ お前は女のくせに仮にも警察官の儀に何をするか！」

「あー」・「めんなさい。で・でも。それって本当のことなの？」
「口答えせんでいい！お前は本官の質問にだけ答えればいいんだ！」
「は・はい。」

「今一度聞く。その良という男。変わったことを言わんかったか！」
「い・いいえ！何にも言いません！」
「何か隠しているのではあるまいな！」
「いいえ！どうして私が駐在さんに隠し事をしなくてはいけないんですか？」

「口答えをするなと言つたるひー本当に知らんのだな！」
「はー！」

「そうか。わかつた。では帰れ。」

大島は手で追い払うように一子を外に出した。

「駐在さん！勝一はー！」

「ここに連れて来る途中逃げられたわ。全くすばしつこい奴だ。一

子。勝一が帰つたらすぐ連れて来るんだ。いいね！」

それを最後に大島はぴしゃりと扉を閉めた。一子は一人、駐在所の前に取り残された。

バシャー！バケツの水が掛けられ、勝一の目が薄つすらと開いた。寒さで体がブルブル震える。

「寒いか勝一？」この毛布を掛けてやつてもいいんだぞ。ほひら。

おつととと。その前にお前が知つていることを正直に言つんだ。

東京の空襲はいつ、誰に聞いたんだ？」

何度もなく上村の口から繰り返される同じ詰問。だが僅かに残された勝一の正義感が、良とジル、2人の名を口にするな！と呟んでいた。

「し・しら・ねえ・・・・」

「そうか。わかつた。・・・おお！そつだつた！1つ言つておくがね、私は昔、柔道をやっておつてね。得意技は関節外しだつたんだよ。・・・言つている意味がわかるかね？わからんか？私がちょっとその気になればお前を肩輪にすることだってできるという意味だよ。・・・やつてみようか？」

そつ言つと上村は「ゴー！」笑いながらかるくじて正氣を保つていてる勝一の右足を取りゆづくじと捻つた。ギギギギ。ゴリッ！突然気味の悪い音が部屋中に響いた。

「ギャッ！」

その叫び声と共に勝一は一瞬目を大きく見開き、その直後再び氣を失つた。上村が手を離すと、勝一の右足がコトーンと大きな音を立てて床に落ちた。しかしその足は勝一の体とは全く別の、あらぬ方向を向いていた。

「まったく。素直に吐けばこんなことにならずに済んだものを。手間を取らせおつて。・・・まあ、仕方がない。明日大島に始末させよつ。」

いまいましそうに咳きながらペッとつばを吐き、何事もなかつたよう上村は土蔵を後にした。

翌朝早く、上村から使いの者が極秘で大島のもとを訪れ、至急村長宅に来るよう命じた。何だらうと思いつつ大島は身近なところにあつた服を着て村長宅の門をくぐった。

上村は大様に構えていたが大島の姿を見ると小走りに近寄ってきた。そして大島の耳にコソコソと何か囁くと自分はサッサと中へ入つてしまい、その後は顔を見せることはなかつた。

一方重大な使命を科せられた大島は、がっくりと肩を落とした。しかし村長の命令は天の声と同じこと・・・重い足を引きずるようにある土蔵の扉を開け、一步足を踏み入れると腰を抜かすほどに驚いた。勝一の体は九の字に曲がっていた・・・にもかかわらず右足が全く逆の方向を向いていたからだ。しかも正気に戻つていた勝一は痛さの余り、顔が腫れるほど泣いていたのだ。泣くといつても声も出ない状態のまま、ただ涙が顔中を濡らしていたと表現した方が合っていた。その光景を見た大島は勝一が不憫でならなくなつた。上村の命令とは、土蔵の中にあるモノを人知れず始末しろ。というものだつた。しかし小さい頃から知つてゐる勝一の哀れな姿に大島の心は乱れた。そつと抱き起こし、背中におぶつて誰にも見咎められないように村長宅を出た。だが、誰かが見ていたとしても、上村の家で起こつた出来事に口を出すような者などいるはずもなかつた。

「勝一。おっちゃんが悪かった。堪忍。堪忍な。」

お経のように呴きながら大島は海辺に向かつた。公に助けることはできないため、ひとまず海辺の松林に勝一を隠し、一子を呼ぼうと考えたのだ。

「勝一。ここで待つてろ。今すぐ姉ちゃんを呼んで来るからな！」
泣きながら林の中に勝一の体を横たえると大島は何度も振り返りながら去つて行つた。

辺りが元の静けさを取り戻した頃。勝一のいるところから少し離れた場所に2つの人影がぬつと現われた。周囲に目を配り、小声で何やら話しながら勝一に近づいた。1人が勝一の体をそつと抱き起こすと耳元に何か囁いた。微かに目を開けた勝一の瞳がその姿を捉えると、どこにそんな力が残っていたのかと驚くほど強い力での腕を跳ね除けた。

「お・お・おまえは！」

必死に抵抗する勝一を2人は樂々と抑え、大きな布袋に押し込むと、再び周囲を見渡しながらどこへともなく消え去った。

それから30分後。大島からの知らせを受けた一子がこつそり指示された場所に来た頃には、呼べど叫べど勝一の姿が現れる事はなかつた。

「お待たせいたしました。村長さんが直々に神社にいらっしゃるとは一体どんなご用件でしょう。」

「いや、神主さん。用というのは他でもない。お宅で世話をしている男の件なんじゃが。・・・ありや 一体何者なんだね? どこの馬の骨なんだ?」

思いがけず上村の訪問を受け正吉は戸惑つた。今まで直接上村が神社を訪ねて来たことなどなかつたからだ。おまけにその用件というのが良のことだつたので更に驚いた。

「は? ああ、良さんのことですか。あの人は馬の骨なんかじやありませんよ。私の友人の息子さんでね、東京から疎開して來たんです。なんでも赤紙が来て入隊する直前にここに異常が見つかって免除になつたそなんです。しかし親としても華々しく送り出した手前、隣近所に顔向けてできないということで、空氣のいいこの島で養生がてら時を稼がせて欲しいと頼まれてうちで預かることにしたんです。それが何か?」

正吉は自分の胸に手を当てて良が肺病であるらしいことを暗にほのめかした。当時結核はまだ不治の病であり、一旦罹患するとあとは死ぬのを待つばかり。と思われていた。しかも他人に伝染するのだから尚更始末が悪い。それを聞いた上村の態度が極端に軟化した。

「そ・そつか。あんたも大変じゃな。病気持ちの息子を預からにやならんとは。」

「こんな時代ですからね。出来る事は何でもやりますよ。特に友人の頼みとあらばね。それに私の仕事は神に仕えることですから、どんな人にも平等に接するのが当たり前です。何とも思つておりませんよ。」

「難儀なことじやな。しかしその男がもし何かしょつとしたならすぐ知らせて欲しい。宜しいかな?」

「何か、と言いますと？」

「何かは何かだ！分ったな！」

じろりと睨みつけ上村は出されたお茶に手も付けず、肩をいからせて帰つて行つた。

勝一が行方不明になつてから1週間が経つた。その間、一子は綱代と共にいつB29が襲つてくるかもしれない恐怖の中、海辺の松林周辺をしらみつぶしに捜し歩いた。しかしその行方は杳としてわからなかつた。

更に1週間が経ち、何かにとり憑かれたようにただ1人の人を捜し求めて歩く一子の姿は、村人の目には戦時下の中であつてさえ異様な光景に映つていた。事実、村人の近くを通るときの一子は何やらブツブツひとり言を言つていたし、目が合つと“勝一帰つて来たんだね！”と叫び、誰彼構わず引っぱつて連れて行こうとしていた。決して暴れるわけではないが、これではいつどうなるかわからない。と村人の相談を受けた上村は、叔父の勝と図つて落ち着くまで彼女の身柄を村長宅で預かることにした。一子が入れられたのは勝一が監禁されていたあの土蔵だったが、その後一子を見た者は誰一人いなかつた。

良が姿を消してから1ヶ月が経つた頃。綾子が良の部屋を掃除していると、ひょっこり良の母、京子が訪ねてきた。

「お・おばさん・どうして？」

事情を知らせていなかつたことに気付いた綾子は必要以上に動搖した。

「あら。綾ちゃん。来ちゃいけなかつた？」

「い・いえ。」

益々動搖する綾子。

「良は？出かけてるの？」

京子の声はいつも屈託がない。

「は・はい。」

「どうしたの？顔色悪いわよ。」

「い・いえ。何でもありません。それよりどうしたんですか？何か急用でも？」

「急用つてわけじゃないんだけど。うちに来る用事があつたからついでに寄つてみたのよ。それにしても綾ちゃん、いつも掃除してくれてるの？」

「い・いえ。いつもつてわけじゃないんです。週に一度くらいです。あとは良ちゃんが自分でやつているみたいです。」

「あの子が？あの子にやらせたら片付けるどころか逆に『いいだらけになるわよ。あ！もしかしたら炊事とか洗濯もやらせてるの？』

「はい・・ついでですから。」

「んまあ！全くとんでもない子ね！綾ちゃん迷惑かけてごめんなさいね。会つたらキツく言つておくわ。このままじや綾ちゃん一生お嫁に行けなくなるわよ。あの子も早くいい人見つけて結婚して欲しいわ。」

京子の最後の言葉は綾子の胸にグサリと響いた。京子は暗に綾子は良の嫁に相応しくない、いわば眼中にないということを仄めかしていたのだ。まあ仕方ない、と綾子は思い直した。自分は両親を早くに亡くし、笹崎家の世話になつていたのだ。そんな娘を嫁に貰う道理がない。いずれにしても良と自分の間柄は幼馴染という域を出でいないのだ。そんな希望を持つのが変なのだ。綾子は小さくため息をつくと、せり気なく話題を変えた。

「ところでおばさん。鼓島つてご存知ですか？」

「つづみじま？ わあ。聞いたことがあるようななによくな・・・

で、そのつづみじまがどうかしたの？」

「良ちゃん、今そこに行つてるんです。」

「あら！出張だったの？それならそうと早く言つてくれれば良かつたのに。 あら！もうこんな時間！本当はね、婦人会の人達ところからはとバスに乗つて二ユーハーフショーやを見に行くのよッ！東京魅惑のナイトなんとかつてコースなの！お互にお父さん達には内

緒なのよー。じゃあねー！

京子は綾子が出したお茶に田もくれず、嵐の如く去つて行つた。時
間になると10分程度の出来事だったが、ルンルン気分の京子の後
姿を見送つた後、誰に憚ることなく綾子は大きなため息をついた。

「最近一子ちゃんの姿を見かけないけどどうかしたの？」

正吉が尊重についた善意のウソが原因で、外を自由に歩けなくなつた良が心配そうに綱代に聞いた。

「そうなのよ。私も一子ちゃんの家に行つて叔父さんに聞いたんだけど、勝一君がいなくなつてから一子ちゃん、少し変になつていた。それで村長さんの紹介でどこかの療養所に入れられたらしいわ。叔父さんもそこの名前は知らないと言つてたわ。でも私、叔父さんウソついていると思うのよ。私のカンがそう言つてるの。一子ちゃんは多分、座敷牢のような所に入れられてる…そう思うわ。でもあの家はそんなに大きくないからどこか違う所ね。」

そういう綱代の目が妖しく光る。

「どこかつて？」

「はあ。それが分らないから問題なんだわ。ねえ良さんはどう思つ？」

「うーん。そうだなあ。オレには君のような優れた感覚はないから当てずつぽうで言つしかないけど。オレも叔父さんがクさいと思うよ。」

「くさい？ そうねえ。叔父さんお風呂に入つてないから確かに臭うけど・・・どうして臭いつて分るの？」

「ハハハハハ。くせいつていうのはそういう意味じゃないよ。怪しつていう意味さ。俺らの時代じゃ普通に使う言葉さ。」

「あら？ そうなの。良さんの時代つていろんな言葉があるのね。私も行つてみたいな。」

夢見るような目つきで宙を見る綱代。

「きっと行けるよ。この戦争が終わつたら急速に日本は躍進する。10年の間に飛躍的な進歩を遂げるんだ。だから絶対に負けちゃダメだ。君の将来はこの戦争を無事乗り切るかどうかで決まってくる。」

先は見えてるんだ。分かるね？一子ちゃんと勝一は大丈夫だ。だから君もしつかり生き抜くんだ。いいね！」

良の激励の言葉に深く頷く綱代。

「ところで母屋にラジオはあるかい？」

「え？ ラジオ？ あると思うけど。それがどうかしたの？」

「日本がどうこう放送をしているか知りたいんだ。もう3月も終わりだろ？ 東京に爆弾が落とされてから半月が経った今、どんなふうに情報が流されているかを知りたい。もし良かつたらここに持つて来てくれないか。ほら、オレは今動けないだろ？ 一応病人ってことになってるからさ。」

茶目っ氣たっぷりにウインクしてみせる良。こんな表情を見たら綾子は悲しむに違いない。なぜなら良は綾子の前ではそんな顔を見せたことがなかつたからだ。そのウインクに顔を赤らめる綱代。

「だ・ダメよ！ そんな事。」

「え？ 何がダメなんだい？」

「で・電波が弱くて。ウチはなかなか入らないのよ。・・母屋でようやく聞ける程度なのよ。だからこりでは無理だわ。」

「そうかあ。じゃ君が聞いて知らせてくれ。なるべく新しいニュースをね。」

「にゅーす？ それはどういう意味？」

「ああごめん。報道ということさ。」

「報道ね。分つたわ。少し待つて。」

綱代が出て行くと良は今にも泣き出しそうな空を見上げ、フーッと息を吐いた。一体オレはこの先どうなるんだろう。ふとそんな想いが脳裏をよぎった。

ジジジジ。真剣な顔付きでラジオの選局つまみをひねる絹代に正吉が声をかけた。

「どうしたんだい。お前が聞きたいような番組は何もやつてないよ。

「……」

「絹代。耳がないのかい？」

「……ごめんなさい。少し静かにしてもらえませんか。今重要な報道を聞こうと思ってるんです。」

「報道？今2時半だからその時間帯じゃないよ。それで何が知りたいんだい？さつき聞いたので良ければ教えるよ。」

「え？ 本ですか？……すみません。お父さんが聞いたもので良いので教えてください。良さんが知りたがっているの。なるべく新しい内容のものをお願いします。」

「そうか。じゃ私から直接伝えよう。」

「え？ダメよ。私が頼まれたのだから私の口から言わなきゃいけないんです。」

「……絹代。その事で言つておかねばならないことがある。いいから座りなさい。いいかね。良さんはいざれ自分の住む世界に帰る人だ。それがどこか私は知らない。だがここでないことは明らかだ。いくらお前があの人を好いても叶わぬことなんだよ。確かにお前の呼びかけに応じて来てくれた人だから、お前の言う通り私達はあの人を信じ行動しようと考えている。だがそれだけのことだ。いずれなくなる人だ。深入りだけはしないでおくれ。それに村の人達の目もある。神社の娘は得体の知れない男を引っ張り込んでいると噂になり始めているのをお前も聞いただろう。こんなご時世だ。みんなが食っている時に、巫女のお前が人の口に上のような行いだけはしないで欲しい。分かるね。分かったならこれからはなるべく

離れに行くのは控えなさい。食事はお母さんが持つて行くから。いいね。」

思つてもみなかつた父、正吉からの苦言に絹代は啞然となつた。今まで全てにおいて理解のある父親だと思つてきた正吉が、友達の親と何ら変わらなかつたことにショックを受けたのだ。おまけに私が良さんを好き？そんな事あるわけない・・・じゃ・・・ない？思い当たる節がいくつか脳裡に浮かんだ。それに良はこのままずっとここにいるものだといつしか考えるようになつていたことも事実だ。良とのことが村人達の噂になつてゐることは知つていた。といつても絹代は自分の両親だけはそんなことを気にするような低俗な人種だと思つていなかつた。しかしこの中はそうではなかつたのだ。大人は汚い！私はそんな大人にはなりたくない！だが、一家の当主である父親は絶対だ。絹代は泣きたくなる気持ちをぐつと抑え、自室に引き下がつた。

「良さん。入つても宜しいかな？」

神妙な正吉の声。

「はい。どうぞ。」

サツと障子を開けて入る正吉の顔付きがいつもと違つよつに見えた。正吉は良が勧めた座布団に座るとすぐ用件を切り出した。

「絹代から聞きました。報道の何を知りたいのですか？」

「ああその事ですか。お父さんの様子から何を聞かれるのかビクビクしましたよ。ええ、そうなんです。今日の戦況をラジオでどう報道しているのか知りたいと絹代ちゃんに頼みました。ラジオを貸してくれと頼んだら、ここは電波が弱いから無理だと言われたのでそうお願いしたんですが、それが何か？」

「そうでしたか。それであの子は必死になつてラジオを聴いていたのか。・・・良さん。1つ言つておかねばならないことがあります。」

「な・なんですか？改まつて。」

「絹代は巫女である以前に私のたつた一人の子供です。その娘にあらぬ噂を立てられて困るのです。巫女とはいへこの神社を存続していくためには跡継ぎが必要です。婿の来てがなくなるようなことは極力避けなければならないのです。」

良の目をじつと見つめる正吉だが、当の良にはその意味がさっぱり理解できない。

「おっしゃつている意味が分りませんが。」

「そうですか。ならば单刀直入に言います。これからは絹代が1人の時には娘に近づかないで貰いたい。村の人からあなたと娘がどうにかなつていい。とあからさまな表現で言されました。あなたはずれ自分の場所に戻る人です。娘に変な期待を持たせないで欲しいのです。あなたがそういう類の人でないことはわかっています。し

かし村の人はそうは思わない。なるべく噂になるような事態は極力避けたいのです。解かつて頂けるでしょうか？」

「……驚きました。お父さんから言われるまで僕はそんな事など考えた事もなかった。……わかりました。これから絹代ちゃんに用事がある時はお父さんかお母さんを通します。それなら良いですか？」

良は驚きに表情を隠せなかつた。食料が無くても明日の命が分らなくとも、人として穏やかに暮らせるこの時代が羨ましいと思い始めたのに、今ほど自分の住んでいた21世紀が恋しいと感じずにはいられなかつた。ああ、帰りたい！心底そう思った。だが・・・帰れないのだ。

その後、正吉がラジオから流れたニュースについて喋っていたが、良の頭の中には何一つ残らなかつた。ただ大日本帝国は特攻隊の活躍により、勝つて勝つて勝ちまくる、と言つているのだけが耳に残つた。

その夜から良は本当の病人のようになつてしまつた。食事にも手を付けず、部屋の中からつつかえ棒をして布団を頭から被り、誰が声を掛けても返事さえしなくなつた。

さすがの正吉も困り果て、絹代に何とかしてくれと頼んだ。ところが絹代が離れに行つて声を掛けてみても相変わらず部屋の中は静まり返つたままだ。こうなつた以上は良自ら部屋を出るまで静観するしかないという結論に達した。

守野家の人々がやきもきしながら時をすゝむ日。ようやく良がフラフラと幽靈の如く離れから出てきた。良をちょっと年の離れた弟のように感じていた正枝は、飛びつくようにかたわらに寄りその体を支え、母屋に連れて来た。その光景を見た正吉も涙を流し喜んだ。

絹代は勤労奉仕から帰宅後、その知らせを聞くやすぐ良の元に駆けつけた。だが良の態度が以前と180度変わっていたことにひどく傷ついた。絹代に対して妙によそよそしいのだ。冷たいというのではなく、当たり障りのない会話しかしない。という意味だ。笑顔なのだが以前とは違う。絹代はそう感じた。部屋に籠もった理由を聞いてもただ静かに微笑むだけ。仕方なく両親に聞いたが、やはり良はその理由を言わなかつたらしい。そういうわけでその件にして深く詮索することは止めようといつことになり、正吉以下、守野家の人々からは一度とその話題が出ることになかった。

一旦起き上がる意思が働くと若い良はめきめきと体力を取り戻した。芋だけの食事ではあるが食えないよりはましだ。出された芋を毎回ペロリと平らげ、神社の仕事も手伝つたおかげで以前より筋肉が付いたように思えた。

そんなある日。良はふとあの祠に足を向けた。散歩がてら行ってみることにしたのだ。

ギギギギ。相変わらず氣味の悪い音だ。中に入つてみるとあの日のままの状態だ。ビルがいなくなつたと絹代が知らせに来て一緒に来た時と全く同じだった。変わつたのはホコリが積もつたのと蜘蛛の巣がやたらに増えたことだろうか。何もないのを確認すると良は祠を出た。

そのとき草ぼうぼうの茂みの中から良を呼び声がした。初め空耳だ

ろうと気にしなかったが、何度も呼ばれているような気がしてふとあたりを見回すと、そこに1人の米兵が腰を低くして自分の方を見ていた。目を凝らして見ると顔に肉が付いて少し太ったような感じだが、紛れもなくそれはウイリアム・カーペンターその人だつた。

「ビル？ ビルじゃないか？！」

思わず日本語で言つてしまい、改めて英語で言い直した。

「リョウ！」

2人は1ヶ月ぶりの対面に我を忘れて抱き合つた。

「一体どうしたんだ！ 心配したんだぞ！ あんな書置きだけでいなくなるなんて！」

「ごめんなさい。ワタシ、ワルイ事しまシタ。みなさんにシンパイかけてしまつて・・・」

「そうだよ！ ってあれ？ ビル。君、日本語が話せるのか？」

確かにビルは日本語を話した。カタコトではあるが立派な日本語だつた。

「ハイ。あるシトにオシエテもらいました。そのシトの事でハナシ・アリマス。だからワタシずっとアナタがここ来るの、マッテました。イッショに来てクタサイ。」

ビルは良の返事も待たず、中腰のまま早足で歩き出した。つられて良も同じ姿勢で歩き出した。

それから30分後。ビルと良は周囲に注意を払い、身を隠しながら遠回りをして海岸に出た。ここで太陽が沈むのを待とうとビルが言った。村人に見つからないように身を潜め、良にも同じようにするよう付け加えた。

話し声が漏れるのを警戒し、ずっと無言のまま2人は暗くなるのをひたすら待つた。やがて完全に陽が落ちると待っていたかのように一艘の小船が近づいてきて2人の前方に止まつた。漕いでいたのはビルと同じ米兵だ。暗黙の了解でビルは良を促しその船に乗つた。

スルスルと海面を滑るように船は沖に向かつて進んでいく。時間的にどのくらい経つたのかわからないが突然船が止まつた。する

と3人からかなり離れた場所の海面がムクムクと盛り上がり、真っ黒な潜水艦が浮き上がってきたのだ。あまりのことに良は言葉を失つた。しかし2人の米兵は予定通りといった表情で少しづつその大きな物体に船を近づけた。

手が届く位まで近づくと、おもむろにハッチが開き、中からまた違った米兵が顔を出した。早くしろ、と言つてゐるようだ。3人は素早くそれに乗り換えた。船はどうなる？その質問にビルは小さな無線機を見せスイッチを押した。

「小型の時限爆弾です。10分くらいでの船は海に沈むでしょう。ですから気になさらないで。」

日本語の表現が難しいのかビルは英語で答えた。

「何だつて！そんな簡単に・・・」

「大丈夫です。あなたを送り届ける船はまた充分にありますから。良が戻れない事を心配していると勘違いしたビルは安心させるように言つた。

それから2人はどんどん奥へ進み、あるドアの前で止まつた。どうしたんだ？と聞いたげな表情をする良にビルは無言のままドアを軽くノックした。すると中から今にも消えそうな声で応答があつた。静かにドアを開けるビル。そのあとから続いた良は中の人物を見た刹那、全身に戦慄が走るのを感じた。

「か・かずこ・・ちゃん?」
狭いベッドに寝かされ、体中包帯だらけの人物はあの一子だつたのだ。一子も入つて来たのが良だとわかると、傷だらけの身体を必死に起こし、両手を広げ近づいた良の胸にしがみつきわんわん泣き出した。

「い・いつたいこれは・・・」

「それは私から説明しましょう。」

良の後ろに控えていたビルが口を挟み、これまでのいきせつを話し始めた。

勝一の消息が分らなくなり一時錯乱状態に陥つた一子は、転地療養と称し村長宅に預けられた。まず最初に入れられたのは蔵のような部屋で、灯りも乏しくおよそ病人が落ち着けるような場所とは言い難いところだつた。夢うつつの中で一子は誰かが中に入つてくるのを見たが、それが村長と駐在の大島だということに気付くまでかなりの時間を要した。

「村長・・・さん? 駐在さんも。どうして?」

恐る恐る訊ねる一子に2人は薄ら笑いを浮かべた。

「お前は狂つたのだよ一子。だからね、ここから出て行つてもらわにやならん。いいね?」

「村長さん? 私・狂つてなんかいません! 勝一がいなくなつてずっと搜してて、それで・・・」

最後の言葉は涙で途切れた。

「勝一? おお! そうじゃな。で? 見つかつたのかな?」

そつと聞いて一子を見下ろす上村の目で、一子は冷水を浴びせられた気がした。思わず首を横に振る。

「そうかそうか。それは心配じゃねえ。」

言葉もおざなりで感情が全くこもっていない。

「一子。お前はやはりまだ直つとらんようだな。少し気合を入れてやらんといけんの。大島？」

上村が大島に声をかけるとそれまで黙っていた大島が突然竹刀を振り翳した。問答無用である。

「ヒー！！」

一子の声が土蔵の中に響く。だが大島は機械仕掛けの人形の如く黙々と竹刀を振り下ろした。

「どうして！どうしてなの？」

一子は痛みに耐えられず、ボロボロ涙を流しながら切れ切れに叫んだ。

「どうしてだと？フン！まあいいわ。どうせ最後だ。教えてやろう。勝一はな、今のお前のようにこの大島に叩かれ骨を碎かれて死んだわ。」

その言葉に驚いたのは一子だけではなかつた。上村は勝一の死の原因を作つたのは大島だと言い、悪行の全てを大島にひつかぶせてしまつたのだ。大島にしてみれば村長という立場の人間から命令され取つた行動が、最後の段階になつてして全責任を負わされてしまつた形になつた。ああ！俺は何という馬鹿なことをしてしまつたんだ！目の前が白くなつて大島の巨体が柳の枝のように折れ曲がりそのまま倒れた。

「ええい！役立たずな男だ！」

上村は大島の手から竹刀をもぎ取り、その勢いのまま再度一子目がけて振り下ろした。ビシイ！！その音と共にグシャと鈍い音がして一子の身体が変形し崩れた。

「ふん！背骨が折れたか。やわ柔な身体だ。オイ！大島。起きろ！起きてこのごみを捨てて来るんだ。全く身体ばかりでかくて使えん男だ。いずれお前も処分せにやいかんな。オイ！起きろ！」

上村は足で大島の巨体を転がすと、薄つすら目を開けた大島に向かつて命令した。

「どうせ用済みの娘だ。勝一と同じくお前が処分しろ。いいな！」
上村は大島の返事も待たず土蔵を出て行つた。一子は背中の痛みに
負けそうになりながらも、はつきりと上村が言った“勝一と同じく
処分しろ”という言葉を聞いた。勝一は殺されたのだ。それを認識
した途端、一子の意識が遠のいた。

一子が気付いたのはこのベッドの上だった。体中包帯巻きにされおまけに背中が硬い板のようなもので固定されていて全く身動きが取れない。不安がる一子にビルは日系アメリカ人の通訳をつけた。彼を通して自分と友人の2人で一子を助けた事。加えて勝一も同じように助け、別便でケガの治療のためにハワイに向かつた事を伝えた。

「え？ 勝一が！ ジャ勝一は無事なのか？」

思わず良はビルの話を遮った。

「はい。勝一は初め、私を見ると動けない身体を無理に動かし必死に反抗しました。しかし私達の力には勝てず、泣く泣く我々の船に乗りドクターの診察を受けたのです。でも船上での治療には限りがあります。そこで止む無く彼を先にハワイに送ることにしたのです。彼は捕虜になるくらいなら死ぬ、と泣き叫びましたがドクターに鎮静剤を注射され、眠つた後船に乗せられハワイに向かつたのです。「そうか！ そうだったのか！ 良かつた！ 良かつたなあ一子ちゃん！」

！」

良の目からはうれし涙が溢れていた。一子もその事を思い出したのが同じように泣いている。ただ傷が痛むのか、時折顔をしかめている姿がたまらなく愛おしくなり、良は思わず一子を抱き締めていた。もちろん良は兄が妹をいつくしむような感覚で取った行動だったのだが、一子にとつては初めての出来事だったので、そのうろたえぶりはまだ事ではなかつた。包帯で覆われていたため誰にも悟られなかつたが、一子の身体は恥ずかしさと嬉しさで真っ赤になつっていた。

「・・・・リョウ。話があります。」

ビルはチラッと一子を見ると、良に田配せをして先に立つて部屋を出た。一子には聞かせたくない内容なのだろうと、良も静かに彼の後に続いた。普段誰も使用していない部屋に入り、鍵を掛けるとすぐビルは本題に入った。

「私達は任務が終わり次第本国へ帰ります。この戦争は近い将来連合軍の勝利で終わります。しかし戦争を終わらせるためにはきっかけが必要です。そのきっかけを遂行するのはもう少し先になります。でもその前に私達はある事をします。そこでリョウ、君に頼みたいことがあります。一子は大丈夫です。このままハワイに連れて行き、勝一と合流させて治療に専念するよう取り計らいます。私がお願いしたいことは・・・」

そこで突然ビルは良の耳を引っ張り、一段と声のトーンを落としてある事を囁いた。その内容に良の顔色が見る見るうちに青ざめていった。次第に体中が震えだし、話があわつてもあまりの衝撃のため良はしばらくその場から動くことが出来なかつた。

「・・・だから村の人達を君の手で救つて欲しい。これは極秘事項だから本来ならそんな事をする必要はないんだが、私はキネヨに命を救われた。そのお礼がしたい。キネヨ一人を救えればいいのかもしないが、それでは彼女が悲しむだろう。両親、友達も一緒だと気持ちが安らぐ。どうだろう。手を貸してくれないか？」

返事を請つように両肩にポンと手を置かれ、ハツと我に返る良。

「え? 今何て?」

「手を貸して欲しいと言つたんだ。」

「手を貸すつて何に?」

「君。今まで私の話を聞いていなかつたのか?」

「聞いてつて。あれ冗談だろ? あんな事本気にする奴なんかいるわ

けないじゃないか。オレをからかつて楽しんでるんじゃないのか?」良の言葉にビルの表情が一変した。それまでの柔軟な顔が突如として軍人のそれになった。

「冗談だと!こんな事を冗談で言える人間がいたらお目にかかりたいものだ!手を貸すのか貸さないのか!…2つに1つだ…どうする!」

「えつ。そ・それじゃさつきの話は本当なのか?本気でそんな事をやるのか!君たちは人の命を何だと思つてるんだ!」

「…・・・私だって人間だ。できればそんなことはしたくない。しかしこれが現実であり、戦争なんだ。さつきの質問の答えをまだ聞いていないが、どうする?」

「どうするって…・・・オレにそんな大それたことが出来ると思つのか。」

「出来る、出来ないは聞いていない。やつて欲しいんだ。もし出来ないと呟つのなら、君をここから出してやる事は出来ないといつことになる。」

「し・しかし…・・・」

動搖する良にビルは更に詰め寄つた。だが果たして1週間という短い時間で彼が言つような計画が成功するのだろうか…・・・。

「 笹崎の奴。どこに行つたんでしょうね。綾子さん、本当に知らないんスか？」

良がいなくなつてから頻繁に元同僚の結城がアパートに訪ねてくるようになった。初めは本当に良を心配しているのだろうといろいろ相談に乗つてもらつていた綾子だつたが、最近になつて良の安否を気遣うのは表向きで、本当は綾子自身に会いに来ているのではないと感じてきた。それは別に良いのだが、時折必要以上に心配されると逆に困つてしまつことがあつた。本音を言えば、放つておいて！と叫びたい心境なのだ。しかし元々根が優しい綾子はそれも言えず、ただ悶々としていた。以前量を心配する余り爆発したことはあつたが、普段は決して他人に対し怒りの感情をぶつけたことのない彼女だつた。結城に対してもただ静かに微笑むだけ。それをいいことに結城の訪問は回を増すごとに大胆になつていつた。

「 さあ。私にも分らないんです。」

何度も繰り返される問答。

「 ……ところで綾子さん。何か困つていることはないですか？僕にできることがあればどんなことでもしますから、遠慮なく言つて下さい。」

「 ありがとうございます。でも今のところ何もありませんわ。」

この問答しかりだ。

「 そう簡単に言わづ。ね？・・んー。そうですね。例えばガスが漏れているとか、電気が切れているとか、そういうことでも構いませんよ。アレ？ そういうえば笹崎の奴、時々メール見てくれつて言ってたな。ちょっといいですか？」

そう言いながら強引に中に入ろうとする結城を何とか阻止しようと前に立ちはだかる綾子。

「 あーでも大丈夫です。メールなら毎日確認していますから…」

その押し問答に隣の学生が何事か、と顔を出した。バツが悪くなつた結城はまたそそくさと帰つて行つた。ホツとする綾子にその学生（杉村というらしい）が、『あいつが来たらまた追い払つてあげるから声を掛けて下さい』と言つてくれた。

再び米軍の小船に乗せられて接岸した良は真っ暗な道を神社に向かつて走った。空襲のない星空を見上げ郷愁にひたりたい・・・とてもそんな気分にはならなかつた。ともかく急いでビルから聞いた恐ろしい計画を正吉達に知らせ、一刻も早く島から脱出させなければならないのだ。

神社に駆け込むと正吉達が全員顔を揃えていて、血相を変えて飛び込んできた良を驚いた表情で見つめた。

「良さん！今までどこに行つてたの！ずっと捜してんだから！」いつも冷静な綱代が泣きながら良に抱きついた。

「綱代！」

今回ばかりは正吉の怒声にも動じない。正枝がそつと肩に触れるとよみやく綱代は良から離れた。

「おじさん！おばさん！綱代ちゃん！何も聞かずすぐこの島から脱出して下さい！いざれ大変なことが起るんです！」

肩で息を吐きながら良は一気に捲し立てた。しかし突然訳も分らず島から脱出しきる、と言われて、はいそうですか。と素直に従う人間がどこにいるだろうか。

「良さん。今までどこに行つていたか、という綱代の問い合わせえずそんなことを言い出すとは一体どういうア見だね？返答によつては今すぐ君がここから出て行かなくてはならないことになるよ。」正吉の厳しい顔に少し落ち着きを取り戻した良。改めて呼吸を整えるとそれまでの経緯を語り始めた。

まず第一に、2月の中頃。1人の負傷した米兵を助け、しばらく匿つていたが、その男が突然理由も告げず消えてしまつた事。ところが今日しばらくぶりにその場所に行ってみると、その米兵が自分を待つており、自分を伴い彼が乗船している潜水艦に連れて行か

れた事。そこで大怪我を負つた一子に会つた事。そこで勝一の消息も判明し、一子から間接的に聞いた村長と駐在の大島の2人が彼等に耐え難い屈辱と暴行を加え、そのせいで一子と勝一は生死を彷徨う羽目になつた事。そして最後にその米兵からとんでもないことを打ち明けられた事を話した。

「え？ ビルが？ ビルが生きていたの？ それから一子ちゃんと勝一君も！ でも生死を彷徨うつて一体どういう事なの！」

「一子ちゃんが途切れ途切れに説明したところでは、どういう理由かわからないんだけど、村長とお巡りさんが一子ちゃんを拷問したそうなんだ。そして半死半生の彼女を海辺に捨てたそうだ。同じようく勝一も捨てられたらしい。そこをビルが助け、2人は治療のために別便でハワイに行くことになつたそうだよ。それよりもビルが言つた最後の話というのがね・・・広島と長崎に原子爆弾を落とす計画があり、その予行演習としてこの鼓島で同じような実験を行なうということなんだ。規模的には小さいものらしいが、威力はかなりなもので、もしかしたら島そのものが消滅するかもしれないんだ。ビルとしては自分を助けてくれた綱代ちゃんに恩返しをしないではいられない。だから実験を行なう前に島を脱出して欲しい。それに出来ることなら他の島民も一緒に行動してもらえると都合がいい、ということらしい。 分つてくれた？ オレが一刻を争うと言つた意味が。」

良の切迫した訴えも3人にはあまり効果がなかつた。ポカンとした表情で良を見ているのだ。それとも事が重大すぎて掌握しきれないのだろうか？

「・・・村長と駐在さんが・・・」

そうではなかつた。正吉には島がなくなるかもしけないという事よりも、上村と大島の所業が信じられないのだった。

「おじさん！ 島がなくなるんですよ！ 村長とか駐在とかいう段階ではないんですっ！」

良はみんなに事の重大さが充分伝わっていないのかと必死だつた。

「え？ああ。島ね。良さん。私達には島はあってもなくても同じなんだよ。見てくれ。これが何だか分るかね？」

そう言って正吉が懐から出したものは、赤い紙に包まれた白い粉だった。

「何ですか？これ。」

「青酸カリだよ。致死量のね。戦争が激化してきた際に軍から1人1包づつ配給になったのだよ。捕虜になるくらいならこれを呷あおつて死ぬという意味だ。だから島民は島から逃げ出すような者は1人もいないと私は信じているよ。たとえ本当に島が無くなろうともね。ただ私としては絹代たち若者だけは助けてやりたいと思つよ。私達は充分生きてきた。ここで死ぬことは悔いはない。良さん。絹代達だけでも救つてやって欲しい。頼むよ。君に全てを任せる。以前絹代が言つていた君が救世主になるというのは多分この事なのだろう。君の話を聞いてそう思えてきたよ。」

がつちり良の手を握り、任せると落ち着き払つて言つた正吉の目には涙が光っていた。

「青酸カリ・・・・」

歴史の時間で習つていたが、実物を目の前にし、更に躊躇なくそれを使うと言つた正吉に、戦争尾とは命を奪うだけでなく、その人の未来をも奪う憎むべきものだと知らされた。

「いやよ！私だけ逃げるなんて！」

突然絹代が立ち上がつた。

「絹代。お父さんの命令だ。良さんと行きなさい。行つて日本の、いや鼓島の行く末を確かめなさい。いいね！」

それでも尚、いやいやをする絹代に正枝が静かに諭した。

「お母さんからもお願ひするわ。十年後、二十年後の日本をお前のもじつかり見て頂戴。私達はあの世からお前をいつも見守つているからね。いいわね？」

なかなか首を縦に振らない絹代に正吉が言った。

「絹代。お前も巫女ならわかるだろ？私はこの神社を守らなければ

ばならない。神社を守るということは、島そのものを守らねばならぬ、ということだ。その私が島が無くなるからと真っ先に逃げ出して良いものかどうか。本音を言つと私もお前や母さんと一緒に新天地へ行つて将来の日本がどうなるか見てみたいのだよ。だからその夢をお前に託すのだ。いずれあの世で逢つた時、お前が見た日本の将来を私達に教えてくれ。いいね？わかってくれるね？」

父正吉の言葉にしぶしぶ頷く絹代。

「そうと決まつたらすぐ支度をしなさい。私達は村の主だった人達に明日にでも相談してみる。しかし・・・村長と大島さんが・・・由々（ゆゆ）しき」とだ。「

良が絹代達と別れ、離れに戻つた時、すでに外は白々と空け始めていた。

村長と駐在の大島が当てにならないと知った正吉は、自分の恩師であり元小学校校長宅を朝一番に訪れた。実験云々の話はあまりにも重大な事柄なので一旦後回しにし、まず一子と勝一の件に重点を置いて村長達の悪行を語った。もちろんそれには米兵の件も話さねばならなかつたが。

元校長の白山は、一通り話を聞くと彼等の所業については思い当たる節があると言つた。

白山はこの時代の教育者としては変わり者として知られていた。天皇絶対主義者はないのである。尊敬する人は福沢諭吉とリンカーンであり、愛読書は学問のススメ。よつて現存長やその他の皇国主義者達からは疎まれつまはじき的存在だった。しかもそれをあまり気にしないところも彼等からすれば面白くないようで、ことある毎に白山の教育方針に問題があると難癖をつけていた。

「あまり他人の悪口を言つるのは本意ではないのだが。」

そう前置きしてから、

「村長は20歳の頃、旅順の戦に加わった事があると言つておつた。人が人を殺したり傷つけたりするのをイヤといふほど見てきたから、もう一度とそういうものは見たくない。と私に言つたことがある。しかしね、そう言つた彼の目つきはその行為そのものを楽しみ、悦に入つっていたように見えたのだよ。旅順で何十人。203高地で何十人の露西亜人（ロシア人）を殺したと自慢げに話していたからね。だから君の言つ事もあながち嘘とは思えんね。しかし証拠がない。仮にあつたとしても、村長と駐在の悪事を暴ぐなど今のご時世じゃムリだろう。私の話をまともに聞いてくれる者などこの島にはおらんし……じゃが、一子と勝一にしてみれば無念だつただろうな。その時のこととを想つと儂は……。」

自ら語つたように今の情勢ではどうにも出来ないことへの悔しさと、

2人の姉弟の不憫さを思い涙する白山。村長達との確執を知つて、るだけに正吉もそれ以上のことは言えなくなつてしまつた。

「先生。・・・・もう一つ・・・重大な話があります。」

「・・・・重大？・・・何かね？一子と勝一の話よりも重大な話などあるものかね。」

「実は・・・島が・・・この鼓島が無くなるのです。あ、いやその可能性があると申し上げたほうがいいでしょ？」

さすがの正吉も言いよどんだ。

「島が・・無くなる？・・一体どうこうことだね？」

「先程申し上げました米兵からの情報なのですが、近々この島の海底において原子爆弾の実験が行なわれるそうです。その破壊力たるや、この島全体を吹き飛ばす位の威力があるとか。そこで被害をなるべく小さくしようとした彼、その米兵ですが、島民を1週間以内に脱出させるよう指示してきたのです。その話を聞いて私はすぐ先生のお顔を思い出しました。私1人の判断ではどうすることもできず、又、村長達の悪事を聞いてからは村長に相談することも叶わず、こうして先生のご意見を仰ぎに参じたのです。私はどうすれば良いのでしょうか？先生。」

この時正吉は白山に教えを請うていた頃の子供に戻っていた。

「正吉。今の話は真の話なのかね？」

白山も教壇に立っていた頃の教師に戻っている。

「はい…」

「つづむ…信じられん。…事が…事が大きすぎると。本当に事を言えば島が蜂の巣をつついたような大混乱になる。されど言わねば誰も助からない。…お前ならどうする？最初に聞いたお前はどうしようと考えておるのじゃ？」

「私は…島と運命を共にしようと…ご神体を守らねばならない立場にありますから。ですが娘だけは逃がしてやりたいと考えております。あの子は島の犠牲にさせたくありませんから。」

「そうか…お前は自決の道を選ぶのじゃな。…それなら私もそうしよう。生まれ育ったこの島と運命を共にできるのなら本望じゃ。…正吉。この話は島民に伏せておいたおいたおいたほうが良いと私は思つ。もし本当のことを言つたらお前だけではなく正枝や絹代、その良という青年も自決前に島の人達に殺されてしまうだろう。ここは静かに運命を受け入れる事じや。良いな？じゃが絹代とその青年は逃がしなさい。私はこの話を聞かなかつたものとして命を運

命に委ねる。お前も帰つていつもと変わりぬよつ過のしなさい。わ
かつたね。」

白山に諭されると正吉も改めて事の重大さに慄おののき、二三は黙つてい
た方が島民のため、とわが身を納得させ帰宅した。

正吉の口から白山との会話を聞いた良は、みすみす島の人達を見殺しにするのか！と正吉に食つて掛けた。しかしパニックになつた時、彼等に正吉達がなぶり殺しに遭うかもしないという白山の言葉を聞くに及ぶとその怒りも急速に薄らいだ。

「私は死ぬのは怖くない。怖いのはむしろその状態になつた時の島の人達だ。昨夜、ああは言ったものの、果たして何名の人が脱出せず運命を共にするだろうか。捕虜になるなら自決もするだろう。しかし島が無くなるなどという絵空事のような話を一体何人の人が信じるだろう。しかも島が無くなる程の爆破実験をされるとわかつたら・・・私はそれが恐ろしいのだよ。・・・眞実は闇に葬り、私達の記憶からも消し去つた方が良いのだ。とにかく縄代にはその眞實を告げず、君1人の胸に収めここから一緒に逃げて欲しい。頼む！」

頼むと言われ、良は即答することができなかつた。果たしてそれで良いのだろうか？・・・その迷いが顔に表れたのか、正吉が更に付け加えた。

「君が悩むことはない。これが今の世の中なのだ。敵国の情報を受けたと知れたら即、スパイの嫌疑がかけられる。そんな汚名を着てまで長生きはしたくない。むしろ潔く、木つ端微塵に吹き飛んだほうがマジだ。」

2人とも押し黙つたままそれぞれの思いを胸に数分間が過ぎた。

その時ガラス窓が微かに動き、一片の紙切れが差し込まれた。正吉がそれに気付き窓を開けると、1人の兵士らしき男が走り去つて行くのが見えた。その紙には短い英文がしたためられていた。それは良宛のビルからのメッセージだった。

『計画が変更になった。結構は明日。』

それだけで充分だった。実験が早まつたので、早急に脱出しそうい

う意味である。

「おじさん！」

「頼む！ 縄代を！」

2人の会話もそれで充分だつた。即刻正吉は作業所へ縄代を呼びに行き、良は身の回りの品物を取りに離れに戻つた。

改めて部屋を見ると、感慨深いものがあつた。ここに来てから2ヶ月余り。いくら物のない時代でも住めば何かしらモノは増える。その中で一番大切にしたいもの。正枝が良のためにと縫つてくれた上着とズボン。それを真っ先に雑叢に入れた。当初着ていた洋服は擦り切れてしまつたし、携帯は電池がなくなつた上にどこで落としたのか全く覚えていなかつたが紛失してしまつたのでそのままにした。誰かが見つけてもこの時代では使い物にならないからだ。とにかく準備万端整つた。あとは縄代の帰りを待つばかりだ。

1時間後。理由も聞かされず連れ戻された絹代がブツブツ言いながら家の中に入ると、今度は良に急かされ着の身着のまま再び外へ連れ出された。これが両親との今生の別れとは知らず、絹代の口からは正吉に対する不満が爆発していた。

海岸に着くとおもむろに良は猫の鳴きまねをした。するとどうからともなく一艘の小船が現れた。

「さー早く乗るんだ！」

そこで初めて事の次第に気付いた絹代。絶対イヤだ！と砂浜に座り込んだ。自分ひとりが助かるのはイヤだ、助かるのならみんな一緒に！というのである。しかし事は急を要するのだ。船を漕いで来たアレックスが“どうしたのか？”と不思議そうな目つきで良を見た。「絹代ちゃん。予定が変わったんだ。本当はオレだってみんなを助けたいよ。でも全てが変わったんだ。さあ！早く乗つて！」

そう言つて良は嫌がる絹代を強引に船に乗せ、アレックスに船を出すよう指示した。

「良さん？ 良さんは乗らないの？一緒じゃないの？」

アレックスに手助けされ船に乗つた絹代だったが、良が乗ろうとしないことに不安な声を上げた。

「オレは後の便で行くよ。だから心配しないで。安心して君は行くんだ。一子ちゃんに君の元気な顔を見せてやるんだ。いいね！オレが行く時までになるべく多くの人達を連れて来るよう努力してみるから！ さあ！アレックス行つてくれ！」

その声と同時に絹代を乗せた船は沖へ向かつて進み始めた。その姿が小さくなるまで良は手を振り続けた。これが絹代との本当の別れになるだろうと思うと、グッと腹の底からこみ上げるものがあった。

雑叢の中には大切なシャツとズボンが入っている事を確認し、時計を見ると既に午後3時を回っていた。あまり時間はない。さて、誰に声を掛けようか・・・考えあぐねた末、やはり一度神社に戻ろうという結論に達した。

再び神社に現れた良を見た正枝の驚き方があまりにも異常だったので、その理由を問いただすと、正吉が白山に呼ばれて出て行ったのだという。それだけなら何故正枝はこんなにうろたえるのだろう。そう思い更に問い合わせると、正吉は出て行く際隠し戸棚に厳重に保管されていた短銃を、自分に気付かれないように持ち出したらしいのだ。白山の呼び出し情を見てからの行動だから、きっとその手紙には何か良からぬ事が記載されていたに違いない、と正枝は泣き泣き付け加えた。白山宅までの道順を聞くと、良はわき田もふらず飛び出した。

白山邸で案内を請うと、出てきた年配の婦人が自分は白山の妻だが、先ほど正吉さんが尋ねて来て2人揃つて出かけた、と答えた。その時の様子に何か変わったことはなかつたか、と聞くと、特に変わつた様子はなかつたが、言われてみれば出て行く際に正吉さんが“すみません。奥様。先生をこんなことに巻き込んで”といつにく神妙な面持ちで言つていた。今思い返すと変なことを言つ正吉さんだな。と感じたとも言つた。2人とも特にどこへ行くとは言わずに出かけたらしく、夫人も左程気に留めなかつたとのことだった。矢継ぎ早にたたみかけた良の質問に段々と不安になってきたのか、夫人のミキ子は、

「何かあつたのでしょうか？」

と聞き返してきた。

「いや、何でもないんです。それより奥さん。白山さんからの伝言

です。なるべく早く北の海岸へ行くように。所持品は風呂敷に着替えを2～3枚。なるべく急いで！それじゃ！」

良は正吉の言った“事の真相は闇に葬り、絶対島民に知らせてはならない”という意味がよつやく飲み込めた気がした。ミキ子と話してみてそう感じたのである。だから理由も告げず、ただ白山からの伝言だと称して夫人を逃がすことにした。

良は白山邸を出るとまず、駐在所へ向かった。大島に聞けば何かわかるかもしないと考へたからだ。

ところが・・・あろうことか、既に大島は後方から袈裟懸けに切れ、口から血を泡のように吹き出し白目を剥いて事切っていた。正吉はピストルを持っていたが、刀は持つていなかつたので直接手を下したのは白山だろうと判断した。なんてことだ・・・サイアクな事になってしまった・・・その無残な死体を見ているうちに良は腹の底からぐつと突き上げてくるものを押さえきれずその場で吐いてしまつた。昨日から何も口にしていなかつたせいで、出るものといつても黄色い水だけだつたが、それでも何度も吐いた。

フラフラになりながら今度は村長宅に向かつた。独身の大島とは異なり、村長宅で事を起こすのは大変だろうと想像したが、行ってみると何事もないようすんなり中へ通された。書生の話では、校長と神主さんは40分ほど前に来て、今も村長と土蔵の中で話しているとのことだつた。2人に用事があるからどうしても会わせてくれとしつこく頼むと、その書生はブツブツ文句を言いながらも良を土蔵に通した。非常用の鈴を鳴らすと中に聞こえる仕組みになつてゐるらしかつたが、何度鳴らしても応答がない。なにかあつたのかと書生は取つて返し、しばらくして合鍵を持ってきた。イライラしながら鍵を開け重い扉を押し開いて中を見た途端、彼はギャッと一声上げるとそのまま腰を抜かした。

続いて良も中を見た。その途端また吐いた。つられるように書生も吐いた。中は凄惨極まりない状態になっていた。

まず目に飛び込んだのが、上村の生首と、首から下の部分。それも半裸の状態で、刀で滅多切りにされ、更にピストルを数発打ち込まれた物体となつたものだつた。その傍にこめかみを撃つて倒れている正吉と、割腹して果てた白山の遺体があつた。良のひと声で正気に戻つた書生が慌てて家人を呼びに行つた後、良は白山の手にしつかりと握られている紙を見つけた。それを自分のポケットにねじ込むと、誰かが戻つて来る前に上村邸を逃げ出した。捕まつてはあとあと困るからである。

途中白山邸に寄つた。中はもぬけの殻で、ミキ子が良の言ったウソを信じ、待ち合わせの場所の海岸へ行つた事が想像できた。こうなつたら一刻も早く正枝を連れて海岸へ向かわねばならない。良は再び全速力で走つた。

「おばさん！ オレと一緒に行きましょう！」

靴を脱ぐのも面倒で、そのまま玄関から駆け上がり居間の障子を勢い良く開けた。そこには正枝が横たわつていた。あの赤い包みを手に握り締め、既に事切れた状態だつた。ちゃぶ台の上には良宛の遺書が残されていた。

『正吉の後を追います。絹代を頼みます。』

たつたそれだけだつたが、正枝には夫が生きて帰らぬことがわかつていていたようだつた。

「ああ……」

もう少し正枝のことを考えて行動していたら、それが悔やまれた。まさかこんな事態に陥るとは……だが悔やんでばかりはいられない。上村の家から追つ手が来る前にここを去らなければ！

今度は慎重に守野家の勝手口から外へ出た。既に外は暗くなつ

ていたが良もここ的生活に慣れてきたのか、多少暗闇でも灯り無しで歩けるようになっていた。向かうは北の海岸である。

あたりの様子を窺いながら目的地に着くと、指示したとおり、白山ミキ子が良を待っていた。

「良かつた！ 来て下さったのですね！」

小声で話しかけるとミキ子は不安そうにあたりをキヨロキヨロ見回した。

「主人が参りませんが、どうかしたのでしょうか？」

「ご主人はあとから来られるそうです。先に奥様を逃がしてくれと頼まれました。」

「逃がす？ 一体どういう事ですか？」

「詳しい説明は後でします。・・・まずは。 あれに乗つて下さい。」

良が指し示す方向を見ると、小船が一艘いつの間にか現れていた。もちろん漕いでいるのはアレックスであつたが、上手く変装していので近くから見ても日本人にしか見えない。

「え？ これに乗るのですか？ 乗つてどこへ行くのです？ わたくしが女だからと甘く見ないでください！」

さすが教育者の妻だけにミキ子は理にかなわないことはどんなに些細なことでも首を縦に振らない主義らしい。しかし今はそんな悠長なことを言つていられる状況ではない。その雰囲気を察し、アレックスがミキ子の鳩尾に軽い一撃を当てる。ミキ子の身体は音もなく崩れ、アレックスの腕の中に納まつた。彼は良に目配せをすると素早くミキ子を船に乗せ、引き続き良も乗るよう手招きした。

「ダメだ。オレは残る。ここにいなければオレは自分の場所に戻れない。アレックス、計画は何時に決行されるんだ？」

「夜明け前。」

「ならオレは最初にこの地を踏んだ地点に戻らなくてはならない。さあ行つてくれ！ 行つてその人を助けてやつてくれ！」

その切なる想いが通じたのか、アレックスは無言のまま船を漕ぎ出

した。このまま誰にも見咎められずに行つてくれ！空を見上げた良
は、今宵が新月であったことに深く感謝した。

その場所にはあれから何度も行っていたので、暗闇の中であえ楽に行く事ができた。唯一の気がかりは、上村家で夜を徹しての山狩りをするのではないか、という事だった。たとえ上村家の人々に見つからなかつたとしても21世紀に戻れるかどうかわからないのだ。しかし良はその瞬間に全てを賭けようと思つた。草むらに身を潜め、じつと時が来るのを待つ。耳を澄ますと遠くで何やら騒いでいる声がした。おそらくは上村家の人達だろうが、幸いにもこちらに近づいてくる気配はなさそうだ。周囲には誰もいない。たつた1人である。それを肌で感じた途端、どつと疲れが押し寄せ良はそのままの姿勢でウトウトし始めた。

「ゴーバ、ゴーバ！」地鳴りのような震動が直接良の身体を刺激し、彼はハツとして目が覚めた。いつの間にかぐっすり寝込んでいたらしい。時計を見ると午前五時を少し回っていた。

（あの音は何だろ？　B29の音にしてはちょっと違う感じがする。
・・・もしかしたら・・あれが？）

不幸にも彼の予感は的中した。次ははっきり身体で感じる音がして、南の海上が一気に盛り上がつた。

次の瞬間！真っ白な閃光と共にドーンという大音響が島全体を襲い、たちまち噴煙が巻き上がつた。間もなくあたり一面何も見えなくなつた。のちに放射能を大量に含んだ雨が降ってきた。その雨は5日間続き、その後止んだ。ようやく太陽が顔を出し、あたりに春の日差しと元の静寂が戻り、全ては元通りになつたはず・・・だった。しかし何かが違つた。
・・・その何かとは、鼓島が島¹こと跡形もなく消滅していたことだつた。

「イテテテテ！何だよいつたい！誰だ！こんな所にテーブルなんか置いた奴は！ アレッ？ここは・・・えつ。もしかしたらオレの・・部屋？え？え？ 戻つて来たのか？」

良はあの閃光を見た瞬間、身体がフワッと宙に浮いたような感触を覚えた。それは初めて鼓島へ行つたときと同じ感じだった。だがその後のことは全く記憶になかった。気が付いたら自分の部屋のテーブルに頭をガツンとぶつけて転んでいたのだ。

「や・やつた！やつたぞ！ああ！なんて嬉しいんだ！こんなに嬉しいのは生まれて初めてだ！うおおおおお！」

ピヨンピヨン飛び跳ね、やつた！を連発する。誰かに見られて変人扱いされても構わない。とにかく現代に戻つて来れたんだ！

玄関のドアが開き、誰かが顔を覗かせた。

「だれ？だれかいるの？」

聞きなれた懐かしい声がした。

「綾子か！」

「えつ。誰？」

「オレだ！」

「え？良・・ちゃん？ まさか・・本当に良ちゃんなの？」

勢い良くドアが開き、すでに泣き顔の綾子が良の身体に飛び込んだ。良は感激に震えながらも抱き締めた綾子の身体がこんなに小さかつたのかと初めて認識した。絶対離すまい。良は心に誓つた。

「心配・・したのよ。」

「ああ。」

「本当なんだから・・・」

「ああ。」

「冗談じやないのよ。」

「ああ。わかつてゐよ。」

再会の喜びをじっくり味わつた後、良は久方ぶりに風呂に入り、さっぱりした身体で綾子の手料理を食べた。それまでも好き嫌いのかつた良だが、あの時代を経験してからは何でもありがたく思え、出されたものは全部綺麗に平らげた。驚く綾子に食べたくても食べられない時代があつたんだよ。と答えた。

「良ちゃん。なんか・・変わつた。」

「何が？」

「だつて前は私にこんなに優しくなかつたもの。」

「え？ そうか？ 同じだけどな。」

綾子に指摘されそう答えたものの、なるほどそうかもしけない、と思つた。確かに以前は綾子と会話する際、“ああ”“うん”“違う”“その程度の単語しか使っていなかつたことを思い出した。（なるほどな。オレは変わつた。）そう思つた。

「ねえ。これどうするの？」

見ると綾子が手にしていたのは、良が帰つてくる際着ていた服と所持品の雑嚢である。服といつてもぼろ雑巾となんら変わらない状態の布と化していたのだが、ついさきほどまでは立派な衣服だつたのだ。

「あ、何か入つてる。・・・キヤ！ な・なにこれ？ え？ もしかして・・・血？」

そのポケットから出したのは白山が握つっていたあの紙切れだつた。あの時は無我夢中で白山の手からもぎ取り、自分のポケットにねじ込んだのだが、一体何が書いてあつたのだろうか。綾子の手からその紙を受け取ると、血に染まつた部分を破らないよう注意して開いた。

それは想像通り、白山の遺書だつた。内容は、これから決行することが己れの数十年に渡つて積もりに積もつた上村への怨念と、巡査大島を含めた一子と勝一の復讐であることが記されていた。最後に大罪を犯すからには生きて帰る意思のないことが付け加えられてお

り、白山、正吉それぞれの名前が血文字で書かれていた。

「あああ。」

良はその血判状ともいえる遺書を握り締め、綾子の目の前で泣いた。なすすべもなく、ただそつと良の肩に手を添える綾子。彼女は傷ついた良の心を慰める術を模索し、良の身体を抱き締めた。

翌日は日曜日だったので朝から部屋の掃除をしていると、例の如く結城が訪ねてきた。昨夜は良のことが心配で帰れなかつたため、綾子はそのままアパートに泊まつたわけだが、（当然寝所は別である）まさか9時前に結城が来るとは予想もしなかつた2人だつた。最近の結城の気持ちの中では良が不在であることが当たり前のことで、綾子が制するのも聞かず強引に中へ入ろうとした彼の前に当の良が立ちはだかつた。良にしてみれば友人が自分を心配して訪ねて来てくれたのか！と感激の行動だつたのだが、結城にとつては下心があつての訪問である。突然の良の出現に驚き、綾子に向かつて“あとでまた来ます”とひと言だけ言つて帰つてしまつた。するとこれまた当然のように隣の住人が顔を出し、綾子に向かつて“大丈夫ですか？”と声を掛ける。綾子も“大丈夫です。いつもありがとうございます。”と答える。何が何だかわからない良は、綾子を問い合わせた。初め答えを渋つていた彼女は、良の執拗なまでの詰問に事実を述べ始めた。

良がいなくなつて少し経つと、結城は良の安否を気遣いつつ自分にしつこく付きまといだした。いわゆるストーカー行為に出た。あまりのしつこさに隣の杉村という学生が結城が來たら追い払つてやると申し出してくれたのだ。良にしてみればその内容は寝耳に水の話だつた。確かに綾子は美人で人一倍他人のことを思いやる優しい女だ。しかし自分の留守中に友人である男が綾子を狙つたとは到底信じがたかつた。だがもし事実なら、言語道断！断じて許せることではない。さつそく真相を確かめようと結城の携帯に電話をかけたが、相手が良と知つてか指だし音は鳴れど結城は出ようとしない。やはり綾子の話は本当なのか？更に確かめるべく隣の杉村を訪ねた。すると彼はあつさりとその事實を認め、逆に彼女をしつかり拘まえておかないと大変なことになりますよ。と注意された。

「何て奴だ！今度会つたらただじゃおかねえ！」

部屋に戻るなり良の怒りが一気に爆発した。あまりの剣幕に綾子の方が面食らってしまった。

「どうしたの？変よ。今まで私のことなんて氣にも留めなかつたのに。ねえ、良ちゃん、変よ。おかしいわ。」

「綾子。オレと一緒になつてくれ！」

突然の言葉に綾子は自分の耳を疑つた。

「え？ 今、何て言つたの？ 良く聞こえなかつたわ。」

「オレと一緒になつてくれって言つたんだ！ 2度も言わすな！」
「え？ ・・・そんな。そんなことつてあり？ ・・・だつて今までずっと私のことなんか眼中になかつたのに、急にどうしたつて言つた！ 結城さんが私に付きまつたから惜しくなつたのね？ ・・・ひどいわ！ 私は良ちゃんの所有物じやないのよつ！」

「違う！ オレは一子達に約束したんだ。元の世界に戻れたらお前と一緒になるつて。だから奴の件が無くてもオレはお前に申し込むつもりだつた。あの時代に行つたからこそお前の大きさが身にしみた。オレはずつとお前を見ていたようで見ていなかつた。あの時代に行って初めて気づいたんだ。オレは小さい頃からお前だけを求めていたんだと。」

じつと綾子の目を見つめる良の瞳は真剣そのものだ。

「じゃ、今まで付き合つてきた女人の人達は何だつて言つの？ 私は都合のいい女じやないのよ！」

綾子もくじけそうになりながら涙声で精一杯の抗議をする。

「・・・あれは間違いだつた。・・・今なら言える。オレはお前だけを愛しているんだと。お願ひだ。結婚してくれ。そして子供をたくさん生んで欲しい。頼む！」

必死に懇願する姿に綾子の頑なな心が揺れた。彼女の20年近くの想いがやつと通じたのだ。思い返せば彼女は良一筋に幼稚園から現在まで生きてきた。いわば良以外の男は彼女にとつて異性としての対象ではなかつた、ということだ。その想いがようやく届いたのだ。

少しくらいこ焦らしても罪にはなるまい。しかし・・・・心と口とは全く別ものらしい。

「・・・・うん・・・・」

涙でくしゃくしゃになつた顔を両手で覆い何度も頷く綾子。

「綾子！」

しつかり抱き合ひ入。良の眼前に一子と繩代の笑顔が見えたような気がした。

その後、話はトントン拍子に進み・・・に見えたが、実際そう上手くはいかなかつた。早速田舎の両親に連絡し2人が結婚する旨を報告すると、父母はもう手を挙げて喜んだ。京子に至つては『あたしは絶対そうなると思つていたのよオ』

などと説う始末。いつぞや上京した際に言つたことなどすっかり忘れている様子だつた。式はいつにする?とか、披露宴はこっちとそつちの両方でやらなくちゃね!とか、果ては式の日取りはこっちで決めるわね。と勝手にまくし立て一方的に電話を切つてしまつた。

問題は良自身にあつた。帰つてきてから2~3日は平穏無事だつたのだが、アパートの近くで道路工事が始まつた途端、その音に極度に怯え、パートカーのサイレンが鳴つたとき等は、空襲警報だ!と座布団を頭から被り、押入れに隠れる始末。ついには夜中に突然飛び起きてところ構わず吐くよになつた。一緒に住むのは時期尚早と、一旦綾子は荷物を全部自分のアパートに引き払おうとしたのだが、朝、良を訪ねる度に吐き物が散乱しているのを見て彼の身体が心配になり、アパートを全部引き払つて良の部屋に引っ越した。

その夜から綾子は、良が布団に入り寝入つたかと思つた頃、突然うなされながら飛び起き、その場で吐くのを何度も見るようになつた。体中びっしょり汗をかき、何かを追い払つように両手で宙を搔き、ぶるぶる震えながら怯えるのだ。そうかと思えば、突然嬌声を上げる。こんなことが何日も続いて隣近所から苦情が来ないのが不思議なくらいだ。これではどんな強靭な肉体の持ち主でも参つてしまつに違ひない。引っ越ししてから1週間目。堪りかねた綾子は夜が明けるのを待つて、朝一番に良を病院に連れて行つた。

1日がかりで検査をしてもらつたがどこにも異常は見られなかつた。

「でも変なんです！」

真剣に訴えると医師はそこまで言つならと心療内科を紹介してくれた。2人はその足で田指す病院へ向かつた。

診療時間は既に終了していたが、受付で必死に頼み込むと、当直の医師佐伯が出て来て快く診てくれた。

診察後、綾子は別室に呼ばれ良の症状について説明を受けた。
「・・・端的に言いますと、笹崎さんは戦争の疑似体験をしたようです。その体験が心に深く刻み込まれ、工事の音やサイレンの音に敏感に反応して、爆撃されるとか人が目の前で無残な殺され方をしたとかいう悪夢に苛まれてているのです。しかもその体験がとてもリアルなので始末が悪い。奥さん、何か思い当たることはありますか？」

突然奥さんと呼ばれ、思わずあたりを見回す綾子だったが、自分のことだと分かると他人の前であることも忘れ、人知れず赤面してしまつた。だが相手が真剣な表情をしているので、緋んだ顔に無理に力を入れ引き締めてから答えた。

「はあ。あると言えはあるのですが。たぶん申し上げても信じていただけるかどうか・・・恐らく信じていただけないと思います。何しろ私でさえ未だに信じられないですから。」

握っていたハンカチをもみくちゃにしながら綾子は言つた。すると佐伯はハハハと軽快な笑い声を上げ、

「大丈夫ですよ。少々のことなら驚きませんから。それに笹崎さんの場合、通常では想像できないような体験をしたようですからね。」
「はあ・・・じゃ・・・先生は時間を遡ることは可能だと思われま

すか？」

「時間？・・・といふと、つまり。アレですか？タイムマシンの存在ですか？」

「はあ。つまり・・・ええ、そういうことです。」

「ハア・・・私は100%現実主義ではありませんが、今の科学でそれは不可能でしょうね。・・・では、あなたは笹崎さんが実際タイムマシンに乗って過去に行つてきたとおっしゃるんですか？」

人を馬鹿にしたような表情が佐伯の顔に浮かんだ。

「でも！でも先生は通常の体験じゃないとおっしゃったじゃないですか！あの人は実際時間を遡り、終戦間際の鼓島といづ島に行つて来たんです！」

やはり信じてもらえないもどかしさに、綾子の目に大粒の涙が溢れ出した。

「確かに。普通ではないと言いました。でもそれは現在の話であつて、そういうた非現実的なレベルの話じゃありませんよ。そうですね、例えば。少し前までイラクにいたとか、アフガニスタンに行つて来たとか、そういうことです。決してタイムマシン云々のことではなかつたのですが・・・とにかく今の生活環境を変えた方が良いのは確かです。ご主人はいわゆる、外傷性ストレス症候群に陥つておられるので、現在お住まいのところからもつと別な場所へ引っ越されるのも一つの方法だと考えられます。このまま放つて置かれると心だけでなく身体まで蝕まれてしまいますよ。もし心当たりがあるのなら一度そちらへ転居されてみてはいかがですか？」

「転居。ですか？実家が東北なので心当たりはありますか・・・」

「それならなるべく早い方が良いですよ。紹介状を書きますから、近くの病院に持つて行つて継続的に治療を受けて下さい。・・・では待合室で少々お待ちください。ご主人も間もなく薬が切れ気付かれると思いますから、一緒に帰つていただいて結構ですよ。」

看護師に付き添われ別室を出ると、良も同じように支えられて検査室を出てきた。

紹介状を受け取るまでの間、綾子はいろいろな事を考えた。転居しようとひと言で言わってもそう簡単にできるものではない。どうしたら良いものか・・・しかしながら今夜あの発作が起きるのではないか、と想像しただけで綾子の神経はピリピリと音を立てて緊張してきた。どうすれば平穏な朝を迎えることができるのだろうか。

「笹崎さん。」

会計の人に呼ばれお金を支払おうとする、佐伯医師が脇の診察室から顔を出し、綾子を手招きした。

「毎日あの状態では本人も大変でしょうが、あなたも相当疲れているように見えますね。民剤を処方しますから、寝る前に2錠、ご主人に服用させてあげて下さい。そしてなるべく早く環境を変えてください。良いですね。」

綾子の気持ちを察したのか、機転を利かせた佐伯が良のために睡眠薬を出してくれた。これがあれば久しぶりに良も綾子も安心して眠れるというものだ。ホツとして佐伯に礼を述べ会計を済ませると、玄関前で待機していたタクシーに乗り、2人はアパートに直行した。

薬が効いたのかその夜は悪夢に苛まれることなく、無事朝を迎えることが出来た。綾子は学校があつたため、良のことが気がかりではあつたが時間通り登校した。その後、1人になった良を結城が訪ねてきた。

良は結城の顔を見た途端、ぐっと両手に力を込めた。ひと言でも発したら殴つてやろうと思ったからだ。しかしあまりにも結城が落胆している。そう見えてその手を緩めた。

「どうしたんだ、一体。まあ入れよ。」

田中は体調も良かつたのでいつもと変わらぬ対応が出来た。

「何かあつたのか。おまえらしくないな。」

慣れぬ手つきでお茶を出し、話を切り出した。

「……笛崎。……オレ……お前に誤らなければならぬことがあるんだ。」

結城の声は今にも消え入りそうなくらい小さかつた。しかも異常なほど震えている。

「何だ。……綾子の事か？……まあ待て。……やつぱりそつか。オレも今度お前の顔を見たら2~3発ぶん殴つてやろうかと思つてたんだ。けど・・やめた。お前のそんなショボくれた姿を見たらそんな気無くなつた。……でもお前、いつから綾子のことを？」

「……お前がいなくなつた後、いろいろ手を尽くして搜すうち彼女と接する機会が増えたろ？それでいつの間にかそうなつてたんだ。」

「せう・・か。それを聞いたら尚更殴れないな。全部オレのせいだもんな。悪かつたな。心配かけて。それから…………ありがとう。会社を辞めた後までオレのことを気にかけてくれて。そんなことしてくれるのはお前だけだもんな。本当に嬉しいよ。」

感謝の言葉と共に肩に手を掛けると、結城の身体は小刻みに震えて

いた。膝に置いた両手にポタポタと涙が落ちた。

「いいや。おまえに・・そんなこと言つてもらえる資格なんか・・・俺にはない。だつて・・お前のいないのをいいことに泥棒猫のようなマネをして・・・俺つて男は・・友達の資格なんて・・・「そんなことない。それを言うならオレなんて人間として失格だ。助けられたはずの人間を助けられず、一人こんな所に逃げてしまつたんだから。」

「笛崎？・・・お前、何かあつたのか？」

「・・・え？ああ。いや、何でもないよ。オレ自身の問題だ。・・・で？会社のほうはどうなんだ？上手くいつてるのか？」

「ああ。可もなく不可も無くつてとこさ。相変わらず課長は毎日小言の材料を見つけるのに奔走してゐるよ。」

「そうか。・・・お前も大変だな。まあ頑張れよ。オレも新しい仕事を探すから。」

「ああ。何かあつたら連絡してくれよ。俺、すつ飛んでくるから。」

「ありがとう。期待して待つてるよ。お前がすつ飛んでくる姿をね。」

その後しばらくの間2人はいろいろ語り合つた。殆どが会社にいたころの思い出話だったが。そして結城は帰つて行つた。直後、それが合図だつたかのように突然道路工事の音が聞こえてきた。と同時に落ち着いていたはずの発作が起きた。

夕飯の買い物をして綾子が帰宅すると、部屋の隅でガタガタ震えながらしゃがみこんでいる良の姿があった。

「良ちゃん！」

買つて来たものが床に散乱したが、そんなことはお構いなしで必死に良の身体を気遣う綾子。

「綾子！」

良も綾子の姿を見て安心したのかその細い体にしがみついた。

「もう大丈夫よ。大丈夫だから・・・」

しばらくの間、子供をあやすように良の背中を撫でていると、ようやく落ち着いたのか良の呼吸が平常に戻った。それを確認し、綾子は良の身体をゆっくりと横たえた。そして静かに立ち上がり、ことさら元気な声で言つた。

「さてと。私は夕飯の支度をするからね！良ちゃんはテレビでも見てて。すぐ食べられるようにするからねっ！」

床に散らかった品物を片付け、流し台の前に立つた綾子はもうダメだと思った。これ以上ここにいたら良の身体は本当にダメになる。そう思った。田舎に帰ろう！ついに綾子は決心した。

夕飯を食べながら綾子は何気なくその話を切り出した。

「ねえ良ちゃん。一度、田舎に帰らない？おじさんやおばさん、おじいちゃんにも私達の事を報告したいし。ね？そうしましょ？」「

発作で体力を使い、思考能力が低下していた良には綾子の言葉に異論を唱える気力さえないようだった。静かに首を縦に振ると、機械的に食べ物を口に運んだ。その姿に綾子は小さくため息をついた後、改めて気を取り直し、その日学校であったこと等を楽しそうに話して聞かせた。

明後日から『ホールデンワーキーク』が始まった。それを利用し、良と綾子は実家のあるG県へ出かけた。新幹線でG駅まで行き、バスで約2時間。山間の小さな村が2人の故郷だ。すでに連絡しておいたので、良の父、新一がバス停まで迎えに来ていた。

「ただいま。」

「おかえり。疲れただろう。お前達が帰つてくるつていうんで叔父さんや叔母さんたちが朝早くから集まつてきてるんだ。もう半分宴会状態だよ。」

新一はうなずきしたようにため息をついた。

「ホントですか？ わあ、懐かしいわあ。ねえ？ 良ちゃん。小さい頃何かある度、親戚中集まつて宴会みたいなことやってたわよね。・・・ね？」

両親を早く亡くしている綾子にとって親戚といえるのは即ち、良の伯父、伯母であり、彼等の子ども達が従兄妹達だった。

口数の少ない良を気遣い綾子はことさら元気に振舞った。しかし両親にはまだ良が会社を辞めたことと、一種の心の病に冒されている事は知られていなかった。

バス停から車で約6分。その間車窓から見える景色は2人が上京したときと全く変わつていなかつた。田畠ばかりの風景だが、良の目には何故か真新しいものに映つたようだ。ふと小さく、『鼓島だ』と呟いた。もちろん新一も綾子も良の声は聞こえなかつた。

家に着くと、何かあったのか異様に慌しい。どうしたのかと聞くと、おじいちゃんが急に倒れ、救急車で隣町の病院に運ばれたのだという。すぐ3人は追いかけるように再び車に乗り込み指定された病院へ向かつた。

病院に着き受け付けで病室案内を請い、部屋に行つた3人はそのまま棒立ちになつた。救急車で運ばれたといふので生死の境を彷徨つている状態を想像していた彼等だったのだが、当の本人はケロリとしたもので、ベッドに起き上がりアイスクリームを頬張つていた。看護師に

『お孫さん夫婦が帰つて来られるので庭の草刈をしていたところ、脱水症状を起こして倒れたんですよ。何も心配いりません。2・3日もすれば元通りになります。担当の先生があとで詳しい説明をしますからそれまでお待ちください。』とにっこり笑つて事も無げに言われ、啞然とする3人。

「お義父さん！」

「じいちゃん！人騒がせなことしないでくれよ！」

新一と良が同時に叫ぶ。

「いやあ悪い悪い。わしもな、まさか草刈をしていてこんな大事になるとは思つてもいねえがつただよ。ワシが一番びっくりしただよ。すまん、すまん。」

「まつたく！人を何だと思つてるんだ！」

良の怒りはなかなか収まらない。

「良ちゃん。おじいちゃんもなりたくてなつたわけじゃないんだから、そのへんで許してあげて。」

たまりかねて仲裁に入つた綾子の取り成しで良は不承不承黙つた。

「おお！さすが綾ちゃんだ！今がら良を尻に敷いでいんのがい？いやあ、良い事つだ！ふおつふおつふおつ。」

百万の味方を得、調子に乗る年寄りに4人部屋ということも忘れ、再び新一と良の怒りが爆発した。

「お義父さん！」「じいちゃん！」

「うつせえなあ！こつちは今朝から何も食えないでイライラし

てるんだ！静かにしろよ！」

斜め向かいに寝ていた若者が2人を見て怒鳴った。

「すみません。ほらおじさんも良ちゃんも謝つて。」

強引に頭を下げるすると、キラッと良の目の片隅に光が入った。その若者が手にしていたコンパクトミラーに太陽光線が反射して光つたのだ。次の瞬間、なりを潜めていた良の発作が起きた。今度の発作は今までのものとは比べ物にならない程すさまじいものだつた。額や腕から一拳に脂汗が吹き出し、動物の咆哮のような叫び声を上げ、のた打ち回りながらあらゆるところに身体をぶつけた。その声を聞きつけた看護師が駆けつけ、良の身体を押さえつけようとしたがその暴れ方が激しく、連絡を受けた医師が3人がかりで鎮静剤を打ち、ようやく落ち着いた。しかし気がついてまた暴れ出さないとも限らないので、一旦身体をベッドに拘束した。その後、こうなつたいきさつを聞きたいと担当医の木村に新一と綾子はナースステーションに呼ばれた。ワシも行くと祖父の勝和も同行した。まさかず 勝和と新一にしてみればこんなことは前代未聞。何が何だかわからない、見当もつかないと声を揃えた。そして綾子の番になつた。彼女は言うべきかどうか迷つた挙句、隠し通せるものではないと、それまでの経緯を話し出した。それでも恐らく100%信じてもらえないだろうと前置きすることは忘れなかつた。

「私も全部把握しているわけじゃないんです。旅から帰つて来てからの良ちゃんは、その間の出来事を一度も口にしたことがないし、私もあえて聞こうとはしませんでした。話す時期が来たらこちから言わなくても自分から話してくれるだろ?」と思つてましたから。

そこで綾子は一呼吸おいた。

「・・・・あれは2月の終わりでした。用事があつて私、良ちゃんに連絡を取ろうとしたんです。でも全然携帯が繋がらなくてイライラしていました。すると2日くらいしてから突然良ちゃんから電話があつたんです。今、鼓島という島にいる。その島についてどんな些細なことでもいいから調べてくれ。という内容でした。一体何なの?と理由を聞こうとしました。けれど一方的に切られてしまつて聞けなかつたんです。それから私はその意味も解らず鼓島という馴染みのない名前の島について調べ始めました。手つ取り早いのはホームページで調べることだと思い、パソコンを開いて検索してみると、その島は終戦直前、海底火山の爆発で消滅したことがわかりました。ところがそこで情報が途切れてしまつたのです。困つた私は校長に相談しました。あ、予め言うのを忘れてましたけれど、私小学校の教師をしているんです。校長のご友人が地質学を専攻している、とのことでその先生を紹介していただき、その方から1冊の本を戴きました。著者はウイリアム・カーペンターという元・海軍兵士でした。日記と口述をもとに夫人が原稿を書き、書籍として出版したもので、その中に鼓島のことについての記述がありました。ところがその日記に『RYO』という名前の日本人が出てくるのです。彼についてはとても流暢な英語を話し、身長は自分より10CMは高い、すなわち178CMくらいだらうとのことでした。私はまさか、と自分の目を疑いました。それからまた数日後、良ちゃん

から連絡があつたからその事を話すと、それはオレのことで今オレはその鼓島にいる。そのウイリアムとは昨日会つて話したと言つたんです。私は信じられませんでした。だって今こうして話している相手が60年前に消滅してしまった島にいるなんてどうして信じられますか？最後に良ちゃんはいつ戻れるかわからないから、会社に退職届を出して欲しいと言いました。翌日私は良ちゃんの言う通り退職届を会社に出しに行きました。課長さんからこれ以上無断欠勤したら解雇扱いにするところだった。と厭味を言われましたが、何とか穩便に辞める事ができました。

それから2ヶ月後のある朝、私は良ちゃんの部屋を掃除しようと行つてみると、良ちゃんがまた何の前触れもなく戻っていました。私はもうただ驚いてしまつて・・・でも・・・2・3日してまたアパートに行つてみると、部屋中吐いたものが散乱していてもの凄い臭いがしていました。とりあえず掃除をしたのですが、また次の日も同じで・・・心配になつてその日からアパートに泊り込んでみると夜中にさつきのような発作が起きて、ものすごい声を上げたり暴れたり。決まって最後は吐くんです。でも吐けば気持ちが落ち着くのか、その後は何事もなかつたように眠るんです。うわ言でB29とか空襲だとか、オレが悪かったとか意味不明なことを言って。そのたび汗をかくから何度も着替えをさせないといけなくて・・・これじゃいけないとつって病院に連れて行つて検査をしてもらつたところ、外傷性ストレス症候群だから生活環境を変えた方がいい。つまり引っ越したほうが良いと言われました。それで連休を利用して一度田舎に帰つてみようと良ちゃんを誘つて連れて來たんです。

先生。良ちゃんは生の体験として戦火を潜り抜けて來たんです。今のままだと心身ともにおかしくなつてしまします。何とか助けてあげて下さい。お願いします。」

信じがたい話に3人はうまい言葉が見つからない。

「・・・儂は疲れたから部屋に戻るよ。」

そう言つた勝和の顔はなるほど青ざめている。すぐ看護師が傍に寄

り、身体を抱えるようにして病室に連れて行った。

腕を組んで話を聞いていた木村は、綾子の目を見ながら言った。

「・・・話としては面白いですが、到底信じられないことです。ですが、あの発作を目の当たりにしたら100%ウソとは言い切れませんね。それにあなたの目は作り話をしているように見えない。ウソをついた人は目を見ると何となくわかるものです。でもあなたは違う。まあタイムトラベル云々は別として、笹崎さんが実体験として戦場にいたことはほぼ間違いないでしょう。そのあたりから心のケアをしていかなくてはなりません。おじいさんの方はすぐ退院できると思いますが、お孫さんはしばらく入院してもらって様子を見るにします。それでよろしいですね？」

綾子と新一の2人に異存があるはずはなかつた。ナースステーションを出た2人は、良が寝ている病室に行き、拘束された姿を見て言葉を交わすことなくただ泣いた。

帰宅した新一と綾子から良の入院を聞かされた母京子は、あたかもそれが綾子に責任があるかのように責め立てた。新一が庇つたせいでの怒りに拍車がかかり、金輪際綾子に笹崎家の敷居をまたがせないという始末だ。仕方なく綾子はその夜一人淋しく病院近くのホテルに部屋を取つた。しかしその淋しさよりも良の身体のことが心配で眠れぬ夜を明かした。

翌朝。あまり食欲はなかつたが、食べなければ身体が持たないとホテル内のレストランでトーストと「コーヒー」を胃に流し込んでいふと、新一が慌しく駆け込んできた。昨日の京子が取つた非礼の侘びと、それを阻止できなかつた自分の不甲斐なさを訴えたかったようだ。

「おじさん。もういいんです。おばさんの言つ通り、私がもつとちゃんと良ちゃんの健康管理をしていればあんな風にならなかつたんじゃないかと思うから。私の方こそおじさんやおばさんに申し訳なくて。夕べあれから反省したんです。本当に『ごめんなさい』。

「何を言つんだね。悪いのは私だよ。みんな綾ちゃんに任せっきりにしてしまつて。おばさんもね、あの後、私の説明を聞いて早とちりして綾ちゃんにとんでもないことを言つてしまつたと反省してね。ホテルの玄関先まで一緒に来たんだけれど、どうしても綾ちゃんの顔を見ることが出来ないつて言つてね、外で綾ちゃんの許しが出るのを待つてゐるんだ。」

「えつ。おばさんが？！」

それを聞くと綾子は手に持つていたトーストの半切れを下に落とした。しかしそれを拾おうともせず慌てて外に出た。

車の前でしょんぼり立つてゐる京子の姿を見つけると、綾子は傍に駆け寄り「『ごめんなさい』おばさん！」

そうひと言言つたきり京子の胸にすがつて泣いた。

「私の方こそ悪かつたわ。ごめんね！何も知らずあんた1人を悪者にして。ごめんね！ごめんね！」

その光景を傍らで見ていた新一はホッと胸を撫で下ろしていた。

そのまま病院へ直行した3人は木村医師を訪ねた。幸い木村は当直だつたようで3人の訪問を快く受けた。木村の話では鎮静剤が効いたとみえて、昨晩の良は発作も起こらざぐつすりと眠つたようだつた。朝一番の巡視の際には拘束も解かれ、朝食も何事もなかつたように平らげていた。身体の調子も良好だということだった。部屋に行くとなるほど木村の言つたとおり、顔色も良く3人を見ると「やあ！」と笑顔で迎えた。

「やあ！つて良。あんた！」

「ど・どうしたんだ。母さん。そんなに怒つて。ハハア。父さんまた何かやらかしたる。オレやだよ。いつもそのとばっちり受けんのオレなんだからな。つてまたそのとばっちりを受けるのは綾子なんだけどさ。で、どうしたのさ。そんなに慌てて。」

良の声には屈託がない。

「どひしたつてみんなあんたのせいじゃないの！あんたが入院したなんて聞いたもんだから、母さん、綾ちゃんの監督不行き届きだつて言つちゃつたじやないのよ！ホントにどうしてくれんのよ！全くホントにこの子はもう…」

涙で顔をくしゃくしゃにしながら泣き叫ぶ京子を優しく労わる綾子。「綾子。お前あんまり母さんを甘やかすなよ。それなくとも父さんは尻に敷かれてるんだからな。」

「それを言わんでくれよ。ま、まあそれはホントのことなんだけどな。ははは。」

新一の乾いた笑いは座を白けさせるには充分だつた。

「それよりじいちゃんの具合はどうなんだ？オレ発作が起きてあの後のことば全くわからないんだ。」

「発作って。じゃああんたは自分がそうなることを知つてるの？」

「ああ。 知つてゐる。それも鼓島から帰つて来てからだ。・・・・・

あれは悲惨な体験だつた。」

思い起こすのが辛いのか良はポツリポツリ搾り出すように話しおじた。

去年の九月頃、初めてあの声が聞こえた。といふところから始まり、鼓島という名前からパソコンで検索しようとしたところディスプレイから突然光が出て自分を包み込み、気付いてみると60年前の鼓島にいた事。そこで知り合つた一子、勝一、絹代という3人の少年少女、ウイリアムとの出会いから村長、駐在所巡査の悪事。そして戦時下であるといふ緊迫感の中でも肌で感じたのどかな風景。人情感、優しさ。最後に白山と絹代の父、正吉の復讐劇。その悲惨極まりない場面の直面しどうすることもできず、ただ嘔吐し、何も考えられず、気づいたらその場から逃げ出してしまつっていた事。絹代の母正枝を救えなかつた自分に腹立たしい思いをしたこと。唯一の救いは白山の妻だけは助ける事が出来た事。そして・・・閃光と大地を揺るがすほどの地鳴りと共に再び氣づいたときは元の部屋に戻つていたことなどをなるべく詳しく語つた。しかし原爆の実験材料となつて鼓島が犠牲になつた事実は省いた。真実があまりにも恐ろしく、口にすることが出来なかつたからだ。加えて白山、正吉2人の復讐劇の段は自分で驚くほど興奮し、身体がブルブル震えてくるのがわかつた。あの光景を思い出すたび吐き気がする。上村の生首が胴体と切り離され、白目を剥いた目がこちらを向いて・・・オエ！！突然良の口から朝食べたものが吐き出された。ブザーを押すとすぐ看護師が駆けつけて来た。すぐに脈を取り血圧を測つた。家族の方は外に出ていてくださいと言われ、廊下に出る3人。そのあとすぐ木村医師が走つてきた。

待つこと40分。ようやく許可が下り、病室に入ると既にシーツや布団は新しいものと取り替えられ鎮静剤を打たれた良がスヤスヤ寝入っていた。その姿に3人はホッと一息ついた。すると木村医師がナースステーションに来て下さいと彼等を促し、先に立つて廊下に出た。

「さっきまでは何ともなかつたのに一体どうしたんですか？」

腰掛けのや否や、木村医師はイライラした様子で切り出した。突然起きた発作の原因を知りたいということだ。新一と京子はあまりのことに動転し、パニック状態になり説明ができそうもない代わって綾子が答えることになった。良が鼓島での体験を自ら話したのはこれが始めてのことだったので、彼女はひと言も聞き漏らすまいと必死で耳を傾けていたため、ほとんど忠実に良が言った事を木村に述べることができた。話が終わると木村は眉間にしわを寄せ、何かを考えあぐねている様子だった。やがて3人をぐるりと見渡すと、発作の起きる状態がどういう時なのかおおよそ見当がついた。その状況に少しづつ身体を慣れさせていく治療をしましよう。と言った。3人に異論があるはずもなくただ、宜しくお願ひします。というほかなかつた。

その足で勝和の部屋へ行くと、何やら様子がおかしい。具合が悪いのかと聞いてみてもなんでもない一点張り。布団を頭から被りガタガタ震えているのだから、何でもないはずはないのだが、医者を呼ばうとする不機嫌になる始末だ。年寄りのわがままには付き合つていられないわ！と実の娘である京子がまず匙を投げた。新一と綾子は義理の仲なのでそう無碍むげにもできず、ただオロオロするばかりだ。隣のベッドに寝ていた患者が言つには、昨夜からずっとその調子でせっかく出た朝食にも手を付けず、そのまま戻してしまつたそうだ。食後の検温に看護師が来た際には、何が何でも今日中に

退院するビダダをこね、看護師を困らせた挙句またこの格好になつたらしい。

その時、午前の回診時間がきて医師が病室に入ってきた。

「佐々木さん。今日退院したいそうですね。ではまず血圧を測らせてくれださい。 142の85。・・・良いですね。食事は？（看護師から説明を聞いた後）あ、そう。わかりました。そういうことなら退院しても大丈夫でしょう。でもいいですか。お宅に戻つたら今日一日は安静にしていて下さいね。・・・じゃ、のちほど会計の方から連絡がありますから、それまでここでお待ちクダサイ。では佐々木さん。お大事にして下さいね。」

3人の心配を他所にいとも簡単に退院許可が下りてしまった。慌ててお金の心配をする京子を尻目に当の勝和はバツと起き上がり、自らサッサと帰り支度を始めた。あまりの元気よさに呆気に取られる3人。

ともかく会計を済ませ4人は帰宅した。ところが安静にしないとダメよ、という京子の声にも耳を貸さず、勝和は自室に引き籠もり呼ぶまで絶対誰も部屋に近寄るなとピシャリと戸を閉め切つてしまつた。ホントに年寄りのわがままには付き合つていられないわ！と勝和の勝手にさせておいて京子は隣近所の手前、一応退院祝いをすることにした。しかし綾子は良の身体が心配でいても立つても居られず急いで病院に戻つた。

病室の目に立つた綾子は、握ったドアノブに力を込め気持ちを引き締めてノックした。

返答がない。恐る恐るドアを開けるとスヤスヤ寝入っている良の姿が目に入った。ホッと一息ついで中に入るとベッド脇の椅子に腰掛けた。その寝姿を見ていのちに疲れが出たのか綾子はそのまままた寝をしてしまった。

「…………子…………綾子。」

誰かに呼ばれたような気がしてハツと目を覚ますと、良がじつと自分が見ていた。

「え？ あ、ごめんなさい。呼んだ？ あらっ、私寝てたの？ いやだわ。良ちゃんの顔を見てたらとても気持ち良さそうで私もウトウトしちゃつたんだわ。ごめんなさい。・・・どう？ 気分は。」

「…………話があるんだ。」

いつになく真剣な面持ちの良に綾子の顔が翳つた。

「え？ …………なに？」

「…………ああ…………」

「なに？ どうしたの？」

「う・・・ん。・・・あの・・・も。・・・俺達のこと・・・なかつたことにして欲しいんだ。 オレがこんななんじゃお前が苦労するだけだしな。・・・お前にはオレよりふさわしい男がいる。だからオレのことなんか早く忘れて良い男を見つけた方がいいと思うんだ。」

一方的に、それも唐突に別れ話を切り出され、言葉もなくじつとうなだれる綾子。両膝にポタポタと涙が零れ落ちた。そのまましばらぐの間微動だにしなかつたが、やがてゆっくりと顔を上げた綾子の視線が良のそれとぶつかった。

「…………なんだ・・・もつと悪い・・・知らせかと・・・思つた・・・わ。そんなことだった・・・のね。・・・初めからわかつてたじやない。そんなこと。・・・良ちゃんにふさわしい人は私じゃないって。・・・

いいのよ。気にしないで。・・・謝らないで！－！謝られたら私みじめになるわもの。・・でもおじさん達にはもつ少し、黙つてしまふ。・・だつて私達・・これからも友達つてここには変わりはないんだものね？・・ね？」

とこりどこりよどみながら言い終えるとこり笑う綾子。

「すまない。でも。お前それで良いのか？」

「良いも悪いも良ちゃんがそうしたいと言えば私はそれに従うだけよ。だつて私のためにそう言つてくれたんでしょ？だつたら私には何も言つ事はないわ。・・・さあ、ゆっくり休んで早く良くなつてね。」

毛布を掛け直している手が小刻みに震え睫毛に涙が光る。

「ごめんな。」

しかし今の良にはそれしか言葉が見つからない。

「何言つてるのよ。　それより私、先生に聞き忘れてたことがあつたからちょっと行つて来るわね。ちょっととの間待つてね。」

静かに病室を出るとトイレに駆け込み、綾子は泣いた。他人の目があつたため、声が外に聞こえないようにと念じながら。

「綾子。」

お互の気持ちが自分のことのように解る2人は、互いを大切に想う余りいつも意地を張つてしまつ。しかし別れを切り出す以外、彼女に何もしてやることが出来ないので。綾子もまたそれを甘んじて受け入れる事で良の負担が軽くなると考えた。2人ともそれが解るから愛おしいのだ。

回診の時間となり木村がいつものようにやって来た。普段通りの受け答えをしたつもりの良だったが、そこは餅は餅屋のたとえどおり、木村にはお見通しのようだつた。

「何か心配事があるようですね。表情を見ればわかります。一応私も医者ですからね。・・・察するに綾子さんとの事でしょうか。

どうやら図星のようですね。この病気は傍で力になってくれる人が必要なんです。できれば彼女に力を貸していただきたいと考えていたのですが・・・ムリでしょうかね？」

「先生。なるべく誰の手も借りず治療したい、といつのはダメですか？」

「え？ええ、まあ無理・・・というわけではありませんが・・・お勧めできることではないですね。ご家族の方の協力なしでは不可能に近いでしょう。私としては綾子さんが適任だと思っていたのですが・・・」

その時、2人の会話を入口で聞いていたのか当の綾子が飛び込んできた。

「せ・せんせい！私、大丈夫ですっ！やります。やらせて下さい！」「綾子！」

「おお！あなたが協力してくださるなら百人力です。・・・それではナースステーションにいらして下さい。細かいことを相談しましょう。」

憮然とした顔の良を残し、2人は出て行つた。

説明が終わると木村は満足気に綾子を送り出した。病室に戻つた彼女は窓の方を向き自分で背中を向けている良に向かつて呴いた。「私はもうあなたの婚約者でも彼女でもないわ。ただの幼馴染みよ。その幼馴染みが苦しんでいるのを見て見ぬフリはしたくないの。だから良ちゃんも友人の手を借りることに何も負い目を感じなくていい

いのよ。私はこれまで充分笠崎の方々にお世話になつてきたわ。これはその恩返しよ。あなたが直つたら私はもうあなたに近づかないから安心していいわ。私の最後のわがままだと諦めて協力させて欲しいの。いいわね。」

一旦口にすると誰の言ひ事も聞かない性格は良に対しても同じだ。ことに（良の）病氣に関することだけに始末が悪い。だが良も意地張りの性格なので、ありがたいと思つても素直に言葉にするのはプライドが許さず黙したままだ。するとそれを肯定と受け取つた綾子は、早速行動を起こした。

「えつとまず・・・病氣の原因を探ること・・・これはもうわかつていてるから済みね。・・・次は・・・つと・・・」

木村医師の指示を細かく記した手帳を見ながらひとり言のようになびく綾子に、良は背中を向けたままぶっきらぼうに言つた。

「・・・お前がもらつた本を書いたウイリアム・カーペンターの昭和20年以降の消息と交友関係を調べればいいだろ。」

「えつ？・・・ああ、そうねえ。　えつ！じゃ、いいのね？私がやつても、わかつたわ。早速調べてみるわ！」

協力を許された安堵感から嬉し涙を流しながら綾子は吉報を待つてね！と言い残し、軽快な足取りで病室を出て行つた。ドアがバタンと閉まると良は一人呟いた。

「悪いな。オレのために。」

笹崎家に顔を出した綾子は、調べたいことがあるからと勝和の退院祝いに集まつた隣近所の人達に挨拶もそこに足早に東京へ戻つた。

ゴールデンウイークも終盤だつたこともあり本の元保有者、高木とコンタクトが取れ、速攻で会うことになった。
教えられた住所をたどつて自宅に訪ねると、高木は待つてましたとばかりに綾子を中へ招きいた。令夫人も同席していたので（秘書を兼務しているらしい）安心して勧められたソファに腰掛けた。グッズダイミングで紅茶とケーキが出てきた。

「さあどうぞ。お口に合うかどうかわかりませんが。」

「ありがとうございます。でも先生。突然押しかけてご迷惑じゃありませんでしたか？」

「なんの、なんの。あなたのような美しい方の訪問ならいつでも大歓迎ですよ。・・・それで・・あの本について何か尋ねたい事があるとか。私に出来る事ならどんなことでもお教えいたしますよ。」傍に控えている夫人を気にかける風もなく、綾子を讃める高木。夫人もまたそんな高木の様子をニコニコと微笑みながら見ているので、かえつて綾子の方が萎縮してしまつた。

「大丈夫ですよ。私達はお互いを認め合つた夫婦ですからね。で？話というのは？」

高木に促され、少しづつ緊張が解けていく綾子。

「はい。あの、実は・・・あの本を書かれたウイリアム・カーペンターという人の終戦後の消息と交友関係を知りたいのです。先生ならご存知ではないかと、『迷惑と承知の上お訪ねしたのです。』必死な顔付きで訴える。

「おやおや。何かと思えばそういう事でしたか。消息と交友関係ねえ。・・・ちょっと待ってくださいよ。」

高木は数ある蔵書の中から一冊の本を取り出した。「ああ、これだ。

」と満足そうに咳くと再び元の椅子に腰掛けた。

「これはですね、あなたに進呈した本の言語版。つまり翻訳される以前の原本です。ここに何か書いてあるかもしない。……ええと、いつでしたか？昭和20年以降？つまり1945年ですね。

終戦後ですか　ええと・・・ああ。ありました。1945年10月2日。私達はハワイに着いた云々というところですね。え？あ、既に読んだ？ああそうですか。・・・うーん。・・・ああ。ダメですね。あとは和訳されているものと殆ど変わりませんね。消息ねえ・・・消息・・・　あ！そうだ！この人に聞けば解るかもしれない！電話番号は・・と。　ああ、これだ。

既に本は夫人の手に。代わってアドレス帳が高木の手に渡された。阿吽の呼吸である。高木はアドレス帳を見ながら、とある出版社に電話をかけた。

「・・・私は桃連大学の高木という者ですが、酒井さんはいらっしゃいますか？・・・ええ。私の担当の酒井守君です。はい。

おお！酒井君。丁度良かった。連休だから休みかと思つたよ。ちょっと調べてもらいたいことがあるんだが。・・・以前、君のところで出版したウイリアム・カーペンターというアメリカ人が書いた『私の海軍時代』という本があつたらしい。その作家について調べてもらいたいんだ。あ、いや、プロフィールというものではなく、終戦後の消息やその後の交友関係・・・（チラッと綾子の顔を見て）で宜しいかな？・・・あ、いや。こっちの話だよ。　そうそう、その2点を調べて欲しいんだよ。・・え？わかってるよ。・・次回は君のところを優先するよ。　大丈夫。約束するよ。・・じゃ、なるべく早く頼むよ。」

時折綾子に確認しながら高木は出版社に調査を依頼し、簡単な世間話ををして受話器を置いた。

「良かったよ。酒井君がいてくれて。こういったことは餅は餅屋でね。出版社に頼むのが一番なんだ。彼なら大丈夫だ。内緒だけれど

ね、私の担当の中では彼が一番信用がおけるんだ。あとは寝ながら果報を待てばいい。

「申し訳ありません。私が面倒なことをお願いしたばかりに先生にご迷惑をおかけしてしまって。」

「とんでもないよ。私の方こそあなたのような見目麗しい女性に頼りにされて得をした気分ですよ。それに私もその後のカーペンター氏に興味が湧いてきましたからね。一挙両得というのにはこのことですよ。」

ワインク付きの贅沢に思わず赤面してしまう綾子。高木にはそれが日常茶飯事のようで、そういうキザなセリフをサラッと言ってしまえるところが宮下の言わんとする高木がモテる所以のようだ。

「そんな。私美人じゃありません。・・・」

益々赤くなる。

「何という事ですか。あなたが美しくなければ世の中で美しい人などそれはいませんよ。あなたと結婚する男がうらやましい。ねえ?」
今度は夫人に同意を求める高木。夫人は夫人で、

「全くその通りですわ。私など主人を取られるのではないかと最初にお目にかかつた時から心配しておりましたもの。」

とすかさず夫の意見に同調する。しかしその言葉には嫉妬などという下世話な感情は微塵も感じられない。

「ほらね。あなたはもつとこ自分に自信を持つて良いんですよ。」

高木の優しい言葉に良との破綻が思い出され、綾子の目からポロポロと涙がこぼれた。それを見た夫妻は事情を知らないだけに自分達の言動が綾子の心を傷つけてしまつたと勘違いし、大慌てで謝罪した。

「・・・申し訳ありません。先生方のせいではありません。・・・ちよつと悲しいことを思い出してしまって。・・・ごめんなさい。・・・少しの間・・・」

そう言つたきり綾子は両手で顔を覆い肩を震わせた。夫人がそつと肩を抱き、自分の方に引き寄せた。幼い頃両親を亡くした綾子は、

ずっと他人に甘えることなく育つてきた。確かに笹崎夫妻は親代わりになつて非常によく面倒を見てはくれたが、それでも本当の父母ではなかつた。そのせいいか綾子は決して一線を越えて2人に甘えたりすねたりするようなことはしなかつた。謂わば優等生を演じていたのだった。それが高木夫人の醸し出す雰囲気に、彼女の心に甘えたいという感情が芽生え、その胸を借りて泣いてしまうという失態をしてしまつたのである。それに対し夫人は何も言わず、ただそつと頭を撫でてくれた。部屋には暖かな日差しが差し込み、カツコウの鳴き声が聞こえていた。

静寂を破つたのは電話の呼び出し音だった。受話器を取りうつとする夫人を高木が制し、自ら電話に出た。かけてきたのはやはり酒井だつた。

「おお！待つていたよ。それでどうだつたのかね……ん？……ほう！それはそれは……そうだね。連絡先を教えてもらえばこちから電話するよ。……それと君から紹介されたと言つて差し支えないだろうね？……そうか。それはありがたい。ではここで待つていいのかね？……そうか。……ではよろしく頼むよ。……じゃ、後ほど。」

高木の表情からその内容が明るいものだということが察せられた。

「先生！」

綾子の問いかけに高木は√サインを見せ、

「さすがは大手出版社だけのことはあるね。短時間でカーペンター氏の孫という人物を見つけてくれたよ。何でも彼はアメリカで出版社の社長をやつているそうで、酒井君の会社とも懇意にしているらしいよ。早速連絡を取つてくれるそうだ。ここで待つているようにと言われたから、申し訳ないがもう少しここで私達年寄りの顔を見て辛抱しててくれないかね？」

高木は穏やかな笑みをたたえながら言つた。

それから待つこと更に2時間。ようやく電話が鳴つた。

「はい。高木……おお！酒井君。待つていたよ。ん？おお！そつか！え？これから？それでは申し訳ないよ。え？……そうか。いやあ、それは悪いね。じゃ、その時にまた。」

受話器を置いた高木は、不思議そうな面持ちで自分を見つめる2人の顔を見た。

「実はね。驚いちゃいかんよ。……酒井君の話だと、その孫という

人がこれから日本に来るというんだ。知り合いの人と一緒にね。いや、酒井君が連絡したからというのもあるらしいが、その知人が来日するので付き添つて来るというのが本来の主旨なんだそうだがね。その人がだよ。酒井君の電話で私達と直接会つてくれることになつたんだよ。日にちと時間がまだはつきりしないからわかり次第また連絡をくれるそうだ。」

高木の一言一句が綾子にはセンセーショナルな出来事だつた。交友関係どころか一発で身内という人物にぶち当たつたからだ。その上わざわざ来日して面会までしてくれるというのだから、綾子でなくとも驚きの一言に尽きるというものだ。

「だからね、日時がはつきりしたらすぐ連絡するから、申し訳ないがそれまで首を長くして待つていて下さい。いいですか？」

高木の申し出に返事もできずただ首を縦に振る綾子だつた。

悶々とした気持ちのまま3日が経った日の午後。学校から帰ろうとした綾子の携帯が鳴った。見ると相手は高木だった。

「はい！・・・はい！私です。え？本当にですか？これから会つて下さるんですか？　はい！すぐ伺います！場所は・・・はい。エターナルならわかります。はい。えつと　今4時ですから一時間後には行けると思います。はい！ありがとうございます！」

電話の前後でこれだけ表情の変わる人も珍しいといえるほど綾子の顔付きは違った。駅までの1キロを短距離ランナーも驚くほどのスピードで駆け出した。このときばかりは後先を考える余裕などなかった。案の定、駅に着いた時の彼女の髪はボサボサ、身体はフラフラの状態だった。それでも約束の時間の15分前にホテル・エターナルに到着すると、落ち着かない様子のままロビーで高木達を待つた。高木以外の人達の顔を知らないので彼に来てもらわなければ前に進めないのである。

ジャスト5時。エレベーターのドアが開き4人の人物が降りて来た。まず高木と酒井とおぼしき男性が出て来た。次にアメリカ人の若い男性ともう一人、東洋系の顔をした老婦人だ。

「やあ、綾子さん。お待たせしたね。何だかとても疲れているようだが大丈夫ですか？・・・・・そうですか。じゃ、簡単に紹介しましょう。綾子さん。こちらが酒井君。こちらが吉川綾子さんだ。・・・そしてこちらがカーペンター氏の孫でコンチネンタル出版社社長、ゲイル・カーペンター氏。若いがなかなかのやり手でね、年は34歳。まだ独身だそうだよ。こちらの女性はミセスロドリゲスだ。・・・もちろんレッキとした日本人だよ。」

高木から紹介されやや赤くなりながら3人に挨拶する綾子だが、東洋系の女性だと見た老婦人が日本人だったことと、カーペンター

氏の孫なる人物があまりにも若いのに驚いた。

「日本の方、だつたのですか？」

「ええ。わたくしは日本で生まれ終戦後アメリカ人と結婚し、現在はニューヨークに住んでいます。この子、ゲイルに無理を言って今回連れて来てもらいました。

静かな笑みをたたえた老婦人には、誰もが親しみを感じさせる何かがあった。

カフェテリアに落ち着いた5人は、こうして出会うことになつたいきさつを語り合つた。

綾子の事情は高木と酒井から一通りカーペンター氏に伝えてあつたものの、ロドリゲス夫人が来日することになった事情を3名は知らなかつたため、話題の中心は必然的にそちらに重点が置かれた。しかし何故か夫人は多くを語らず、とにかくカーペンター氏の知人を捜しているという人物に会わせてくれの一点張りだつた。これではいつまでたつても埒が明かない、ということになり、急遽、翌日綾子が2人を良の待つ病院へ連れて行くことで落ち着いた。

子ども達には申し訳ないと思いつつ綾子は一旦学校へ戻り、まだ残つていた学年主任を通して2日間の休暇願いを出した。ここ三日ばかり暗い表情だつた綾子だけに校長も快く許可してくれた。

翌朝。東京駅10時16分発、MAXやまびこに乗った3人は、一路Z市に向けて出発した。ゲイル氏は何度も来日し、そのたび新幹線を利用していたので全く驚かなかつたが、夫人は終戦後60年の歳月を経て初めて帰国したため、その感激ぶりは大変なものだつた。窓から見える風景に、「この日本をお父さんとお母さんに見せたかつた。』と涙ながらに何度も呟いていた。

11時56分。Z市到着。通常ならバスで目的地まで行くところなのだが、都合よくバスが出ている都会と違い、田舎はあと数時間待たなくてはならない。綾子はちょっと見栄を張りタクシーを使うことにした。バスは安いが時間がかかる。タクシーは高いが早い。一長一短である。とりあえずタクシーに乗る前に病院に電話をして良に（カーペンター氏とロドリゲス夫人の来訪を）伝えようとしたが、突然勝和の具合が悪くなり、（良が）外泊していると看護師に教えられ、真っ直ぐ笹崎家に向かうことにした。

タクシーの中でも夫人ははしゃいでいたが、段々と田舎道に入ると極端に口数が少なくなり、村に着いた時にはひと言も喋らなくなっていた。あまりの豹変ぶりにゲイル氏も心配を隠しきれず、何とか気持ちを奮い立たせようと試みたが、その努力の甲斐もなく、夫人の顔は益々暗くなつていった。

その後笹崎家に到着した彼らは、重苦しい雰囲気のまま中へ入つた。

「おじさん！おばさん！綾子です！」
「綾ちゃん！」

良の父、新一が疲れた表情で偶然出てきた。

「おじさん！おじいちゃんは？具合が悪いって看護師さんに聞いて真っ直ぐここに来たんです！どうなんですか？おじいちゃんは！」

「ああ。退院してからずっと部屋に籠もりつゝりだつたんだけどね。今朝急に苦しみだして、救急車を呼ぼうとしたんだけれども、おじいちゃんがどうしても嫌だて言つものだからそのまま部屋で寝かせてるんだよ。往診してもらつたら時間の問題だらうつて。ああ！もつとちゃんと注意してたらこんなことには！」

まるで勝和の危篤が自分の責任もあるかのように落ち込む新一。

「おじさんのせいじゃないわ。だからそんなに自分を責めないで。大丈夫よ。きっとおじいちゃんは元の元気なおじいちゃんに戻るわ。だから安心して待ちましょ。ね？・・・・とこひで良ちゃんは？良ちゃんは帰つてますか？」

綾子の問いに答えるかのように奥から良が現れた。ハツとお互いを見つめ合つ2人。一瞬その場の空気が変わつたかに見えたのだが、後方からキャッ！という叫び声に容赦なく2人は現実に引き戻された。

何気なく声の主を見る良。しかしその表情に変化はない。それに比べロドリゲス夫人はまるで幽霊でも見たかのように両手で口を押さえ、大きく見張った目からは涙が溢れ出し身体がブルブル震えている。

「良・・・さん？」

「え？・・・なぜオレの名を？」

そこで初めて良は夫人の傍に近寄りじつと顔を見つめた。やがて夫人の震えが伝染したかのように良の身体もワナワナと震えだした。
「・・・き・・きみは・・まさか・・いや・そんなはずはない・・
そんなことがあるもんか！」

「良さん・・そのまさかよ・・」

「え？それじゃ・・き・ぬよ・・ちゃん？ ンなことがある・・は
ず・・・・」

ガタガタ震えながらもしつかり頷く夫人。一体どうなつているのか
綾子達にはさつぱりわからない。

「良さん！・・」

「綱代ちゃん！・・」

突然夫人が良に抱きついた。良もその身体をしつかり受け止めた。ワンワン泣き出す夫人と良を見つめます困惑する3人だったが、明らかなのは初対面のはずの2人が実はそうではなかつたということだつた。加えてかなり親しい関係だということがその言動からうかがえた。彼等の思惑をよそに、良達2人はただ、

「良かつた！生きていたんだね！」

「はい！生きていました！」

と何度も繰り返すことで何もかも分かり合えたようだつた。

「お取り込み申し訳ないが。良、いつたいこれはどういう事

か説明してくれないかね。」

たまりかねて新一が口をはさんだ。

「ああ・・・あんまり驚いたから・・まあ絹代ちゃん。 中に入つて。」

まるで恋人同士のような感覚で絹代の肩を抱き、初めてその存在に気づいたかのようにゲイルを見ると良は更に驚いた。

「ビル！・・まさか・・そんな！」

「ビル？違います。私は彼の孫でゲイル・カーペンターと申します。

」
ゲイル氏は流暢な日本語で答えた。金髪に青い目のアメリカ人が上手に日本語を話したので今度は新一が驚いた。

「いやあ、あんた日本語上手いねえ！うちの人達は英語が堪能だけどもあんたは逆だ。いやあ、たまげたなあ！」

方言丸出しの新一に目もくれず、良は熱っぽい目で絹代を見た。

「孫？　若いときのビルに生き写しだ。・・絹代ちゃんもそう思わないかい？」

その姿に綾子はこれまでにない程悲しい気持ちになった。良が婚約解消を言い出した本当の理由はこれだったのかと、改めて自分達に未来はないのだと思い知らさせた気がした。確かに夫人は良よりもずっと年上だが、恋愛沙汰に年令は関係ないのだということ、そして半信半疑だったタイムトラベルが現実に起こったことなどいうことが綾子の心を締め付けた。その心の葛藤を察したのか、ゲイルが優しく綾子の肩を抱き寄せそっと耳元で囁いた。

「大丈夫。あなたには僕がついています。心配しないで。」

「さあ、とにかく中へ入つて事情を説明してくれ。」

その場の空気が読めない新一のひと声で4人はそれぞれの想いを秘めながら家中へ入つた。

「良一おじこちやんが呼んでるわよー。」
さて事情を説明しよう。という段になつて京子がイライラしながら居間に入つて來た。

「あらーお客様？ まあ」ちらは？」

いくつになつても京子は女性である。まず田に飛び込んだのが超イケメンのゲイルだつた。

「おばさん。」ちらはロドリゲス夫人。」ちらはゲイル・カーペンターさんです。」

良と綱代、綾子とゲイルの取り合わせの事情を知らない京子にとつてこの光景はかなり異様に見えたようだ。

「母さん、じいちゃんが呼んでるんだろ？」

「え？ ああ、そうよ！ 早く行つてやつて。」

「わかった。」

手をつないだまま良は綱代を伴い、勝和の部屋へ向かつた。

「じいちゃん。入るよ。」

綱代の手を取り勝和の枕元に近付くと、弱々しく目を開けた勝和は見知らぬ女性の存在を認めた。

「誰じや。」

しかし声にも力がない。

「お客さんだよ。アメリカからね。 綱代・ロドリゲスさんといふんだ。」

「キヌヨ・・・キヌ・・・そう。・・・あのお人もキヌヨといつねじやつた。・・・神社の綱代さんと同じ名じや・・・」

勝和がふと漏らしたひと言は、綱よに大きな衝撃を与えた。微動だにせずじつと勝和の顔を見つめていたが、突然

「まさか！ そんな。・・・そんなことが・・・」

と咳くと片手でこめかみを押さえ、良の身体にもたれかかった。

「絹代ちゃん！どうしたの！何が起こったの！」

「・・・良・・さん。

まだわからないの？・・・あなたのお祖

父さまは・・あの勝一君なのよ・・・」

震える声で絹代の口から出た名前に、良は「え？」と言つたきり、祖父と絹代の顔を呆然と見比べた。同時に勝和の目が大きく開き、眼光鋭く絹代を見つめた。やがてほうつと大きなため息をつくと再び目を閉じた。その目尻から大粒の涙が頬を伝つて流れ落ちるのを絹代は見逃さなかつた。

あの勝一が自分の祖父？！そんな偶然がいくつもあつてたまるものか！そう叫びたい気分だつた。それに祖父の名前は勝和だ。そんな訳はない。絹代は頭がおかしくなつたのか？そうとしか考えられない。きっとそうなのだ。絹代の方が変なのだ。混乱し何も考へる余裕のない良に向かい、勝和が静かに語りかけた。

「どこから話せば良いかの・・・そう・あれば・・・と前置きしてから

「・・・ビルがいなくなり良さんと綱代さんがあの祠で話をしているのを聞いた儂は、すぐ駐在所へ走った。東京が空襲に遭うと叫ぶと駐在^{やつ}は初め、ただのたわ言だと全く取り合ってくれなかつた。けんもほろろに儂を追い払つた。ところが何日かすると急に儂を呼び出し村長宅へ連れて行つた。そこで・・・村長と駐在に東京空襲の情報源を吐けと拷問された。しかし儂は黙つていた。すると今度は良さん、つまりお前のことを教えると言われたのだ。だが儂はこんな奴らに良さんることは絶対言つもんかと更に黙つた。業を煮やした村長はついに本性を現し・・・儂の右足を叩き潰した。・・・儂の右足はそれ以来どんなに手を尽くしても元通りにはならなくなつた。今でも足を引きずるのをお前は知つていいだろ?・・・その後、意識の無くなつた儂の身体を駐在^{やつ}は海岸へ運び・・・捨てたのだ。

どのくらい時間が経つたのかわからない。誰かが儂の身体に近付き、何か耳元で囁いた。薄つすらと目を開けた儂の目にビルとアレックスの顔が映つた。2人は儂を助けようしてくれたのだが、当時の儂は志願して軍に入ろうとしていたほどの愛国主義者だったから必死で彼等に抵抗した。だが所詮子供の力。本格的な訓練を受けた2人に敵うはずがない。大きな袋に入れられた儂は気を失つたまま船に乗せられ、やがてハワイへ送られた。そこで専門的な治療を受け、退院許可が下りたのが終戦後の9月10日だつた。入院中に日本がポツダム宣言を受諾し、戦争が終わつた事を知つた儂の心は荒んでいた。何もかも良さんの言う通りになつたことを知つた儂は、退院しても行くところがなく、活気に溢れたハワイの裏側へ墮ちていつた。半年以上も入院していたお陰で言葉は日常会話なら普通に話せるようになつっていたから、何の問題もなかつたが、日本人とい

うだけでハワイ人にはパールハーバーを連想させ、現地人からはかなり迫害を受けた。そんなある日。偶然に土産物店でアレックスに会った。彼は儂をずっと捜していたらしく、強引にある家に連れて行つた。そこはビルの実家で、丁度休暇を取つて帰宅していたビルと再会し、姉の一子の死を知つた。日本からハワイに行く途中死んだということだったが、その頃の儂は悔しいとか悲しいとかそういう感情は微塵も感じなかつた。あるのは楽しければいい。それだけだつた。その姿を見たビルは、これではいけないと友人達に手を回し裏の世界から儂を救つてくれた。その後ニューヨークへ行かないかと誘われ、アメリカ本土に渡つた。いい忘れたがビルは軍隊の任期を終えてニューヨークの新聞社に勤めていた。そういうた關係で儂も同じ会社に入り、眞面目に勤め始めた。しかし根っからの放浪癖が身体に染み付いていたのか、2年もすると同じ場所にいるのが苦痛になつてきた。苦痛というよりも、日本が恋しくなつたのかもしれない。また突然行方をくらました儂は、貯めたお金を全部持つてハワイ行きの船に乗り、日本へ帰つてきた。その頃の日本は焼け野原から少しづつ復興しようという気合があつた。しかし何をするにしても儂には戸籍がなかつた。どういう理由かわからんが、既に鼓島は無くなつていたから、近くの役所に行つて戸籍を作つてもらつた。当時はそれが可能じゃつた。ちまた巷には戦災孤児が溢れていたから自己申告すれば新しい戸籍を作ることができたのだ。しかし村長と駐在の存在を恐れた儂は本名を名乗ることができず、それでも自分の名前を残したくて佐々木勝和と付けた。勝は勝一の勝、和は一と繋がることからそうしたのだが、それでも安心できず少なくなつた金を持つて上野から汽車に乗つた。そこで偶然隣り合わせになつた人と親しくなり、その人の家があるこの村に来た。ここは冬が長く厳しい寒さが続く所だが、しつこいほど人情深いところだつた。彼等に触れるうちに儂はこの地に骨を埋める決心をした。土地の女性と結婚し、京子が生まれた。京子は姉の一子に良く似ていて、姉が生きていたならどんな風になつていただろうと何度も想像した。

こんな山の中だが儂は京子に小さい頃から英語を習わせた。日米の平和の架け橋となつて儂を助けてくれたアメリカに少しでも恩返しをしてもらいたかつたからだ。その気持ちはお前にも受け継がれたはずだ。

どこまで話したかな・・・おおそうじゃった。成長すると京子は東京に出たいと言つた。儂に反対する理由がなかつたから快く送り出したのじゃが、一年もせんうちに新一君を連れて来て結婚すると言い出した。これには儂は大反対だつた。そうじゃろう? 日米の架け橋に!と願つていた娘が普通の嫁になりたいと言つ出したんじやからな。じゃが既に京子のお腹にはお前がいた。仕方なく2人と一緒にさせ生まれたのがお前じゃ。名前は良と名付けさせた。無論60年前のあの良さんから取つたものだ。しかしさかお前があの時の良さんだつたとは・・・病院でお前の告白を聞いた時の儂の驚き・・・あまりの衝撃に身体中をナイフで切り付けられた氣分だつた。あの時の状況は今でも言葉にできない。冷静さを欠いた儂は、すぐ退院するとわがままを言つて京子達を困らせた。しかしあの時の儂は普通ではいられなかつたのだ。帰つて来ても落ち着かず、部屋に閉じ籠つてしまつた。頭の中は真っ白で“まさか、そんな事があるはずはない!現実ならこれは天罰だ。儂のそれまでしてきた事へのむくいだ!”儂の身体は言葉の鎖でがんじがらめになつた。・・・良・・・儂はお前に謝らなくては鳴らない。あれからずつと儂は後悔し続けた。お前を非国民と呼び、その言葉を信じなかつたことだ。心の中では謝りたいと思つていた。生きているうちに会つことが出来たならどんなことをしてでも謝罪したいと思つていた。・・・すまない・・・許してくれ・・・”

ひと言ひと言に全身の力を込め、振り絞るよつな声で語りきるや安心したのか勝和、いや勝一は静かに目を閉じた。

「勝一君!」

2人同時に叫んだが、傍に付き添つていた医師が勝一の脈を取り、瞳孔の開き具合を確認すると冷静な判断を下した。

「17時12分です。」

「うわ
！」

良の叫び声に新一達、家中にいた全員が勝一の部屋に押しかけた。

「おじいちゃん！」

一人娘だった京子は良を押しのけ勝一の枕元に近付きまだ暖かい顔に自分の顔を押し付け必死に父を呼び続けた。良は絹代を促し廊下へ出た。そこには青白い顔をし、目に一杯涙を溜めた綾子と、その肩を優しく抱き寄せるゲイルの姿があった。

「良ちゃん・・・」

心配そうに声を掛ける綾子の顔を見て、とうさにゲイルを振り払い綾子の手を強引に引っ張り外に出る良。それは自分でも説明のできない行動だった。

「どうしたの？おじいちゃんの側に付き添つてあげなくていいの？」

綾子にも良が取った行動の意味がわからない。

「あの男は何なんだ！それに何だ！あの態度！お前もお前だ。あんな男に肩を抱かれて嬉しそうに！」

どうしようもない怒りを爆発させる良。

「ど・どうしたの？ゲイルは私を心配してくれただよ。私だって嬉しそうな顔なんてしていなかつたわ！それにもう私達恋人でも何でもないんだからそんな風に言われる筋合はないわ！他の人が見たら変に思うわよ！」

綾子もまたいわれのない怒りをぶつけられ精一杯反論した。

「うるさい！オレはな・・・こんなときに人前でイチャイチャしているお前たちが許せないだけだ！」

「イチャイチャ？何をそんなにイライラしているの？まるで自分の持ち物を取られてヤキモチを焼いている子供のようだわ。・・・それともおじいちゃんに何か言われたの？それから絹代さんとは一体どういう関係なの？私にだってそのくらい聞く権利はあると思うわ。」

必死に自分の感情を抑え、良の怒りを静めようとする綾子。内心は
絹代に対する嫉妬で己の身体を焼き尽くさんばかりだといふのに。
「ヤキモチだと！誰がお前なんかにヤキモチなんか焼くもんか！バ
カバカしい。それに彼女とのことを一々お前に説明する必要はない
！」

それにもかかわらず良の怒りは収まらない。そればかりか益々エス
カレートするばかりだった。

「それは私から説明いたしましょう。」

その時、物陰からゲイルに付き添われた絹代が現れた。

「絹代ちゃん、いつの間に・・・」

「最初からあなたの方の話を聞いていましたよ。」

穏やかな微笑みをたたえ、良から綾子に視線を移す。

「あなたがアヤコさんでしたのね？ 昨日紹介された時は全然気づかなかつたのですが、今日良さんと60年ぶりに再会して思い出しましたわ。と言つてもあなた方にとつてはほんの2~3ヶ月前の出来事なのでしょうけれどね。」

今度は良に視線を向け、フツとため息を漏らした。

「良さん。私達に約束したでしょ？ 正直におなりなさいな。あの時の気持ちを思い返してアヤコさんに本当の気持ちをぶつけなさい。私達に聞かせてくれた“君のために捧げる歌”私は一生忘れませんよ。・・・アヤコさん。信じてもらえないかもしれないけれど、私は女学生の頃、良さんと出会つたのですよ。もちろんその時は良さんが救世主として私達の前に現れたと信じていたから、まさか違う時代の人だとは思わなかつたの。それに良さんには心に決めた人がいたから初めから私達は問題外だった。私と友人の一子ちゃんはしつこく良さんにその女性の名前を言えと迫つたわ。そしてとうとう“アヤコ”という名前を聞き出したの。当然私達2人はその見た事もない女性に嫉妬したわ。その時良さんは自分の時代に戻れたなら必ずそのアヤコという女性に結婚を申し込むと約束したのよ。どうですか？ 良さん。その約束、守つていただけますか？」

ほこ先を自分に向けられた良は、下げた両手でこぶしを作りじっとうな垂れていたが、悲しそうな目を絹代に向かた。

「・・・ダメなんだ。今のオレには・・・あの約束は守れない。」

言つが早いかその場から逃げるように家の中に駆け込んだ。

睡然とする3人だが、いち早く綾子が我に帰った。

「申し訳ありません・・・」

「え? いえ。でもどうなさつたの? 良さん。」

「はい・・・・ 実は・・・」

綾子は良が戻つて来てからの様子を2人に搔い摘んで話した。その中には自分達の破局も含めざるを得なかつたため、その件に関しては事実のみを挿入した。説明が終わると絹代とゲイルはとてもショックを受けたようで、絹代は両手で顔を覆い、ゲイルは空を仰いで十字を切つた。

「 そういう訳で良ちゃんは私のためを考えてくれているのだと思います。だからあまり責めないで下さい。お願ひします。」

深く頭を下げる綾子に優しく手を差し伸べる絹代。

「 良さんがあなたを選んだ理由がわかりましたよ。あなた方は比翼連理のようですね。・・・ 大丈夫。きっとその病は治ります。あなたが傍についている限り、きっと。」

暖かい言葉に頭を垂れた綾子の身体が小刻みに震えた。

「綾ちゃん！綾ちゃん！どこにいるの！」

苛立つた京子の声に3人は玄関の方を見た。家の中から京子がエプロン姿で叫んでいたのが見えた。そして綾子を見つけると一層声を張り上げた。

「何してるの！おじいちゃんのお葬式の準備があるのよ！隣組の人達がそろそろ来る頃だからあんたも手伝いなさい！何をすれば良いかわかつてるわね！おばあちゃんの時と同じにすればいいんだから！さあ！早くして！」

追い立てるように綾子を家の中に入れると、初めて気づいたように絹代とゲイルの存在を認めた。

「あら、お客様にとんだところを見せてごめんなさいねえ。何しろ急にとりこんでしまって。わ、わ、中にお入りください。お父さん！ほら、お客様のお相手をしてー全く気が利かないんだからー！」

京子の怒鳴り声に新一が転がるように外に出てきた。その姿を見たゲイルが小声で「My God」と呟いた。

「すみません。気が付かなくて。母屋は京子と綾ちゃんに任せて、離れに行きましょう。申し訳ないですが今日はそちらでお泊り下さい。」

「新一さん。私は60年ぶりに親友の弟に会ったのですよ。その弟が亡くなつたのに平気な顔でお客面していらっしゃません。私も何かお手伝いさせて下さい。それがご迷惑なら勝一君の傍にいることをお許し下さい。お願いします。」

「親友の弟？どういうことですか？それにショウウイチとは一体誰のことですか？」

「事情を知らない新一には何のことだかさっぱりわからない。説明するのも面倒なので、絹代は端的に言った。

「あなたのお義父さんは私の親友の弟だったのです。ですから傍に

いさせて下さい。」

「え？し・しかし・・・・京子が何と言つか・・あいつは看護婦を志していただけに気が強くて・・時々ホントに困るんですよ。」

「え？看護師？あなたの奥様は看護婦になりたかったのですか？」

「そうですよ。それが何か。」

一子も同じく看護婦になりたいと夢見ていた。それが志半ばで死んでいた。絹代の目には優しい一子の笑顔が浮かんだ。

「か・ずこ・・・ちゃん。・・つづつづ」

「My dear 泣かないで。・・・新一さん。事情は全て良が知っています。絹代おばさんをショウイチさん、つまりあなたのお義父さんの枕元に連れて行つてください。お願ひします。」

優しく絹代の身体を支えながらゲイルは新一に言った。

「良が？そ・それなら京子も文句は言わんでしょう。・・わかりました。こちらへどうぞ。」

親目に案内され絹代が家の中に入つて行くのを見届けると、ゲイルはひとまず新一が用意した離れに向かつた。

2日後。勝和の葬儀はしめやかに滞りなく執り行われた。絹代とゲイルは勝和の昔からの知人という形で紹介され、殆ど遺体の傍から離れることなく控えていた。しかし良にとつて勝和という存在が単なる祖父ではなかつたということがあまりにも大きすぎ、葬儀の間中ずっと放心状態のままだつた。見かねた綾子が時々声を掛けるのだが、それに対する返事もままならぬ有様だつた。

葬儀も無事終わりこれ以上休暇の延長は無理という日になつて、綾子は新一夫婦に婚約解消とこれからすぐ帰京しなければならない旨を告げた。ゲイルも一日帰ると出したため、どうせなら一緒に行こうといふ話になつた。

新一はもとより京子の驚きといつたらなかつた。破綻した原因を作つたのは自分だと泣いて綾子に詫びた。しかし元々それが理由ではなかつたので、京子の謝罪は暗くなつていた綾子の心を更に重くした。

「おじさん、おばさん。これで縁が切れたという訳じやありませんから、何かあつたらすぐ飛んできます。それにさつきから言つてゐるように、こうなつたのはおばさんのせいじゃないですからそんなに謝らないで下さい。良ちゃんと私は元々縁がなかつた。それだけですから。　ね？　それじゃ、私、行きますから。良ちゃんをお願いします。」

「笹崎さん。絹代おばさんを宜しく頼みます。僕は仕事がありますから一度東京へ戻りますが、来週また来ます。その時まで小母をお願いします。　じゃ、綾子さん。行きましょう。」

ゲイルに肩を抱かれ、あらかじめ頼んでおいたタクシーに乗り込むと、一度も後ろを振り返らず綾子は去つて行つた。

ゲイルに守られるように去つて行った綾子の姿を母屋の2階から見ていた絹代は、焦点の定まらぬ目を天井に向いている良に向かつて言った。

「・・・・そうね。・・・私達は戦争の後、生きて行くことだけで精一杯で他の事なんて考える余裕なんかなかつたわ。・・・本当に・・今思い出すだけでも鮮明にあの光景が目に浮かぶのよ。そして両親との別れ・・・私は父や母を思うと何故あの時強引にでも連れて逃げなかつたのかつて自分で自分が許せないの。今でもそれは後悔しているわ。せめて母だけでも一緒に逃げなかつたんだろうってね・・・でもやっぱり60年の歳月は長かつたんだと思うわ。その歳月があの悲惨な戦争のショックを少しづつ和らげてくれたのかもしない。亡くなつてしまつた人は一度と帰つて来ないし、今さら戦争を恨んでも起きてしまつたことを愚痴つたからつてどうにもならないでしよう。・・・そうは言つてもね、まだ完全に立ち直つたわけじやないの。私でさえそなんだから、あなたにとつてはついこの間の出来事だったのですもの、そんな風に気が抜けたようになつても不思議はないのかもしれないわ。・・・けれどそれではいつまでたつても前へ進めないのよ。・・・失つたものが大きかつたらといつて後悔しても何も始まらないわ。良さん。しつかりして頂戴！あの時あなたに励まされて私はこうして今まで生きてこられたのよ。勝一君だつてきつとそつだつたと思うわ！だから今度はあなたが自分を取り戻す番よ！」

良の肩を掴み、正気を取り戻そと絹代はグラグラ揺すつた。しかし良は精気のない目を絹代に向く、

「わかつてゐるんだ・・・でも・・・身体がいつことを見かないんだ・・・」

とポツリと呟き口を閉じた。その片方の目から涙が一筋じぼれ落ち

た。

慌しい状況の中で笹崎家は初七日を迎えた。移民者であつた勝和、もとい勝一には親戚と呼べるような縁者がいなかつたため、遺品を整理しようとした京子は机の引き出しに入つていて良宛の手紙と汚れた布袋を見つけた。

京子からそれらを受け取つた良は、まず袋を開けてみた。それは勝和がことのほか大事にしていたもので、いたずらに触ろうものなら烈火の如く叱られたものだつた。

「こ・これは！」

それは無くしたと思っていた電池の切れた携帯電話だつた。しかも錆びていてその殆どが腐食していた。一体何故祖父がこれを？急いで手紙を開けてみると、日付は5月1日。つまり勝和が退院した日になつていた。その日帰宅した勝和は部屋に引き籠もり誰も寄せ付けなかつたと新一がこぼしていた。

『良へ。私はこの手紙を退院した日に書いている。 良。良。まさかお前があの良さんだつたとは。青天の霹靂とは恐らくこのことを言うのだろう。お前が生まれたとき、良さんのようにになつてしまつて付けた名前のお前が、まさか本人だつたとは。 私はその事実に身体が震え、とても入院などしていられなかつた。ことにお前の発作を目の前で見てしまつた今となつては。 罰が当たつたと思つた。

良よ。私はお前に謝らなければならないことが3つある。 一つはお前を非国民呼ばわりしたことだ。 そう叫んだ私は敵国兵に助けられ、のうのうとブザマに命を永らえてきた。 戦争が終わり、60年を生きてきた現在、お前の言った意味がようやく理解できた。それがずっと私の心の中で汚点となつていた。 2つ目は袋の中身だ。私はお前の電話を盗んだ。お前がビルを捜しに縄代さんと出かけた隙に、部屋へ忍び込み盗つてしまつた。 秘密の場所に隠し、村長た

ちに拷問され捨てられた後、半死半生のままビル達に支えられ、それを取りに戻った。その後の私の人生はその電話が唯一未来への希望となつた。だが盗んだという事実は年ごとに私の心に重くのしかつてくるようになつた。3つ目はお前の発作を目の当たりにして何も出来ない自分の存在だ。あの光景は死んだのちも絶対忘れないだろう。今もこうして目を閉じるとお前の苦しむ姿がはつきりと瞼に浮かぶ。戦争は私に多くの傷を残した。拷問されたのも元はといえば戦争が引き起こした産物だ。しかしあ前の傷は違う。心の中の戦争だ。私にはどうすることもできない。それが悔しい。本当のことと言つても誰も信じてはくれないだろう。知つているのは私とお前の2人だけだから。時が解決してくれる傷もあるが、一緒に苦しんでくれる人がいれば直る傷もある。お前には綾ちゃんがいる。あの娘なら大丈夫だ。どんな事があつても離してはならない。もしお前達の間にミゾができるような出来事が起つたなら、時を置かず、謝つて仲直りすることだ。“ごめんなさい”このひと言が言えず私は今日まで来てしまつた。良よ。言つてしまつた後悔より言わぬ後悔の方が大きい事を覚えておくがいい。あの娘がいると思えば私も安心して姉さんのところへ行ける。私にはわかる。自分の命が尽きかけている事を。

良。すまなかつた。私は60年間ずっとお前に謝り続けてきた。悔恨の日々を過ごしてきたといつても過言ではない。良よ。反省は美德だ。しかし後ろを振り返つてはならない。また綱代さんや校長夫人を助けてくれたお礼も言つてなかつた。私はあの時誓つた。いつか再びあの良という人に巡り合うことがあつたなら直接言おうと。“ごめんなさい”そしてありがとう。

と『

そこで文章は終わつていた。最後の2行は泣いていたのだろうか、紙がボコボコになり、文字がかなり乱れていた。そこには直接言いたいと思いつつそれでも尚それを言えずに悶々とした勝和の気持ちが溢れていた。だが目を落とす間に勝和はすまなかつたといった。その時の祖父の心中はいかばかりだつたろうか。

「じいちゃん！」

勝和の切なる想いが良の心に巢食つていた無気力を溶かし、両目から涙となってボロボロ流れ落ちた。

「良ちゃん！」

ちょうど初七日で帰つて来た綾子が良の絶叫を聞きつけ部屋に飛び込んできた。

「どうしたの！ 良ちゃん、しつかりして！」

「ウッ！」

綾子が良を抱き起こしたとき、彼女が身に付けていたペンダントが太陽に反射し、光を放つた。とつさに綾子はぐつと身構えた。・・・しかし何も起こらない。確かに反射した光が良の目を襲つたはずなのに。良の身体には何の変化も起きなかつたのだ。

「良・・・ちゃん？」

「あやこ・・・」

「ま・待つてて。」

何を思つたか綾子は部屋を飛び出し、家族が見ている中、納屋から草刈機械を引っ張り出してきた。

「さあ！ 良ちゃん！ エンジンかけてみて！ 私には力がないからあなたがやって！ さあ！ 早く！」

綾子は無理やり機械を良に押し付けた。そこで初めて彼女の意図を理解し、良は恐る恐る紐を引いた。しかし力が足りなかつたのか機械はビクともしない。2回、3回。・・・5回目にしてようやく機械はいうことをきいた。ブルブルブル！ 工事現場の音にはまだ程遠いがそれに近い音がし始めた。

5秒、10秒・・・長い1分が経つた。いつもなら音が聞こえたと同時に、長くとも30秒以内には発作が起きていた。ところが2分、3分。ついには5分が経つた。しかし何も起こらなかつた。綾子の異常な行動に家中の者が良の部屋に集まってきた。一部始終を見ていた彼等だが、いつこうにその行動の意味がわからない様子でお互いの顔を見合せている。ただ1人、絹代だけがその意

味を解し涙ぐんでいた。そうとは知らない良と綾子は大泣きしながら抱き合つて喜んだ。そのかたわらには命の恩人である草刈機械が大きな音を響かせ横たわつていた。

その夜。綱代は綾子と一緒に戻つて来たゲイルを交え、改めて良と綾子に戦後の自分を語つた。良い事も悪い事も決して口にしたことのなかつた綱代だったが、良の目に精気が戻つたのを見てようやく自分の戦後が終わつたと実感したからだつた。

「まず初めに綾子さんに謝らなければなりませんね。今回私が帰国したことであなたに大変悲しい思いをさせてしまいました。本当にごめんなさい。ゲイルから指摘されるまで全く気が付かなかつたわ。私は今でもアレックスを愛しているから、誤解を招くような行動を取つていたなんて少しも感じなかつたの。・・・・そうね・・

・あれは60年前。私は実家が神社だったこともあって、小さい頃から巫女をしていたの。ある日、枕元にご神体が現れて不可解なお告げを聞いたの。『近いうちに鼓島にてつもない大惨事が起こる。助けを呼びなさい。強く念ずれば必ず救世主が現れる。なれどその者の言動を努々（ゆめゆめ）疑うではない。信すれば必ず助かる。』それだけを言うとすつとご神体は消えてしまった。私はそのお告げに沿つてその日から毎日念じたわ。時にあまり強く念じすぎて気を失つた事もあつた。けれどその甲斐あつてようやく返事が返つてきた。そしてさほど時を置かず良さんが現れたの。私は良さんを見た刹那、この人だ！と六感で感じ、これで助かる！と叫んだわ。ただ1つ、私の予想と違つたのは、救世主となるべくその人が時間を超えて來た未来人だつたということね。でも最初に良さんを見つけたのは私の友人の一子ちゃんと彼女の弟、つまり勝一君だつた。私達は良さんから戦争終結が近いこと、更に終戦後の日本がどうなるのかを教えてもらいました。私達2人は最初から良さんを救世主だと信じていたから、良さんの口からでた言葉は全て現実に起ることだと確信していました。ところが勝一君は軍国主義の申し子のよう

な子でしたから、真っ向から良さんの言つた言葉に反発し、非国民党でしたから、真っ向から良さんの言つた言葉に反発し、非国民

と呼び近付かなくなつてしましました。そのうち勝一君が行方不明になりました、姉の一子ちゃんも行方がわからなくなりました。悲しかつたけれど当時はそんな感傷にいつまでも囚われていられませんでした。でも私は良さんに全幅の信頼を置いていたから何が起こつても心配することはないと信じていました。あまりにその想いが強すぎて父に咎められたくらいでした。嫁入り前の娘が1人の男に深入りしてはならない。しかも良さんは自分の世界に帰るべき人であり、お前がいくら恋焦がれてもどうにもならない。決して好きになつてはいけないと・・・」

そこで綱代は一息ついた。

あの時の厳しい顔をした父は友人から聞いていた父親像そのものだった。万民を救う神主がそんなことを語りなんて・・・私の目には父が俗物に落ちたように見えたわ。いつときの感情で私は憤慨したけれど父は私の奥底にある感情の変化を見抜いていたのね。その時すでに私は良さんを愛し始めていたから。そして良さんが来てから2ヶ月ほど経った日。突然鼓島が核の実験地になっていることを知らされたわ。すぐ島を脱出しようと言われて強制的に海岸に連れて行かれ、米兵の待つ軍艦に乗せられた。そこで一子ちゃんに再び巡り会ったの。既に死んでいたと思っていた一子ちゃんに会つて私は涙が枯れるのではないかと思う位泣いたわ。でも彼女の身体は拷問にかけられたせいでボロボロだつた。同じことが勝一君の身にもおこつていたらしのだけれど、その時の私は一子ちゃんに会えた喜びでそこまで考える余裕はなかったの。その他、船に乗つたのは乳の恩師夫人だけだったわ。私達3人はお互い身を寄せ合つてじつと時間が過ぎるのを待つっていました。人工的に核爆発を起こさせるのですから軍艦はかなり遠くまで避難していたと思います。それまで米兵に張り詰めていた緊張感がある時を境に溶け、周囲がザワザワし始めました。私達には言葉が理解できませんでしたけれど、何か重大な事件が起きたのだろうという事は察知できました。それが鼓島消滅なのだろうか?と半信半疑でしたがさすがにそのことは夫人と一子ちゃんには言えませんでした。悲しみを大きくし、傷口に塩を刷り込むようなことをして一体何の得があるのでしようか。ただ私は島に残つた良さんのことが気がかりでなりませんでした。なぜ強引に連れて来なかつたのだろうと後悔が残りました。以後60年私の心の中に消えない傷となつておりました。その頃の日本は男女七歳にして席を同じうせず。という基本理念がありましたが、良さんはそんなことを全く気にしていない方でした。当然ですわね。そん

な理念があったなんて信じられないくらいずっと未来から来た人々
のですもの。

その後一子ちゃんはハワイに行く途中亡くなってしまいました。私は島から脱出後、何くれとなく気遣つてくれたアレックス・ロドリゲスとハワイで結婚し、しばらくそこに滞在しニューヨークに渡りました。校長夫人はハワイでみやげ物店を手伝つて生計を立てられるようになつていましたし、本人の希望もあつてそのままかの地に残しました。ハワイ滞在時に勝一君に再会しましたが、あまりの変わりように心臓をわしづかみされた気分になつてしましました。

心が荒んでいたのでしょうか。でもビルとアレックスのお陰で何とか立ち直つた彼をビルはニューヨークに連れて行き、自分の勤める会社に就職させたの。けれどそれも2年が限度だった。勝一君はまた私の目の前から忽然と消えてしまった。・・・でもまさか日本に戻っていたなんて。今でも信じられない・・・良さん。あの時あなたが歌つてくれた“君のために捧げる歌”は今この時アヤコさんに歌つてあげるのがふさわしいと思うわ。私は何十年も経つてからアレックスに日本語で覚えさせたのよ。もちろんセリフも付けてね。だからあなた方はこれから幸せを掴まなくてはならないのよ。一子ちゃんや勝一君のためにもね。それにね、良さん。アヤコさんをこのまま放つておくとゲイルが横からさらつてしまつわよ。彼はね、今まで本気で人を好きになつたことがなかつたの。でもアヤコさんに対しても本気のようですからね。早く彼女を掴まないと大変なことになりますよ。ゲイルはビルの孫ですけれど、子供のいない私達夫婦を本当の親のように慕つてくれましてね、私達の近くに住んでくれてしまつちゅう行き来しているから毎日が幸せなのです。だから、薦に油揚げをさらわれないように注意して下さいね。

フウ・・・生きていて本当に良かつた。あの時良さんに助けてもらわなかつたら私はこんなに幸せな日々を送る事ができなかつたのですからね。あなたには感謝しきれないくらいですよ。さつ

きも言いましたが、今度はあなたの番です。一子ちゃんや勝一君のためにもね。・・・今では年が逆転してしまいましたけれど、良さんは永遠に私のお兄さんです。妹からのお願いです。どうか幸せになつてください。今回、日本の出版社の方がビルの交友関係を調べているとゲイルから聞いて、矢も盾もたまらず日本へ行きたいと言つたのは私です。彼は单なる付き添いのはずでしたが、日本へ来たことで理想の女性に巡り会い本当に嬉しいと言つておりました。

ゲイル、そうよね？・・・私は初七日が済んだらニュー・ヨークへ戻ります。アレックスつたら私がいないと淋しくてたまないと電話で泣きながら訴えていたの。早く帰つて来てくれつてうるさいのよ・・・あの頃良さんが持つていた携帯電話。当時はおもちゃにしか見えなかつたけれど、今は老若男女みんなが持つているものなのね。・・・本当に便利な世の中になつたわ。でもその便利さと引き換えに私は何を失つたのかしら。・・・何か大切なものを無くしたような気がする・・・わ・・・

話し終えた絹代は肩の荷が下りたのかハンカチでそつと目頭を押さえた。その後を引き継いだ形でゲイルが祖父ウイリアムの自分に託した想いを吐露した。

「・・・祖父は僕の父にRYOといつ名前を付けて鼓島で出会つたRYOのような人間にしたいと考えていました。けれど父は根つからのニコニコで祖父の教育方針にはことごとく反発したのです。そこで祖父は孫である僕に白羽の矢を立てたのです。両親とも仕事が忙しく、家にいることが稀だつたこともあり、僕の養育はほとんどこの絹代さん夫婦に委ねられていましたからそれが容易だつたのでしよう。小さい頃から聞かされていましたからそれと一緒に起つたことだと信じてはいませんでした。絹代さんから良という人物は僕の心の中に深く刻み込まれましたが、まさか現実に起つたことだと信じてはいませんでした。絹代さんから良という人は私達の世界の人間ではなく、未来から来た人なのだとそれこそ耳にタコができるくらい聞かされていましたからね。面と向かつてそんな作り話、誰が信用するものか！とは言えなかつたというの

が本音でしたけれど。でも本当の事だったのですね。今の僕の気持ちを何と表現したらいいのかわかりません。それにアヤコさんに出会ったことも僕の心を動かしました。でも綱代さんの話を聞いた今となつては良さんとアヤコさんの未来に幸あれと祈るばかりです。どうかアヤコさんを幸せにしてあげてください。お願いします。「綱代とゲイルの切なる願いに良のわくれ立つた心にゆるやかな日差しが染み込んでいった。

1週間後。東京に戻った良は、病院で再度検査を受けた。その結果が更に1週間後の今日わかるのだ。良は綾子と共に主治医である佐伯の診断を受けるべく病院に赴いた。

「笹崎さん。結果から申しますとですね、70%～80%の割合で元の状態に戻ったと申し上げて間違いはないと思われます。あの状態からこんなに早く元の状態に戻るなんてとても信じられませんが、ほぼ間違いありません。恐らく奥さんの看病のお陰でしょうね。感謝すべきですよ。笹崎さん。」

それまでの2人の葛藤を知らない佐伯は単純に綾子のお陰だと口にしたが、あえて良は反論しなかった。確かに綾子の存在が良の病を治す要因を作つたことに違いはないのだから。しかし隣に座つている綾子には佐伯の言葉が不満だったようだ。何か言おうとしたが、良が黙つたままなので言葉を無理に飲み込んだように見えた。

その後、これから先の治療方法をアドバイスされ2人は病院を後にした。

「どうした。何か不満でもあるのか？」

帰る道すがら、黙つたままの綾子にそのわけを尋ねると、

「不満もなにも良ちゃんの病気が治つたのは私のお陰じゃないわ。それなのにあの先生つたら私に感謝しきだなんて。ひどいわ！」

やはり佐伯の言葉に怒っていたのだ。

「ひどいもなにもないさ。オレだつてそう思つてる。おそらくお前には一生頭が上がらないよ。」

「えつ。一生？　あのね！　確かに友達ではいるつもりよ。でも一生面倒見るというのは無理な話だわ。未来の良ちゃんの奥さんが聞いたら絶対ただじゅすまないことよ！　わかってるの？　100%怒るわ

よ。 そんなこと言うもんじゃないわ・・・

最後の言葉はひどく淋しげに聞こえた。

「何を言つてるんだか。」

「え? 何よ。じゃどういう意味なの?」

「どうこうして。お前な、オレ達一緒になるだらう。未来の奥さんてお前のことじやないのか。それとも別にいるつていうのか? オレには全く心当たりがないけどな。」

「え? 何ですつて? 良ちゃんこそ変な事言わないよ。」

「お前、オレと一緒にになるのがそんなにイヤなのか?」

「え? だつて私達は一生友達のままだつて・・・え? いつ戻つたの

?」

「いつでじいちゃんの初七日の口さ。お前気付いてなかつたのか?

「気付いて・・・良ちゃん、何も言わなかつたじゃない! だから私これからずっと友達のままだつて自分に言い聞かせて・・・たのに・・・そんなこと言つなんて・・・」

「おま、泣くな! ひとが見てるだらう! 泣くなつて!」

人目も憚らず泣き出した綾子の手を素早く取り早足で歩き出す良。

「・・・まあ、今回はオレが悪いかもな。」

「かもですつて! もう! 絶対良ちゃんが悪いわよ! 泣くなだなんてよくも言えるわね!」

「わかった。わかったから・・・謝るよ。オレが悪かつた。この通り。」

急に立ち止まり良は頭を下げた。通りすがりの人々がジロジロと2人を見て行く。

“言わぬ後悔より言つた後悔だ。先に謝つて仲直り” 良の脳裏に祖父勝和の言葉ば響いた。

「もうやめて。こんなところで。」

「許してくれるのか。」

「わかりました。許します。だからもう頭を上げて。」

他人の視線を真っ向から受け、恥ずかしさの余り綾子は真っ赤になつていい。しかし良はどこふく風といった具合でニヤニヤ笑いながら頭を上げた。

「なら安心だ。お前が本気で怒ると閻魔大王も尻尾を振つて逃げて行く位怖いからな。」

「ひどいわ。まるで私が世の中で一番恐ろしい人間みたいな言い方して。」

そこで一円言葉を切り、改めて綾子は良に向かい合つた。

「・・・良ちゃん。・・・私にだけ教えて。おじいちゃんとの間に何があったのか。それどうして私とのこと元に戻す気になつたのか。」

「掛けようか。」

田の前の公園にベンチを見つけると、良は綾子を促し腰かけた。

「・・・前に鼓島で出会った3人の少年少女の話をしたことがあつたる。一子、絹代、勝一。ゲイルと一緒に来たのがその時の絹代ちゃんだったことはお前も聞いたはずだ。そして、まさかと思つたけど、オレのじいちゃんが勝一だったんだ。」

「えつ。それってどういうこと? 意味がわからないわ。」

「だから、鼓島で出会った2人と60年の月日を隔てた今、また出会つたんだ。」

「えつ? そ、そんな。あり得ないわ。そんな奇蹟みたいなこと。」

「オレだって最初は信じられなかつた。時間を遡る事だけでも非現実的なに、60年も年月があるのに携帯が通じたり。でもじいちゃんが大事に持つていた布袋、お前も見たことがあつただろ。いつかオレがいたずらにあれを持ち出そうとしてもすこく叱られた。あの袋。あの中味がこれだつたんだ。」

あれ以来、良は壊れた携帯を机身離さず持つていた。

「これつて・・・良ちゃんの携帯? だけど・・・」

「そう。腐つてるんだ。じいちゃんが子供の頃盗んだ。と、オレ宛の手紙に書いてあつた。」

そう言いながら良は勝和の手紙を綾子に見せた。

「・・・良ちゃん。」

予想はしていたものの、やはり読んでいる途中からその田には涙が溢れ出していた。

「オレ、その手紙を読んでじいちゃんの60年といつ田田の重さを感じた。じいちゃん。いや勝一はずっと悔恨の中で生きてきた。そつと知つてオレの心の中についた何かが碎けたような気がした。そ

の時お前の存在がオレの中で膨れ上がったんだ。・・・ゲイルが・・・奴の会社の日本支社で働かないかって誘つてくれたんだ。オレそこに世話にならうと思う。じいちゃんが死の間際に話してくれたおふくろに託そうとしていた夢を叶えてやりたいんだ。日本とアメリカの架け橋になるつていう夢をさ。そう決めた。・・・だからその夢を叶えるためにはどうしてもお前が必要なんだ。これは理屈じゃない。お前じゃないとダメなんだ。わかったか。これが復活の理由だ。

「良介やん。本当に私でいいの?」

「何度も言わせるな。」

綾子の涙顔をまともにみることができず、顔を真っ赤にしながら良は先になつて駆け出した。そしてつと立ち止まると、真っ青な空を見上げ呟いた。

「一子ちゃん。勝一。これでいいんだよな。いつかまたどこかで巡り会えたなら絹代ちゃんも入れて4人で酒でも飲もうな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4897e/>

いつか きっと

2010年10月11日23時39分発行